

# 西 夏 語 韻 図

## 『五音切韻』の研究(下)

西 田 龍 雄

〔ま え が き〕

本稿(上)において、筆者は西夏語韻書の系統について概観し、それらと対をなす韻図『五音切韻』の位置づけを試みた。そして現存する数種類のテキストを比較検討した。序文と二つの部分、韻表「九音之韻母纏繩順」と韻図「衆漂海入門」から成りたつ『五音切韻』は、西夏語の音形式を再構成するためには、欠かすことのできない重要資料である。

この韻図全体はこれまで未発表であったが、現存する数種類のテキストを補い合わせると、最後の三つの平声韻、95韻、96韻、97韻を除き、平声1韻・上声1韻から平声94韻(上声は86韻)までつなぎ得ることが、筆者のコズロフ資料の調査によって判明した。

筆者は、本稿において、各韻図が示す枠組みを、それより少し遡った時代に編纂された韻書『文海』の組織と照合することによって、解明しようとした。

西夏語の音形式は、『文海』などの韻書において与えられる反切を基準にすることによってはじめて確実に知ることができるが、その反切を整理する作業の詳細は、この韻図の枠組が解明されなければ、極めて困難になる。むしろ完全には解決され得ないと言ってもよい。

本稿(中)において、筆者は反切による音形式表示の原則を述べ、平声1韻・上声1韻から平声33韻・上声30韻までの韻図を取り上げ、韻図の枠組と『文海』の組織を照合して、西夏語のそれぞれの音節形式を再構成した。本稿(下)では、それにつづく平声34韻・上声31韻から、平声94韻(上声86韻)に及ぶ韻図を扱い、現存しない平声95韻以降の韻図を『文海』の組織から復元した。そして最後に『文海』の韻類全体にまたがる反切上字(=初頭音を表示する)の系聯表を掲げた。

ここで提供した結果は、西夏語の音組織を再構成するための基本的な材料となるであろう。

『五音切韻』「衆漂海入門」は、漢語の韻図を模倣して作られたものと考えられるけれども、その組み立て方はやや相違していて、そこでは無声無気音 p- f- w[m]- t- ʈ- k- ts- tʂ- ʃ- と l- r- ʒ- などの流風音と呼ぶ範疇に入る子音にはじまる音節のみを記入している。

35. 韻図35 平声34韻・上声31韻

『五音切韻』No. 620 の韻図35 (25b) は、西夏語平声34韻と上声31韻の特定の音節形式を図示したものである。

	𐰃	𐰄	𐰅	○	𐰆
	○	𐰇	○	○	○
	𐰈	○	𐰉	○	○
			○		
			○		
			𐰊		
			𐰋		

図35 平声34韻・上声31韻 No. 620

𐰈	○	𐰉	○	○
---	---	---	---	---

No. 621 三段目

𐰃	𐰄
○	𐰇
𐰈	

No. 7192

韻図第一段は、重唇・軽唇音，牙音，齒頭・正齒音および喉音の枠に西夏字が書かれており，舌頭・舌上音の枠には丸印がある。二段目は，齒頭・正齒音の枠に，三段目は牙音と喉音の枠にそれぞれ西夏字がある。五段目と六段目の流風音に配当された枠には，五段目の下方と六段目の上方に丸印が二つあるのみで西夏字は記入されていない。

この枠組は，西夏語のどのような形態を指示し，それが果して『文海』に記録された音節形式を特定の条件で見た数と一致するのであろうか。

『五音切韻』のそのほかの写本との異同を調べてみると，No. 623 (40a) と No. 624 (17b) の韻図は，上掲 No. 620 と合致し，No. 621 (24a) は，三段目の牙音の枠の文字が別の文字に替っている。この No.

621の牙音の枠の文字は，『文海』『文海雜類』の中には登録されていない。No. 7192 は，韻図の左の部分のみを残す断片であるが，文字の配置は，No. 620, 623, 624 と異同はない。

筆者は，平声34韻・上声31韻の韻母として，開口韻 -*ɿ*と合口韻 -*wɿ*を再構成した。この二つの韻母の弁別を

『文海』の反切によって確認したい。まず『文海』34韻の各小韻の代表字と反切，そしてそれらに相応すると考えられる上声韻形式を列举する。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
34.					𪛗	重唇 独	p- <i>ie</i>
					𪛘	重唇 独	ph- <i>ie</i>
1	𪛙	𪛚 𪛛	重唇 97	m- <i>ie</i>	𪛜	重唇 97	m- <i>ie</i>
2	𪛝	𪛞 𪛟	重唇 独	mb- <i>ie</i>	𪛠	重唇 独	mb- <i>ie</i>
3	𪛡	𪛢 𪛣	牙 19	k- <i>ie</i>	𪛤	牙 19	k- <i>ie</i>
4	𪛦	𪛧 𪛨	牙 独	kh- <i>ie</i>			
5	𪛩	𪛪 𪛫	正齒 48	tš- <i>ie</i>	𪛬	正齒 48	tš- <i>ie</i>
6	𪛭	𪛮 𪛯	正齒 77	š- <i>ie</i>			
7	𪛱	𪛲 𪛳	喉 24	ʔ- <i>ie</i>			
8	𪛷	𪛸 𪛹	喉 28	ʔy- <i>ie</i>			
9	𪛼	𪛽 𪛾	正齒 独	tš- <i>wie</i>			
10	𪛿	𪛺 𪛻	正齒 独	tšh- <i>wie</i>			
11	𪛾	𪛿 𪛺	正齒 独	š- <i>wie</i>			
12	𪛼	𪛽 𪛾	牙126	k- <i>ie</i> <sub>2</sub>	𪛿	牙127	k- <i>ie</i> <sub>2</sub>
13	𪛼	𪛽 𪛾	正齒 独	š- <i>ie</i> <sub>2</sub>	𪛿	正齒 独	š- <i>ie</i> <sub>2</sub>
14	𪛼	𪛽 𪛾	喉 独	ʔ- <i>ie</i> <sub>2</sub>	𪛿	流風	- <i>ie</i> <sub>2</sub>

上声31韻に所属する文字として 𪛿 mbie<部姓> が登録されているが<sup>(1)</sup> (3949)，これは平声34韻の 𪛿 mbie<部姓>と同じ文字である。『五音切韻』No. 623には，上声31韻の所属字に 𪛿 があるため，おそらくそれを書き誤ったのであると思われる。上表に 𪛿 を加えておく。

(1) さきに述べたように(本稿(中) p. 3)，ここで使う上声韻字は E. Кычанов, K. Б. Кепинг, В. С. Колоколов, А. П. Терентьева-Катански; *Море Письмен, часть 2. Москва 1969* に記載されたものを、『五音切韻』No. 623 に付けられた文字によって，筆者が校訂したものである。ここであげる番号は，*Море Письмен* で与えられた文字番号を示している。

上記の反切下字を帰納すると、つぎの三類になる。

反切下字	I a	𪛗 ⇌ 𪛘	b	𪛙 → 𪛚 ⇌ 𪛛	-ie
	II	𪛜 ⇌ 𪛝			- <sup>w</sup> ie
	III	𪛞 ⇌ 𪛟			-ie <sub>2</sub>

I類の a は重唇音と正歯音の音節に、b は牙音と喉音の音節に使われて、直接系聯はしないが、相補関係にあるため変例として扱い、共に開口韻 -ie を代表すると考える。II類は合口韻 -<sup>w</sup>ie を、III類はそれらと対立する -ie<sub>2</sub> を代表している。<sup>(2)</sup>

小韻12以降の牙音・正歯音・喉音の音節は、いずれも合口韻ではなかった。もし合口韻であれば、(1)それらに合口韻の反切下字を使っている、(2)小韻の順序が9, 10, 11よりも先に置かれている、(3)小韻11と13が重韻となる、の諸点で不合理である。さらに上の見方が正しいことは、『五音切韻』の韻図35における配置が証明する。I類の反切下字をもつ文字は韻図の一段目に、II類の反切下字の文字は二段目に配置されるのに対して、III類の反切下字は二段目ではなく、三段目に置かれているのである。

-ie<sub>2</sub> の実際の音価は、いまは明確には出来ないが

𪛗	šie	勝る	𪛜	š <sup>w</sup> ie	速い	𪛙	šie <sub>2</sub>	力が弱い
𪛛	kie	踈い	𪛟	kie <sub>2</sub>	臂			

の対立があったことは確かである。

韻図の一段目重唇音の枠にある𪛗は、『同音』旧版では𪛗、新版では𪛗の形になっている。(注字は新版の字形の方が正しい。) これは上声韻字で p<sup>w</sup>ie と読んだ。それに該当する平声韻字はなかった。

旧版『同音』正歯音類小類48は、所属字2字からなる小類であるが、新版で

(2) -ie<sub>2</sub> など -V<sub>2</sub> とした韻母の実際の形式はいまの段階では推定し難い。本稿(中) p. 8- を参照されたい。

はそれぞれ独字の項に所属し、また注字が入れ替っている。

旧版『同音』	𪗇	正齒 48	tšie (平34)	(笠を) かぶる
	𪗈		注(左) tšie (上31)	笠
	𪗉	正齒 48	tšie (上31)	笠
	𪗊		注(左) tšhiow (上43)	(笠を) かぶる
新版『同音』	𪗋	正齒 独	tšie (平34)	(冠を) いただく
	𪗌		注(右) piu (上52)	冠
	𪗍	正齒 独	tšie (上31)	笠
	𪗎		注(左) tšhiow (上43)	(笠を) かぶる

西夏文『慈悲道場懺法』に𪗌𪗋 <冠を戴く>の用例がある。したがって、平声 tšie は動詞、上声 tšie は名詞であったことが確認できる。また上声43韻の𪗊 tšhiow も動詞で、<笠をかぶる>を意味した。『同音』新版旧版共に独字の項に𪗊が登録されている。その注字𪗈はさきに示した tšie (上31) <笠>である。なおこの西夏字は<人間>𪗉の頭に冠 𪗌をつけた形をとっている。

この西夏語の<笠>と<笠をかぶる>の対立は、ビルマ語やビス語のつぎの形態に対応する。

	西夏語	ビルマ語	ビス語
笠	tšie (上声)	*chɔŋg	tšɔŋg <sup>(3)</sup>
笠をかぶる	tšie (平声)	chɔŋg <sup>2</sup> -sañ	tshòŋg-nge

『文海雜類』には、この韻類に属するつぎの二字が登録されている。

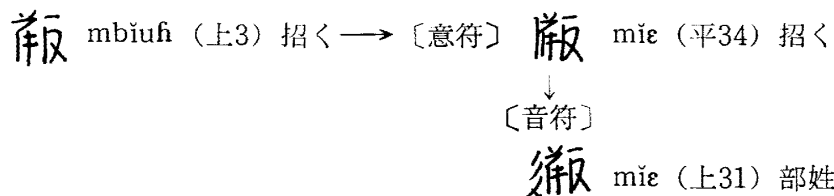
𪗏	𪗐	平34上	ñie	輪	正齒 独
𪗑	𪗒	上31	˦dʒie	信じる	正齒 独

<輪>の反切下字には、上声韻字が使われず、平声韻字と上(声)の注をも

(3) この tšɔŋg はタイ語からの借用語であろう。期待できるビス語形として \*ang-tshòŋg が考えられる。形式が類似することから、タイ語形と交替し易かったのでであろう。西田龍雄「ビス語の系統」『東南アジア研究』4巻3号 1966参照。

って指示する。

小韻1の上声字の派生関係は、つぎのように分析できる。



小韻9 𪗇 tšʷiε (平34) <雷音が鳴る>は、おそらく 𪗇 kiε (平60) <雷が鳴る>と関係する。後者 kiε は 𪗇 niɸ (平14) <雷>から派生した文字である。

小韻10 𪗇 tšʷiε と小韻11 𪗇 šʷiε は同義語で、<速い>を意味し、字形は 𪗇 音と 𪗇 速から出来ている。

𪗇 の略形 𪗇 と音の傍 → tšʷiε

𪗇 の略形 𪗇 と音の偏 → šʷiε

流風音類に属する上声字 𪗇 の初頭音は推定する根拠に欠ける。

平声34韻・上声29韻の韻母と声母の連続関係を表示するとつぎのようになる。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iε	p-ph- m-mb-	—	—	—	k-kh-	—	tš-š- ʰdž-ň-	ʔ-ʔy-	—
-ʷiε	—	—	—	—	—	—	tš-tšh- š-	—	—
-iε <sub>2</sub>	—	—	—	—	k-	—	š-	ʔ-	?

No. 620	ʔiε	tšʷiε	kiε	○	piε
	○	tšʷiε	○	○	○
	ʔiε <sub>2</sub>	○	kiε <sub>2</sub>	○	○
			○		
			kiε (平声34韻代表字)		
		kiε (上声31韻代表字)			

平声34韻・上声31韻の韻母は、軽唇音、舌頭音、舌上音、齒頭音を初頭音としなかったことがわかる。

韻図35を、筆者の再構成形式にしたがって書き改めると、左

のようになる。

36. 韻図36 平声35韻・上声32韻

韻図36は、西夏語平声35韻と上声32韻の特定の形式を図示したものである。

○	𐵇	○	○	𐵇	
○	𐵇	○	○	○	
○	𐵇	○	○	○	
		𐵇	○		
		○	○		
		𐵇			
		𐵇			
		𐵇			

図36平声35韻・上声32韻 No. 620

No. 620 (26a), No. 623 (40b), No. 624 (18a), No. 621 (24b) はいずれも文字の配置は一致していて、一段目は、重唇・軽唇音の枠と歯頭・正歯音の枠に、二段目と三段目は、歯頭・正歯音の枠にのみそれぞれ西夏字一字が記入されている。流風音類の枠は、五段目の上方左側にのみ西夏字が書かれる。『文海』の平声35韻は、はじめの2つの小韻(所属字5字)にあたる部分が残存するのみで、以下は散佚しているために、この韻類全体の小韻の数と反切は不明である。したがって、それに相応する上声韻形式の推定も、またこの韻図の枠組みの推定も確実な根拠を欠くことになる。しかし平声35韻に所属する文字は、No. 621の『五音切韻』から判明するから、上述のような反切を根拠とした場合に比べて、確実性では劣るけれども、韻図における配置とそのほかの転写資料にもとづいて、各文字の音形式を大きい誤りなしに推定することが可能である。

この韻図36と韻図登録文字の『同音』における所属類を基に、この韻類の韻母は、軽唇音、正歯音、流風音以外の初頭音とは連続しなかったこと、少なくとも  $tʃ-$  には、 $tʃ-$   $tʃ^*$ -  $tʃ_{-2}$  の三形式の対立があったことがわかる。

筆者は以前平声35韻・上声32韻の韻母として  $-ɛfi$  を推定したが、この韻図

(4) 『文海』の欠けた個所については、拙著『西夏文字一解読のプロセス』玉川大学出版部 1980. p. 104- を参照されたい。

によると、-εfi のほかに、合口韻 -<sup>w</sup>εfi と -εfi<sub>2</sub> の二形式も含まれていたと考えざるを得なくなった。

つぎに推定できる平声韻の小韻とそれに相応すると思われる上声韻小韻を列挙する<sup>(5)</sup>。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
35. 1	𪛗	𪛗𪛗	軽唇 4	f-εfi	𪛗	軽唇 4	f-εfi
2	𪛘	𪛘𪛘	正歯 25	tš-εfi	𪛘	正歯 26	tš-εfi
3	𪛙	(欠)	正歯 85	tšh-εfi	𪛙	正歯 86	tšh-εfi
4	𪛚	(欠)	正歯 3	š-εfi	𪛚	正歯 独	š-εfi
5	𪛛	(欠)	正歯 独	tš-εfi <sub>2</sub>	𪛛	正歯 67	tš-εfi <sub>2</sub>
6	𪛜	(欠)	正歯 独	tšh-εfi <sub>2</sub>			
7	𪛝	(欠)	流風 独	ž- <sup>w</sup> εfi			
8	𪛞	(欠)	正歯 独	tš- <sup>w</sup> εfi	𪛞	正歯 78	tš- <sup>w</sup> εfi

小韻1の反切下字 𪛗 は、平声36韻に属している。軽唇音 fefi (平35) は、fefi (平36) とほとんど弁別できなかったのであろうか。(p.13 韻図 No.624)

小韻3の平声韻と上声韻の配分は、韻図に記入されている韻類代表字と、『同音』における小類配置原則を根拠に決定した。

小韻7の文字は、韻図と『同音』共に流風音類に所属させている。類似した字形の文字が正歯音類独字にあって紛らわしい。

𪛝 ž<sup>w</sup>εfi (平35) 瘞攣 流風音類独字

𪛞 ŋ<sup>w</sup>aw (上20) 蹄, 瓜 正歯音類独字『文海雜類』

『文海雜類』には、平声35韻・上声32韻の韻母をもつつぎの文字が登録されている。

(5) 注(1)にあげた *Море Письмен* に平声35韻の所属字が掲げられているが (p. 181—), はじめの軽唇音小類4の二字と正歯音小類25の三字が欠けている。

𪛗 𪛘。𪛙 𪛚 𪛛





	翯	翯	翯	翯	翯
	○	○	翯	○	○
	○	翯	○	翯	○
	○	○	○	翯	○
			○ 翯		
			翯		
			翯		
			翯		

図37 平声36韻・上声33韻 No. 620

を推定していたが、この韻図の枠組から、そのほかに  $-ef_2$  と  $-^wef_2$  が必要なことがわかった。

しかし、『文海』平声36韻は、残念乍らはじめの部分が欠けているために、全体の小韻の設定と反切下字の系聯は完璧にはいかない。

いま推定できる小韻を含めて、平声韻各小韻の反切とそれに相応すると考えられる上声韻小韻の再構成形式をあげてみる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
36. 1	翯	欠	重唇 33	p-ef	翯	重唇 33	p-ef
2	翯	欠	重唇 26	ph-ef	翯	重唇 26	ph-ef
3	翯	欠	重唇 20	m-ef	翯	重唇 20	m-ef
4	翯	欠	重唇 8	mb-ef	翯	重唇 8	mb-ef
5	翯	欠	舌頭 83	t-ef	翯	舌頭 82	t-ef
6	翯	欠	舌頭 15	th-ef	翯	舌頭 15	th-ef
7	翯	欠	舌頭 37	n-ef	翯	舌頭 37-38	n-ef
					翯	舌頭 96	n-ef
8	翯	欠	舌頭 44	nd-ef	翯	舌頭44~45	nd-ef
9	翯	欠	牙 52	k-ef	翯	牙 52	k-ef

10	緘	緘	緘	牙 20	kh-ef	緘	牙 20	kh-ef
11	訖	緘	冬	牙 独	ŋg-ef			
12	訖	緘	緘	牙 57	ŋg-ef	緘	牙 57	ŋg-ef
13	訖	緘	緘	齒頭 1	ts-ef	緘	齒頭 1	ts-ef
14	訖	緘	緘	齒頭 26	tsh-ef	緘	齒頭 26	tsh-ef
15	訖	緘	冬	齒頭 73	s-ef	緘	齒頭 73	s-ef
16	緘	緘	緘	齒頭 2	s-ef			
17	緘	緘	冬	喉 4	ʔ-ef			
18	緘	緘	冬	喉 独	ʔ-ef	緘	喉 71	ʔ-ef
19	緘	緘	緘	喉 54	ʔ-ef	緘	喉 独	ʔ-ef
20	緘	緘	緘	流風108	l-ef	緘	流風108	l-ef
21	緘	緘	緘	流風 独	l-ef			
22	緘	緘	緘	牙180	k- <sup>w</sup> ef	緘	牙180	k- <sup>w</sup> ef
23	緘	緘	緘	齒頭 独	tsh- <sup>w</sup> ef			
24	緘	緘	緘	齒頭 独	s- <sup>w</sup> ef			
25	緘	緘	緘	舌頭 独	t-ef <sub>2</sub>			
26	緘	緘	緘	舌頭143	n-ef <sub>2</sub>			
27	緘	緘	緘	舌頭 独	n-ef <sub>2</sub>			
28	緘	緘	緘	齒頭 独	ts-ef <sub>2</sub>			
29	緘	緘	緘	牙 46	ŋg-ef <sub>2</sub>			
30	緘	緘	緘	齒頭112	s-ef <sub>2</sub>			
31	緘	緘	緘	齒頭112	s-ef <sub>2</sub>			
32	緘	緘	緘	流風 独	l-ef <sub>2</sub>			
33	緘	緘	緘	舌頭 96	n- <sup>w</sup> ef <sub>2</sub> (?)			

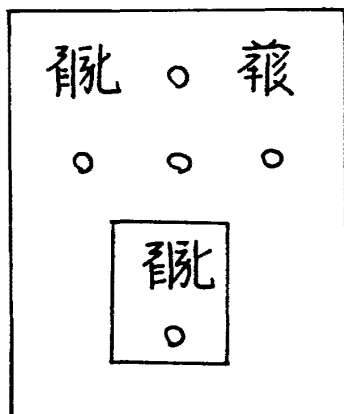


I 類の開口韻の反切下字をもつ文字は韻図一段目に、II 類の合口韻の文字は韻図二段目に、III 類  $-ef_2$  は韻図三段目にそれぞれ配置されている。この  $-ef_2$  をとる音節は無声無気音以外の初頭音に意外と多いのである。四段目に置かれた西夏字は、『同音』『文海』『文海雑類』いずれにも登録されていない。おそらく  $t^r ef_2$  を表記したのであろう。これは小韻33の代表字に手偏がついた形である。

流風音類の五段目上方右側は  $lef_1$  を、六段目上方中央は  $lef_2$  を表示したものと考えられる。

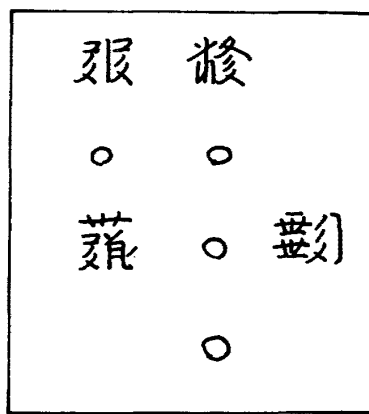
No. 620 以外の韻図に見られる文字配分の異同をあげておく。

No. 623 (42a) 部分



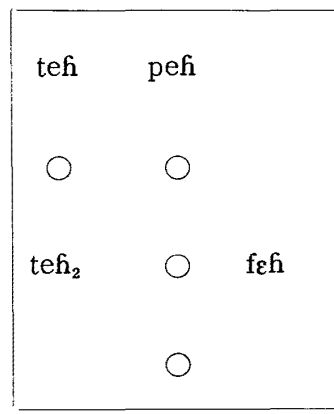
中央の枠とその中の文字はあとかから書き入れられたもの

No. 624 (19b) 部分



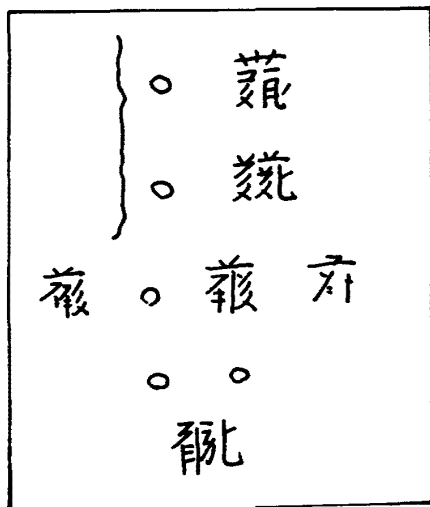
三段目丸印の右側に、平声35韻の文字  $fefi$  が書き込まれている

No. 624 (19b)



$fefi$  (平35) は平声36韻の反切下字をもつ (p. 8)

No. 621 (25a) 部分



舌頭音類の2字が重唇音類の枠に書き入れられている。流風音類の欄外左右には書き誤った文字がある。

欄外に書き入れられた文字は、多くの場合、その枠にはまる形式の音注乃至はそれと近似した音形式を示している。後者の場合、あとで見ると、韻図作成当時の西夏語韻類相互の関係をj知る上で、極めて有力な根拠を提供する。

『文海雑類』には、平声36韻・上声33韻に属するつぎの二字が登録されている。

𪚩 𪚪𪚫 (上33) ʔdʒɛfi 別の cf. WrT *gzhan*

𪚬 𪚭𪚮 (平36) lefi 広い WrB *kyay*<*klay*

つぎに平声36韻・上声33韻の韻母と声母の連続関係を表示すると、これらの韻母は、軽唇音、舌上音、正歯音とは全く連続しなかったことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɛfi	p-ph- m-mb-	—	t-th- n-nd-	—	k-kh- ŋg-	ts-tsh- ʔdz-s-	—	ʔ-	l-
-ʔɛfi	—	—	—	—	k-	tsh-s-	—	—	—
-ɛfi <sub>2</sub>	—	—	t- n-	—	ŋ-	ts-s-	—	—	l-
-ʔɛfi <sub>2</sub>	—	—	t- n-	—	—	—	—	—	—

No. 620

ʔɛfi	tɛfi	kɛfi	tefi	pefi
○	○	kʔɛfi	○	○
○	tɛfi <sub>2</sub>	○	tefi <sub>2</sub>	○
○	○	○	tʔɛfi <sub>2</sub>	○
	○	lefi		
	○	○		
		lefi <sub>2</sub>		
		○		
		tshefi (平声36韻代表字)		
		tshefi (上声33韻代表字)		

韻図37を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

小韻33は、反切下字 -ɛfi をもち、反切上字は n- と系聯するが、実際には nʔɛfi<sub>2</sub> であつたのではないかと疑える。

### 38. 韻図38 平声37韻・上声34韻

韻図38は、西夏語平声37韻と上声34韻の特定の音節形式を図示したものである。

No. 620 (27a) の韻図では、第一段目の舌頭音・舌上音の枠と二段目の牙音の枠、そして五段目右上の流風音の枠に西夏字が書かれている。No. 623 (43b) と No. 624 (20a 上段) はいずれも No. 620 と同じ形をとる。しかし No. 621 (25b) では、一段目の文字が重唇・軽唇音の枠に置かれている。この事実は単なる書き誤りなのかそれとも依拠した西夏語の方言的な差異を反映しているの

○	○	○	𪛗	○	
○	○	𪛗	○	○	
		○𪛗			
		𪛗			
		𪛗			

図38 平声37韻・上声34韻 No. 620

○	○	○	○	𪛗
○	○	𪛗	○	○

No. 621 (部分) 一段目と二段目

かいまは決定し難い(cf. (中)p. 21 etc)

筆者は平声37韻・上声34韻の韻母として、開口韻 -e と合口韻 -<sup>w</sup>e を推定した。しかし、『文海』の反切によると、この韻類には、これらの韻図が登録する無声無気音にはじまず音節はなく、また舌頭・舌上音と牙音の枠に記入されている文字は、『文海』『文海雑類』には含まれておらず、『同音』の中にも見出せない。おそらくそれらは後の時代に te, k<sup>w</sup>e を表記するために作られた

字形であろう。

『文海』の平声37韻に属する小韻代表字とその反切およびそれらと対応すると考えられる上声韻字を列挙しよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
37. 1	𪛗	𪛗 𪛗	重唇 72	ph-e	𪛗	重唇 72	ph-e
2	𪛗	𪛗 𪛗	重唇 独	mb-e	𪛗	重唇 85	mb-e
3	𪛗	𪛗 𪛗	舌頭 独	th-e	𪛗	舌頭 30	th-e
4	𪛗	𪛗 𪛗	舌頭 独	n-e	𪛗	舌頭 91	n-e
					𪛗	牙 独	ŋ-e
5	𪛗	𪛗 𪛗 𪛗	牙105	kh- <sup>w</sup> e 平	𪛗	牙 独	kh- <sup>w</sup> e
6	𪛗	𪛗 𪛗	流風 独	l-e	𪛗	流風 独	l-e

小韻3の平声韻と上声韻の相応は、韻図の代表字から容易に判断できる。

小韻5の平声合口韻は、牙音 kh<sup>w</sup>e 一類であるために、上声の合口韻字を反切下字として使い、平と注記したのである。

小韻5 𪚩𪚪𪚫 𪚬𪚭𪚮 khüf (平7) -n<sup>w</sup>e (上34) 平 > kh-<sup>w</sup>e (平37)

上記の反切下字を帰納すると、つぎの二類になる。

反切下字 I 𪚯 ⇌ 𪚰 -e

II 𪚱(-𪚲) ⇌ 𪚳 -<sup>w</sup>e

I類は開口韻 -e を、II類は合口韻 -<sup>w</sup>e をそれぞれ代表する。

『文海雑類』には、つぎの三字が登録されている。

𪚴 <sup>n</sup>dze (上34) 馬に乗る (動詞)

𪚵 <sup>n</sup>dze (平37) 乗馬 (名詞)

𪚶𪚷𪚸𪚹𪚺 乗ることの意也, <sup>ʔ</sup>a-<sup>n</sup>dze (上34) =<sup>n</sup>dze (平37)

𪚻 <sup>n</sup>dze (平37) 争う

𪚼𪚽𪚾𪚿𪚺 和せず事を争う也

平声37韻・上声34韻の韻母と声母の連続関係を見ると、これらの韻母は軽唇音・舌上音、齒頭音・正齒音・喉音とは全く結び付かないことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-e	ph-mb-	—	th-n-	—	ŋ-	<sup>n</sup> dz-	—	—	l-
- <sup>w</sup> e	—	—	n-	—	kh-	—	—	—	—

No. 620

○	○	○	te	○
○	○	k <sup>w</sup> e	○	○
		○	le	
		○	○	
			the (平声37韻代表字)	
			the (上声34韻代表字)	

韻図38を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。te と k<sup>w</sup>e はその韻図の位置から推定したものである。



39. 韻図39 平声38韻

韻図39は、西夏語平声38韻の特定の音節形式を図示したものである。

	○	○	韻	○	○
			○		
			○		
			韻		
			韻		

No. 620 の韻図39には、一段目の牙音の枠に西夏字一字が置かれているのみである。No. 623 (44a), No. 624 (20a 下段), No. 621 (26a) は、No. 620 の形態と一致する。

『文海』の平声38韻には、全体で11字が所属し、六つの小韻に分けられる。筆者はその韻母を  $-e^y$  と推定した。それに相応する上声韻代表字がなく、またこの韻図にも上声韻代表字は記入されていない。しかし、実際には平声38韻に相応する上声韻字は二字あった。

まず『文海』に記録される平声韻各小韻の代表字と反切そして『同音』の所属小類番号を列挙する。

図39 平声38韻 No. 620

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	旧再構成形式	改訂形式
38. 1	徽	徽 龔	重唇 独	$mb-e^y \rightarrow mb-ie^y$	
2	韻	韻 蔣	牙186	$k-e^y \rightarrow k-ie^y$	
3	蔣	蔣 蔣	牙164	$kh-e^y \rightarrow kh-ie^y$	
4	蔣	蔣 蔣	牙 79	$\eta-e^y \rightarrow \eta-ie^y$	
5	韻	韻 蔣	正齒 独	$\check{s}-e^y \rightarrow \check{s}-ie^y$	
6	韻	韻 韻	重唇142	$mb-e_y \rightarrow mb-ie^y$	上

上記の反切下字は、つぎのように系聯して平声34韻とつながる。



40. 韻図40 平声39韻・上声35韻

韻図40は、西夏語平声39韻・上声35韻の特定の音節形式を図示したものである。

○	𐰇	○	○	○	
𐰇	𐰇	○	○	○	
		𐰇	𐰇		
		𐰇			
		𐰇			
		𐰇			
		𐰇			
		𐰇			

図40 平声39韻・上声35韻 No. 620

○	𐰇	○	○	○
𐰇	𐰇	○	○	○
	𐰇			

No. 621 (部分) No. 620 がない文字は、上声44韻 *siofi* である。

No. 620 (28a) は一段目の齒頭・正齒音の枠と二段目の齒頭・正齒音と喉音の枠に西夏字がある。また流風音は五段目上段左右に二字が置かれる。No. 623 (44b), No. 624 (21b上段) は、No. 620 と一致し、No. 621 (26b) は左下のようになっている。

齒頭・正齒音の二段目の文字が三段目に置かれ、二段目には別の文字(上声44韻)が書き込まれている。この韻類とのかかわり合いは明瞭ではないが、その文字は *siofi* (上) と読まれた。

筆者は平声39韻・上声35韻の韻母として、開口韻 *-iefi* のみを推定していた。

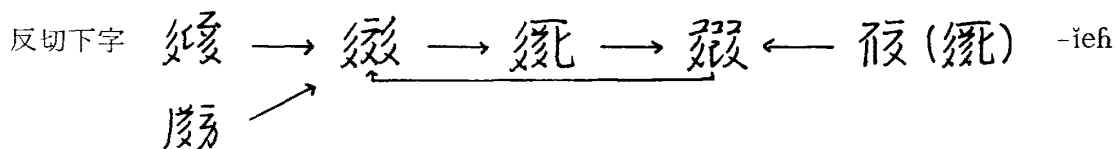
この韻図の配置から見て、開口韻のほかに合口韻もあったと推定すべきであろうか。

まず『文海』の平声韻小韻代表字と反切ならびにそれらに相応すると考え得る上声韻形式を列挙する。

(7) No. 624 の韻図では、20b が二枚あり、平58・上51韻の韻図が混入する。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
39. 1	𦉳	𦉳𦉳	正齒 独	tsh-ief			
2	𦉳	𦉳𦉳	重唇 独	ph-ief			
3	𦉳	𦉳𦉳	重唇 62	mb-ief	𦉳	重唇 61	mbi-ef
4	𦉳	𦉳𦉳	重唇 53	m-ief			
5	𦉳	𦉳𦉳	重唇 独	m-ief	𦉳	重唇 90	m-ief
6	𦉳	𦉳𦉳	舌頭 9	nd-ief	𦉳	舌頭 13	nd-ief
7	𦉳	𦉳𦉳	舌頭 10	nd-ief			
8	𦉳	𦉳𦉳	舌頭 独	n-ief			
9	𦉳	𦉳𦉳	牙 74	kh-ief			
10	𦉳	𦉳𦉳	牙 40	ŋ-ief			
11	𦉳	𦉳𦉳	齒頭 独	ts-ief			
12	𦉳	𦉳𦉳	齒頭 76	tsh-ief	𦉳	齒頭 76	tsh-ief
13	𦉳	𦉳𦉳	齒頭 3	s-ief	𦉳	齒頭 3	s-ief
14	𦉳	𦉳𦉳	喉 57	ʔ-ief			
15	𦉳	𦉳𦉳	流風	l-ief	𦉳	流風	l-ief
					𦉳	流風129	l-ief

上記の反切下字を帰納すると、つぎのように一類に系聯する。



この一類は開口韻 -ief を代表していると見てよく、反切からは合口韻の存在を推定する根拠を発見できない。この韻図40では、二段目が開口韻を代表していて、一段目の文字は『文海』『文海雑類』『同音』にも登録されておらず誤ってここに記入されたものと考えられる。

韻図五段目上方左側の文字は、流風音の上声字であるが、これも合口韻では

なかった（漢字表音 頷，チベット文字表音 lde, zleh）。

そのほか、『文海雜類』には，この韻類の反切下字をもつつぎの三字がある。

逐	𪛗𪛗	ñief (平39)	正齒音独	住む
𪛗	𪛗𪛗	ʰdzief (上35)	齒頭音91	師
𪛗	𪛗𪛗	ʰdzief (上35)	齒頭音91	教える

平声39韻・上声35韻の韻母と声母の連続関係を表示すると，つぎのようになる。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ief	ph-mb- m-	—	nd-n-	—	kh-ŋ-	ts-tsh- s-ʰdz-	tʃh- ñ-	ʔ-	l-ł-

No. 620

○	?	○	○	○
ʔief	tsief	○	○	○
	hief	lieh		
	○	○		
	sief (平声39韻代表字)			
	sief (上声35韻代表字)			

この韻母は，輕唇音と舌上音には連続しなかったことがわかる。

筆者の再構成形式をもって，韻図40を書き改めると，左のようになる。

#### 41. 韻図41 平声40韻

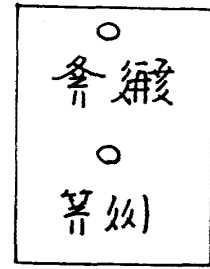
韻図41は，西夏語平声40韻の特定の音節形式を図示したものである。

No. 620 (28b) では，一段目齒頭・正齒音の枠と，二段目の重唇・輕唇音の枠にそれぞれ西夏字がある。流風音は，五段目のみを使い，上方左右に二字書き入れられている。No. 621 (27a)，No. 623 (46a) は，No. 620 と一致するが，後者には左側に書き込みがある。No. 624 (21b) は重唇・輕唇音の枠に文字の記入がない。筆者は平声40韻に開口韻 -ie を推定していたが，実際にはそれにあたる合口韻 -wie もあったことが、『文海』の反切とこの韻図の配置から確認できる。

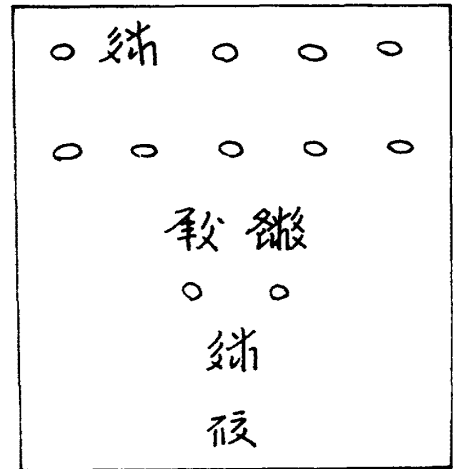
	○	鋪	○	○	○
	○	○	○	○	葭
			教	徽	
			○	○	
			鋪		
			夜		

図41 平声40韻 No. 620

No. 623  
(部分)



上方(右) 力  $\gamma k i \dot{e}$   
(左) 蓋  
下方の二字は不詳



No. 624 重唇・輕唇音二段目の文字  
が欠ける

『文海』の小韻代表字と反切をあげてみる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式
40. 1	徽	徽 鋪	重唇 独	ph- $\dot{i}e$
2	葭	葭 鋪	舌頭159	nd- $\dot{i}e$
3	葭	葭 鋪	重唇132	m- $\dot{i}e$
4	鋪	鋪 徽	齒頭 独	ts- $\dot{i}e$
5	徽	葭 鋪	流風 独	l- $\dot{i}e$
6	葭	葭 教	輕唇 15	w- $\dot{i}e$
7	教	葭 葭	流風113	l- $\dot{w}ie$

上記の反切下字を整理すると、つぎの二類に帰納できる。

反切下字 I 鋪  $\rightleftharpoons$  徽 - $\dot{i}e$  II 葭  $\rightleftharpoons$  教 - $\dot{w}ie$

I 類は開口韻 *-ie* を, II 類は合口韻 *-wie* を代表した。小韻 6 は軽唇音と連続する音節で, 本来合口韻ではないが, 合口韻の反切下字をとり, No. 620 の韻図でも合口韻の枠に入れられている。No. 624 の韻図ではその文字が記入されていないのは, それが開口韻として扱われたためであろう。

実際に開口韻と合口韻の対立を示すのは, 流風音 *l-* を初頭にもつ音節だけである。

徽 *lie* 太い, 大きい

𪛗 *l<sup>w</sup>ie* 迅速

『文海雑類』には, この韻類の文字を反切下字とするつぎの二字が登録されている。

𪛗 𪛗 *\*dzie* (平40) 衰える

𪛗 𪛗 *\*dzie* 上 (平40の上声) 風貌

あとの文字の反切から, 平声40韻にもそれに相応する上声の形式があったことがわかる。

平声40韻の韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
<i>-ie</i>	ph-m-	w-	nd-	—	—	ts- <sup>w</sup> dz-	—	—	l
<i>-<sup>w</sup>ie</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	l

No. 620

○	tsie	○	○	○
○	○	○	○	wie
	<i>l<sup>w</sup>ie</i>	<i>lie</i>		
	○	○		
		tsie (平声40韻代表字)		
		平		

この韻母は, 舌上音, 牙音, 正齒音, 喉音とは全く連続しなかった。

韻図40を筆者の再構成形式に書き改めると, 左のようになる。

*wie* は韻図が作成された時に

は, すでに *mie* になっていたかも知れない。

42. 韻図42 平声41韻・上声36韻

韻図42は、西夏語平声41韻・上声36韻の特定の音節形式を図示したものである。

○	𐰇	○	○	𐰇	
𐰇	𐰇	𐰇	○	○	
○	𐰇	○	○	○	
		○			
		○			
		𐰇			
		𐰇			

図42 平声41韻・上声36韻 No. 620

る。No. 620 の韻図 (29a) では、一段目は重唇・軽唇音と歯頭・正歯音の枠、二段目は牙音、歯頭・正歯音の枠と喉音の枠に、三段目は歯頭・正歯音の枠に、それぞれの西夏字がある。流風音は、五段目の下方と六段目の上方に丸印があるのみで、文字は書かれていない。No. 621 (27b), No. 623 (46b) は No. 620 と一致するが、No. 624

𐰇	○	𐰇
	𐰇	
	○	
	𐰇	

No. 624 (部分 書き込まれた文字)

(22a) には、重唇・軽唇音の欄と喉音の欄に、別の書き込みがある。

韻図のこの枠組は、『文海』の小韻の分類と一致するであろうか。筆者は平声41韻・上声36韻の韻母として開口韻 -eN のみを推定していたが、『文海』の反切と韻図におけるこの配置から、そのほかに合口韻 -<sup>w</sup>eN と、それらに対立する -eN<sub>2</sub> があったことがわかる。

『文海』の平声韻小韻代表字とその反切、そしてそれらに相応すると考えられる上声韻字を列挙する。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
41.					𐰇	重唇105	p-eN
1	𐰇	𐰇	𐰇	牙122			kh-eN



2	𪛗	𪛗	𪛗	正齒 独	tš-en				
3	𪛘	𪛘	𪛘	舌上 独	n <sub>ɣ</sub> -en	𪛘	舌上 独	n <sub>ɣ</sub> -en	
						𪛙	正齒 独	tšh-en	
4	𪛚	𪛚	𪛚	正齒(新) 78	š-en	𪛚	正齒	š-en	
5	𪛛	𪛛	𪛛	牙 151	k- <sup>w</sup> en	𪛛	牙 独	k- <sup>w</sup> en	
6	𪛜	𪛜	𪛜	正齒 独	tš- <sup>w</sup> en				
7	𪛝	𪛝	𪛝	喉 独	x- <sup>w</sup> en	𪛝	喉 72	x- <sup>w</sup> en	
8	𪛞	𪛞	𪛞	喉 独	ʔ- <sup>w</sup> en	𪛞	喉 独	ʔ- <sup>w</sup> en	
9	𪛟	𪛟	𪛟	正齒 独	tšh-en <sub>2</sub> 平	𪛟	正齒 独	tšh-en <sub>2</sub>	

上記小韻の反切下字を整理すると、つぎの三類に分れる。

反切下字	I	𪛚 ⇌ 𪛗	-en
	II	𪛛 ⇌ 𪛞	- <sup>w</sup> en
	III	𪛟	-en <sub>2</sub>

I 類は開口韻 -en, II 類はその合口韻 -<sup>w</sup>en, III 類はそれらと対立する -en<sub>2</sub> を代表していた。最後の文字は上声韻であるために、平の注がついている。III 類の平声韻 -en<sub>2</sub> は小韻一つであるから、その反切下字に上声韻字を選び、平の注をつけたのである。

この韻母と声母の連続関係を表にすると、つぎのようになる。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-en	p-	—	—	n <sub>ɣ</sub> -	kh-	—	tš-tšh-š-	—	—
- <sup>w</sup> en	—	—	—	—	k-	—	tš-	x-ʔ-	—
-en <sub>2</sub>	—	—	—	—	—	—	tš-tšh-	—	—

これらの韻母は、輕唇、舌頭、齒頭、流風の各音類の子音とは全く結びつかなかったことがわかる。また tš- を初頭にもつ音節のみに、三種の韻母の対立が認められた。しかし、tšen<sub>2</sub> をもつ形態素形式は不明である。

𦉳 tʂen (平) 襟巻き

𦉴 tʂʷen (平)

𦉵 tʂhen<sub>2</sub> (平) 繩

最後の単語は、漢語 繩 からの借用形であるかも知れない。この韻母をもつ形式の中で、そのほか借用語ではないかと疑える単語に、𦉶 tʂen(平) 生, 𦉷 tʂen (平) 獸 (チベット語 *gcan-gzan* 猛獸 cf. 漢語 牲) がある。

韻図42を筆者の再構成形式をもって書き改めると、下のようになる。韻図の

No. 620

○	tʂen	○	○	pen(上)
ʔʷen	tʂʷen	kʷen	○	○
○	tʂen <sub>2</sub>	○	○	○
		○		
		○		
		šen (平声41韻代表字)		
		ʂen (上声36韻代表字)		

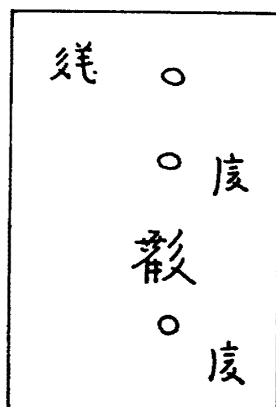
𦉶は『文海』『文海雜類』『同音』いずれにも登録されていないが、tʂen<sub>2</sub>であったであろうと推定できる。なお重唇音 pen は上声韻の形式である。

43. 韻図43 平声42・上声37韻

韻図43は、西夏語平声42韻・上声37韻の特定の形式を図示したものである。No. 620 の韻図 (20b) では、一段目と二段目は共に歯頭・正歯音と喉音の枠に、三段目はすべての枠に、そして四段目は歯頭・正歯音の枠にそれぞれ西夏字がある。流風音には六段目があてられ、上方左右に二字書き込まれ、下方左右には丸印が二つある。No. 624 (23b) と No. 623 (48a) は No. 620 と一致するが、No. 621 (28a) では重唇・軽唇音の枠に 𦉸 <有> の字が二字書き入れ

𦉶	𦉷	○	○	○
𦉸	𦉹	○	○	○
𦉺	𦉻	𦉼	𦉽	𦉾
○	𦉿	○	○	○
		𦉿	𦉽	
		𦉿		
		𦉿		

図43 平声42韻・上声37韻 No. 620



No. 621 (部分)  
左上は lu(上1)

られている。

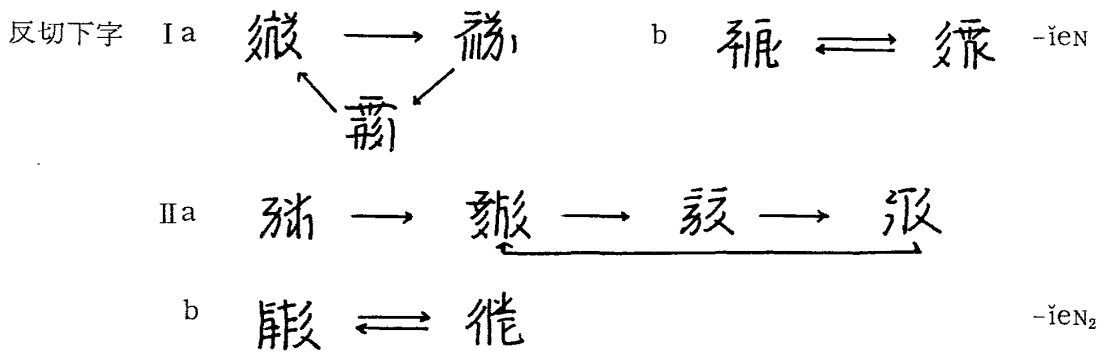
この韻図の枠組が『文海』によって代表される西夏語の韻組織と果して合致するものなのかをつきに検討したい。筆者は平声42韻・上声37韻に開口韻 -ien のみを推定していたが、そのほかの韻母も含まれていることがはっきりした。

『文海』に記録される平声韻各小韻の代表字と反切、そしてそれらに相応すると考えられる上声韻の音節形式をあげてみよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
42. 1	禿	謂禿	正齒(新)82	tš-ien			
2	禿	芟禿	正齒(新)独	tš-ien			
3	禿	謂禿	正齒 69	tšh-ien			
4	禿	芟禿	正齒 96	š-ien	𠵱	正齒 65	š-ien
5	禿	緝禿	喉 独	x-ien			
6	禿	隄禿	喉 独	ʔ-ien	𠵱	喉 18	ʔ-ien
					𠵱	喉 18	ʔ-ien
					𠵱	喉 独	ʔy-ien
7	禿	鞞禿	正齒 96	tšh-ien			
8	禿	禿禿	正齒 独	š-ien			
9	禿	謂禿	流風106	l-ien	𠵱	流風106	l-ien
10	禿	𠵱禿	重唇 55	p-ien <sub>2</sub>			
11	禿	𠵱禿	重唇 55	p-ien <sub>2</sub>			
12	禿	𠵱禿	重唇 独	ph-ien <sub>2</sub>			
13	禿	禿禿	重唇133	mb-ien <sub>2</sub>	𠵱	重唇133	mb-ien <sub>2</sub>
14	禿	刻禿	舌頭 99	t-ien <sub>2</sub>			

15	𪗇	𪗇𪗇	舌頭88-89	th-ien <sub>2</sub>			
16	𪗈	𪗈𪗇	舌頭164	nd-ien <sub>2</sub>	𪗉	舌頭124	nd-ien <sub>2</sub>
17	𪗉	𪗉𪗇	牙 53	k-ien <sub>2</sub>			
18	𪗊	𪗊𪗇	牙 独	kh-ien <sub>2</sub>			
19	𪗋	𪗋𪗇	齒頭 独	ts-ien <sub>2</sub>			
20	𪗌	𪗌𪗇	齒頭 27	tsh-ien <sub>2</sub>	𪗍	齒頭 独	tsh-ien <sub>2</sub>
21	𪗎	𪗎𪗇	齒頭 独	tsh-ien <sub>2</sub>			
22	𪗏	𪗏𪗇	齒頭105	s-ien <sub>2</sub>	𪗐	齒頭105	s-ien <sub>2</sub>
23	𪗑	𪗑𪗇	喉 独	ʔ-ien <sub>2</sub>			
					𪗒	流風 9	r-ien <sub>2</sub>

上記の反切下字を帰納すると、二類に分かれる。



【b】の反切下字は、正歯音の二つの小韻のみに限って使われ、【a】と音声的<sup>1</sup>に対立していた可能性は十分にある。小韻の配置の順序から言うと、正歯音<sup>2</sup> 喉音<sup>3</sup> 流風音の順になるべきところ、ここでは、2と3の間に再び正歯音が入り込んだ形になっている。

正 歯 音	喉 音	正歯音	流風音
tš- tš- tšh- š-	x- ʔ-	tšh- š-	l-

このあとの方の正歯音に反切下字【b】が使われているのである。『文海』の組織からみると、小韻3 tšhien 4 šien と小韻7 tšhien 8 šienの間には何らかの差異があったに違いない。

小韻 3	𦉳	tšhien (平)	あいだ (間)	漢語 間	}	反切下字 I a
4	𦉴	šien (平)	成る	成		
	𦉵	šien (上)	聖なる	聖		
7	𦉶	tšhien (平)	治める, 誠む	誠	}	反切下字 I b
8	𦉷	šien (平)	少ない	鮮		
	𦉸	šien (平)	低い	賤		

しかし、実際にはどこにその違いがあったのか判別し難い。あるいは初頭音(声母)の来源の相違を反映しているのではないかと想定できるが、今は確実な根拠を欠くため、反切下字 I a と I b を一類として、弁別しないでおく。

反切下字 II 類は、重唇音・舌頭音・牙音・齒頭音・喉音の音節に使われ、その中、小韻21と22の齒頭音に、その二小韻間で系聯する反切下字 II b があらわれる。

II a	𦉹	tshien <sub>2</sub> (平)	細い とがる	漢語 尖	反切下字 II a
b	𦉺	tshien <sub>2</sub> (平)	蘇生する	}	反切下字 II b
	𦉻	šien <sub>2</sub> (平) < stshien(?)	業		

この両者の弁別も判定し難いから、反切下字 II a と II b も一類を代表するものとして扱っておきたい。

また上声37韻の中に、旧版『同音』喉音類小類48にあたる文字が四字ある。旧版『同音』では四字が一類をなすが、新版『同音』ではそれが二類に分けられ、それぞれに二字ずつ所属している。『文海』上声韻もこの新版『同音』と合致する弁別をしていたものと考えられる。

	旧版『同音』喉音		新版『同音』喉音
四字	}	𦉼	𦉼
		𦉽	𦉽
		二字一類	
		}	
			𦉼

一類	}	𪛗	ɿien (上)	家	二字一類	}	𪛗	ɿien (上)	家
		𪛘	ɿien (上)	獄			𪛘	ɿien (上)	獄

新版『同音』が弁別する両類にはどのような差異があったのか。それを推定できる確実な根拠はないが、前者の袋がビルマ語の ɿit<袋> に対応するのに対して、後者の家(獄は家と同じ形態素)は、ビルマ語の ɿim<sup>(8)</sup> に対応するから、この二類には声調の上で、上声と上去声の対立があったのではないかと考えられる。しかし今の段階では共に ɿien (上) を与えておく。

『文海』の枠組を韻図の配置と照合すると、反切下字Ⅰ類をもつ文字は、一段目に、反切下字Ⅱ類の文字は三段目に置かれている。これまでの扱いを適用すると、Ⅰ-ɿien, Ⅱ-ɿien<sub>2</sub> の形式を与えてよいだろう。二段目の歯頭・正歯音の枠の字 𪛗 は所属がわからず、喉音 𪛘 は上声韻で上記の表の中の位置からすると、反切下字Ⅰ類をもっていたと推定できる。

四段目に置かれた 𪛘 も所属不詳である。これらの所属不詳の文字は、後代に作られた組み合わせ字であった可能性が大きい。

二段目と四段目はそれぞれ一段目と三段目の合口韻を表示すると見ることが出来れば簡単であるが、『文海』の反切からはその仮定を支持する根拠を見出せない。

韻図六段目上方左右にある流風音の形式は、

𪛗 lieN (平) 音寫に使う

𪛘 riēN<sub>2</sub> (上) 奕

の対立を示している。

『文海雜類』には、平声42韻・上声37韻に所属する文字がかなり多く登録されている。

}	𪛗	𪛘	𪛘	ɳdziēN <sub>2</sub> (平42)	占い	歯頭	8
	𪛘			ɳdziēN <sub>2</sub> (平42)	律	歯頭	8
	𪛘			ɳdziēN <sub>2</sub> (平42)	父	歯頭	8

(8) 西田龍雄『アジアの未解読文字』1982 大修館書店 p. 104- 参照。

{ 𪛗 𪛘 𪛙       }	𪛗 𪛗 𪛗	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (平42)	錢	齒頭 87	<漢語 錢
	𪛘 𪛘 𪛘	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (平42)	利益	齒頭 87	
	𪛙 𪛙 𪛙	<sup>n</sup> dziēn <sup>2</sup> (平42)	時節, 時	齒頭 87	<漢語 節

この二小類の形式上の弁別も詳かではない。

{ 𪛚 𪛛 𪛜 𪛝       }	𪛚 𪛚 𪛚	ʔiēn (平42)	呻く	喉 独
	𪛛 𪛛 𪛛	hliēn <sub>2</sub> (平42)		流風 69
	𪛜 𪛜 𪛜	hliēn <sub>2</sub> (平42)	地名	流風 69
	𪛝 𪛝 𪛝	hliēn <sub>2</sub> (平42)	聞く	流風 69
{ 𪛞 𪛟 𪛠 𪛡       }	𪛞 𪛞 𪛞	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	姦	齒頭 9
	𪛟 𪛟 𪛟	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	順応する	齒頭 9
	𪛠 𪛠 𪛠	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	彫る (鑿で)	齒頭 9
	𪛡 𪛡 𪛡	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	判断する	齒頭 9
{ 𪛢 𪛣       }	𪛢 𪛢 𪛢	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	受け入れる	齒頭 86
	𪛣 𪛣 𪛣	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	角, 隅	齒頭 86

この二類は上記の齒頭音小類 8 および87にあたる上声韻を代表する。

齒頭 8	𪛞 𪛟	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (平42)	齒頭 87	𪛞 𪛟	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (平42)
齒頭 9	𪛗 𪛘	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)	齒頭 86	𪛚 𪛛	<sup>n</sup> dziēn <sub>2</sub> (上37)

反切上字 **𪛗** と **𪛘** は系聯し、反切下字 **𪛙** と **𪛚** (IIa) も系聯する。

なお『同音』齒頭音86小類には、新版・旧版共に所属字が三字あって、上記の二字のほかに **𪛛** が加っている。この文字も上声37韻であろう。

平声42韻・上声37韻の韻母と声母の連続する関係を表示するとつぎのようになる。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ien	—	—	—	—	—	—	tš-tšh- š-	x-ʔ- ʔy-	l-
-ien <sub>2</sub>	p-ph- mb-	—	t-th- nd-	—	k-kh-	ts-tsh- s- <sup>a</sup> dz-	—	ʔ-	r-hl-

No. 620	ʔien	tšien	○	○	○
	ʔyien(上)	?	○	○	○
	ʔien <sub>2</sub>	tsien <sub>2</sub>	kien <sub>2</sub>	tien <sub>2</sub>	pien <sub>2</sub>
	○	?	○	○	○
		rien	lien		
		○	○		
			šien (平42韻代表字)		
			šien (上37韻代表字)		

この -ien はおそらく口蓋音化した形式を取り出して一類としたものであろう。これらの韻母は、輕唇音類と舌上音類とは全く結び付かなかった。

韻図43を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のよう

になる。

#### 44. 韻図44 平声43韻・上声38韻

韻図44は、西夏語平声43韻・上声38韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 620 (30a) では韻図一段目は、重唇・輕唇音の枠を除きほかの四つの枠に西夏字があり、二段目は舌頭・舌上音の枠にのみ文字が記入されている。流風音類には、五段目上方に三字と下方左側に一字が書かれ、右側には丸印が置かれている。

No. 623 (48b) の韻図では重唇・輕唇音の枠に書き込みがあり、No. 621 (28b) と No. 624 (24a 上段) は、いずれも流風音類の枠内の配置が少し違った形をとっている。



	𪛗	𪛘	𪛙	○	
	○	○	𪛚	○	
		𪛛			
		𪛜			

図44 平声43韻・上声38韻 No. 620

No. 623  
(部分)

𪛛	○
	○

流風音

No. 624  
(部分)

𪛛	𪛜
𪛚	○
𪛛	

流風音

No. 621  
(部分)

𪛚	𪛜
𪛛	𪛛
	○

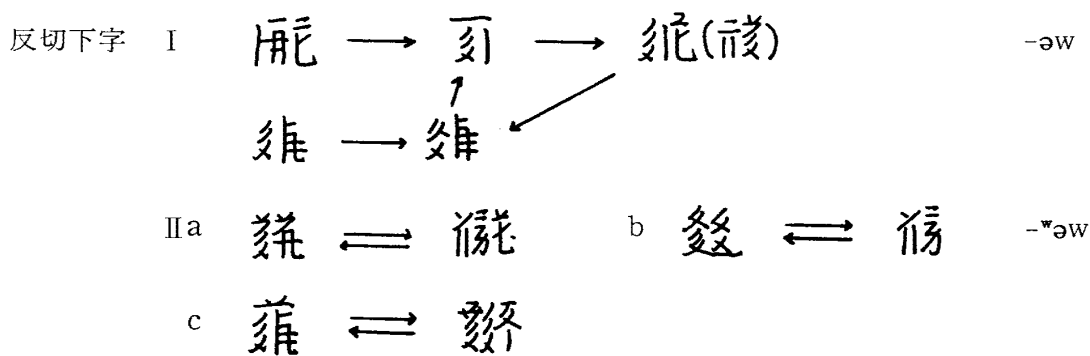
流風音

この韻図の枠組が『文海』の組織と合致するか否かをつぎに検討したい。  
まず『文海』平声韻の各小韻の代表字と反切およびそれらと相応すると考え  
得る上声韻形式をあげてみよう。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
43. 1	𪛙	𪛛	舌頭118	t-əw			
2	𪛚	𪛛	舌頭 20	th-əw	𪛛	舌頭 20	th-əw
3	𪛛	𪛛	舌頭165	n-əw			
4	𪛜	𪛛	舌頭 43	nd-əw	𪛛	舌頭43-44	nd-əw
5	𪛛	𪛛	牙 72	k-əw	𪛛	牙173	k-əw
					𪛛	牙 独	kh-əw
6	𪛛	𪛛	齒頭 31	ts-əw	𪛛	齒頭 31	ts-əw

7	𦉑	𦉑	齒頭 独	tsh-əw	𦉑	齒頭100	tsh-əw
8	𦉒	𦉒	齒頭 77	s-əw	𦉒	齒頭 77	s-əw
9	𦉓	𦉓	喉 独	ʔ-əw			
10	𦉔	𦉔	喉 47	x-əw	𦉔	喉 47	x-əw
11	𦉕	𦉕	喉 独	ʔ-əw			
12	𦉖	𦉖	流風 独	l-əw			
13	𦉗	𦉗	流風147	l-əw	𦉗	流風143~144	l-əw
14	𦉘	𦉘	流風 独	l-əw	𦉘	流風 31	l-əw
15	𦉙	𦉙	舌頭 独	t-ʷəw	𦉙	流風 63	ʮz-əw
16	𦉚	𦉚	舌頭 独	n-ʷəw	𦉚	舌頭152	t-ʷəw
17	𦉛	𦉛	齒頭 67	tsh-ʷəw			
18	𦉜	𦉜	齒頭 71	s-ʷəw			
19	𦉝	𦉝	齒頭 71	s-ʷəw			
20	𦉞	𦉞	流風 独	l-ʷəw	𦉞	流風 独	l-ʷəw(?)
21	𦉟	𦉟	流風 独	ʒ-ʷəw			

上記の小韻の反切下字を整理すると、つぎの二類にまとまる。



I類は開口韻 -əw を代表し、II類はその合口韻 -ʷəw を代表する。反切下字II類の a) b) c) のグループは声母との関係で補い合っているように見える。韻図では流風音類のほかはI類の反切下字をもつ文字は一段目に、II類の反切下字の字は二段目に配置される。

平声韻小韻18と19の二字は、旧版『同音』では二字が合一して小類71を作る

が、新版『同音』では共に独字の項に属していて、『文海』の小類の分け方と一致する。おそらく小韻18と19は声母の来源の相違にもとづいて弁別されたのであろうと考えられる。

旧版『同音』	{ 徭 徭       }	新版『同音』独字	『文海』小韻18	s <sup>w</sup> əw < stsh <sup>w</sup> əw
小類71		独字	小韻19	s <sup>w</sup> əw

stsh- から s- への変化は、中央部チベット語では、7世紀から9世紀の間に大部分の単語で完了し、ギャロン語にも近年同じ変化が起っている。(p. 12 注6 参照)

西夏語も同様の变化を12世紀に経験したであろうことは十分考えられる。

『文海雜類』には、この韻類に属するつぎの三字が登録されている。

𣎵	𣎵	𣎵	°dzəw (平43)	襟	齒頭 独
𣎵	𣎵	𣎵	hləw (平43)	遊牧	流風 24
𣎵	𣎵	𣎵	hləw (上38)	解ける	流風 25 cf. Wr. B hlwat-saṅ

この韻類に属する流風音類の反切上字は、つぎのように対照される。

開口韻	小韻12	𣎵	l-	小韻13	𣎵	l-	小韻14	𣎵	l-
合口韻	小韻20	𣎵	l <sup>w</sup> -	小韻21	𣎵	ʒ <sup>w</sup> -			

これらの流風音の対立関係が、韻図の上で示されている。上述のように『文海雜類』には、反切上字 𣎵 hl- が使われるが(平声韻と上声韻)、それは上声韻の ʒz- と共に韻図上で特定の位置を占めていない。これらの韻図が作成されたときには、hl- はすでに l- と合一していたのであろうか(本稿(上) p. 106)。

この流風音声母の音価を、さきにあげた韻図に代入すると、各々の韻図における文字配置の意図がよく理解できる。

No. 620

l <sup>w</sup> əw	ləw	ləw
ʒ <sup>w</sup> əw		○

No. 621

l <sup>w</sup> əw	ləw
ʒ <sup>w</sup> əw	ləw
	○

No. 624

	ləw	ləw
l <sup>w</sup> əw	○	
ʒ <sup>w</sup> əw		

大雑把に言えば No. 620 では,  $z^w\text{əw}$  を別に扱い, No. 621 では, 開口韻と合口韻を重視して左右に対照して並べ, No. 624 では, 開口韻と合口韻を別々に置いている。仮りに, たとえば  $z\text{əw}$  音節が, 上声韻のみにあったとすれば, この韻図の中の適当な位置に登録されていたであろう。

この韻類の韻母と声母の連続関係は, つぎのように表示でき, これらの韻母は, 重唇音, 軽唇音, 舌上音, 正歯音とは全く結びつかなかったことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-əw	—	—	t-th- n-nd-	—	k-kh-	ts-tsh- ʰdz-s-	—	ʔ-x-	l-hl- l-ɬz-
- <sup>w</sup> əw	—	—	t-n-	—	—	tsh-s-	—	—	l-ʒ-

No. 620

ʔəw	tsəw	kəw	təw	○
○	○	○	t <sup>w</sup> əw	○
	l <sup>w</sup> əw	ləw	ləw	
	z <sup>w</sup> əw	○		
		xəw (平声43韻代表字)		
		xəw (上声38韻代表字)		

韻図44を筆者の再構成形式によって書き改めると, 上のようになる。

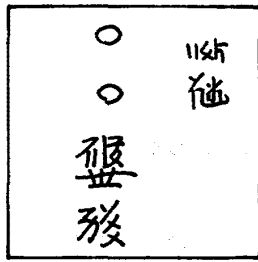
なお No. 621 の韻図はここまでで終る。

45. 韻図45 平声44韻・上声39韻

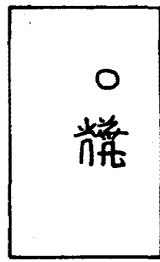
韻図45は, 西夏語平声44韻・上声39韻の特定の音節形式を図にしたものである。No. 620 (30b) の韻図では, 一段目の牙音, 齒頭・正齒音と喉音の枠に各一字が記入されている

	𐰇	𐰈	𐰉	○	○
			○		
			○		
			𐰉		
			𐰇		
			𐰈		

図45 平声44韻・上声39韻 No. 620



No. 624 書き込まれた文字は、上声8韻 zīē である



No. 623 重唇・輕唇音の枠に平声9韻 piē が書き込まれている

のみである。No. 624 (24下段), No. 623 (50a) はいずれも, No. 620 と一致するが, 小さい文字の書き込みがある。

筆者は平声44韻・上声39韻に -ew を推定した。

この韻図の枠組みが『文海』の韻

組織と合致するか否かを検討したい。

『文海』の平声44韻の各小韻の代表字及び反切をあげ, それらに相応すると考えられる上声韻形式を加える。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
44. 1	𪛗	𪛗𪛘	正齒(新)55	n <sub>ɸ</sub> -ew			
2	𪛙	𪛙𪛚	牙 独	k-ew	𪛛	牙107	k-ew
3	𪛛	𪛛𪛜	牙 独	kh-ew	𪛝	牙 30	kh-ew
4	𪛞	𪛞𪛟	正齒 56	tš-ew			
5	𪛠	𪛠𪛡	正齒116	tšh-ew			
6	𪛢	𪛢𪛣	正齒 独	š-ew	𪛤	正齒 独	š-ew
7	𪛥	𪛥𪛦	喉 独	?-ew			

上記の反切下字を帰納すると, つぎの二類に分かれるが, この二類は対立しない。

反切下字 I 𪛗 ⇌ 𪛙

II 𪛛 ⇌ 𪛝 (𪛞) -ew

『文海』の七つの小韻は, 七種の音節形式を代表し, その中, 無声無気音 k- tš- ?- にはじまる三種の音節が韻図44に登録されている。したがってこの韻図は, 『文海』の組織と一致していることがわかる。

『文海』小韻1の反切上字は舌上音類に属し, n<sub>ɸ</sub>- を初頭音とした。この小韻1は二字からなり, 『同音』新版の正齒音小類55と一致するが (文字の順序

は逆になっている) 旧版『同音』ではそれらの文字は独字の項目に所属する。

		新版『同音』	旧版『同音』			
『文海』 小韻 1	}	𪛗	小類55	独字	n <sub>ɛ</sub> ew	煩惱 Wr. T. <i>nyon-mongs</i>
		𪛘	小韻55	独字	n <sub>ɛ</sub> ew	煩惱 <i>nyon-mongs</i>
		𪛗𪛘	khu-n <sub>ɛ</sub> ew (上26-平43)		煩惱	
		𪛘𪛗	n <sub>ɛ</sub> ew-ñžǐ (平43-平67)		煩惱	

いずれも二字連続して使われている。旧版『同音』において、この二字が独字の項目に入っているのは、初頭音に何らかの差異を認めたためであろう。

この小韻が『文海』平声44韻の最初に置かれているのは、反切上字は正歯音と弁別されないが、それが舌上音をもつ音節として扱われたためである。

この韻母と声母の連続関係は、つぎのように表示でき、この韻母は、重唇、軽唇、舌頭、歯頭、流風の各音類とは結び付かなかったことがわかる。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌上	舌頭	牙	歯頭	正歯	喉	流風
-ew	—	—	n <sub>ɛ</sub> -	—	k-kh-	—	tš-tšh š-	ʔ-	—

No. 620	ʔew	tšew	kew	○	○
			○		
			○		
			kew (平声44韻代表字)		
			kew (上声39韻代表字)		

韻図44を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

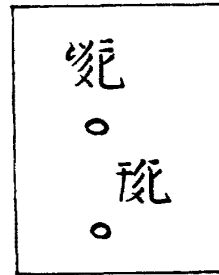
#### 46. 韻図46 平声45韻・上声40韻

韻図46は、西夏語平声45韻・上声40韻の特定の音節形式を図にしたものである。No. 620 (31a) の韻図では、一段目は重唇・軽唇音、牙音、歯頭・正歯音と喉音の枠に、二段目は歯頭・正歯音と喉音の枠に、三段目は喉音の枠のみにそれぞれ西夏字が置かれている。流風音には、五段目があてられ、右側上下に文字が置かれ左側上下には丸印がある。

𪛗	𪛘	𪛙	○	𪛚	
𪛛	𪛜	○	○	○	
𪛞	○	○	○	○	
		○ 𪛟			
		○ 𪛠			
		𪛡			
		𪛢			

図46 平声45韻・上声40韻 No. 620

No. 623



重唇・輕唇音の書き込み

No. 624 (25a), No. 622 (1b) の韻図は, No. 620 と合致し, No. 623 (50b) には, 重唇・輕唇音の欄に小さい文字 (上声7韻 w1) の書き込みがある。

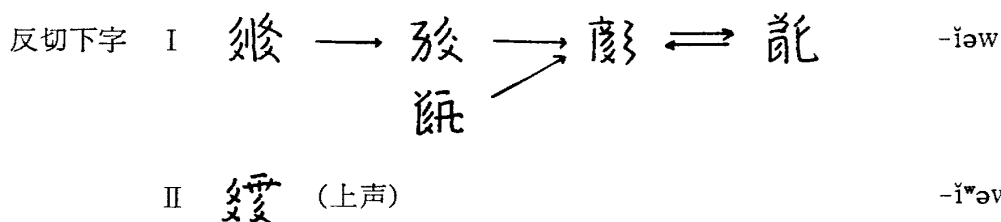
筆者は平声45韻・上声40韻の韻母に -iəw を推定した。

つぎに『文海』平声45韻の小韻代表字と反切, そしてそれらに対応すると考えられる上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
45. 1	𪛛	𪛘𪛙	重唇 独	p-iəw	𪛛	重唇 独	m-iəw
					𪛚	舌上 独	ʈh-iəw(?)
2	𪛙	𪛟𪛡	牙 36	k-iəw			
3	𪛚	𪛟𪛢	牙 84	ŋg-iəw	𪛟	牙140	kh-iəw
4	𪛘	𪛟𪛣	正齒 独	tʃ-iəw	𪛟	牙 85	ŋg-iəw
5	𪛛	𪛟𪛤	正齒 31	tʃh-iəw	𪛟	正齒 82(新)	tʃ-iəw
6	𪛞	𪛟𪛥	正齒 72	tʃh-iəw	𪛟	正齒 31	tʃh-iəw
					𪛟	正齒 72	tʃh-iəw
					𪛟	正齒 76	ʃ-iəw

7	𦉳	纒𦉳	喉 58	ʔy-iəw		
8	𦉴	循𦉴	喉 44	ʔy-iəw	統	喉 3 ʔy-iəw
9	𦉵	循𦉵	喉 独	x-iəw		
10	𦉶	語𦉶	流風 独	l-iəw	𦉷	流風 64 l-iəw
					𦉸	正齒(新)95 tš-i*əw
					𦉹	正齒 90 tšh-i*əw
11	統	報𦉺	正齒 独	š-i*əw 平		
					𦉻	喉 90 ʔ-i*əw
					𦉼	喉 9 ʔ-iəw
12	𦉽	𦉾	流風 独	ʒ-iəw		

上記の平声韻小韻の反切下字を帰納すると、つぎの一類と一字に分かれる。



I類は開口韻を代表し、IIの一字は上声韻字で合口韻であったと考えられる。上声韻には合口韻と結び付く声母が数種類あったが (tš- tšh- ʔ-), 平声韻では š- のみに限られた (小韻11) ために、上声韻字を借りてその反切下字にあて、平の注をつけたのである。

正齒音 (新) 95小類の三字 𦉷 𦉸 𦉹 は、『掌中珠』における漢字表音

𦉷 𦉸 𦉹 琥珀。周合の例から、合口韻であることを推定したが、その文字がこの韻図の二段目に配置されている事実によって、  
。勸。周合 その推定を確証できた。同じように漢字表音 抽合 をもつ

𦉹 <基礎>も合口韻であることがわかる。韻図三段目の 𦉳 <因>は ʔy-iəw で、一段目の 𦉼 ʔ-iəw (上声) <転覆>と対立する。

小韻7と8は、反切上字も下字も共に系聯するため、両方共に ʔy-iəw であったと推定できるが、それを分割したのは、声調の相違であったのであろう。小



韻 8 は平去声であったと考えられる。小韻 7 と 8 にあたる喉音小類 58 と 44 は、『同音』では（新版，旧版共に），各々三字で一類をなしているが、『文海』では，その中二字のみが選ばれて登録されている。

『文海』小韻 5 と 6 は共に tshǐəw であった。『同音』旧版正歯音 31 は，五字からなり，上声 30 韻三字と平声 45 韻二字を含んでいる。これは小韻 5 にあたる。これに対して，『同音』旧版小類 72 は三字で一類をなし，新刊『同音』および『文海』とつぎのような関係を示している。

旧版『同音』 正歯 31	𪛗	𪛘	𪛙	𪛚	𪛛
	上40			平45	
新版『同音』 正歯 40	𪛗	𪛘	𪛙		
	上40				
旧版『同音』 正歯 72	𪛜	𪛝	𪛞		
	上40	平45			
新版『同音』 正歯	𪛜	𪛝	𪛞	𪛚	𪛛
	上40	平45		平45	
	独字	独字		小類39	
『文海』	小韻6(上)	小韻6		小韻 5	

『文海雑類』にも，平声 45 韻・上声 40 韻の文字が記録されている。

𪛜	𪛝	𪛞	𪛟	𪛠	"dzǐəw (平45)	齒頭 14
𪛡		𪛢	𪛣		"dzǐəw (上40)	正歯 独
𪛤		𪛥	𪛦		"dzǐəw (上40)	正歯 独
𪛧	𪛨	𪛩	𪛪		"dzǐəw (平45)	正歯 77(新)

平声 45 韻・上声 40 韻の韻母と声母の連続関係を表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iəw	p-m-	—	—	ʈh-	k-kh- ŋg-	ʰdz-	tš-tšh ʰdž-š-	ʔ-x- ʔy-	l-ž-
-i'əw	—	—	—	—	—	—	tš-tšh- ʰdž-š-	ʔ-	—

No. 620

ʔiəw(上)	tš'iəw	kiəw	○	piəw
ʔi'əw(上)	tš'i'əw(上)	○	○	○
ʔyi'əw	○	○	○	○
	○	liəw		
	○	žiəw		
		ʔyiəw (平声45韻代表字)		
		ʔyi'əw (上声40韻代表字)		

これらの韻母は、輕唇音、舌頭音とは結び付かなかったことと、合口韻は、正齒音と喉音に限られることがわかる。韻図46を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

	𪛗	○	○	○	○
	○	𪛗	○	○	○
			○		
			𪛗		
			𪛗		
			𪛗		

図47 平声46韻 No. 620

#### 47. 韻図47 平声46韻

韻図47は、西夏語平声46韻の特定の音節形式を図示したものである。平声46韻には、相応する上声韻がない。

No. 620 (31b) の韻図では、一段目は喉音の枠に、二段目は齒頭・正齒音の枠にそれぞれ一字と五段目流風音の枠の下側に一字が配置されているのみである。

No. 623  
(部分)

𪛗
○
𪛗
○

重唇・輕唇音

No. 622  
(部分)

○
𪛗
𪛗
𪛗

齒頭・正齒音

No. 623 (52a), No. 624 (26a 上段), No. 622 (2a) はいずれも No. 620 と一致するが, No. 623 には重唇音・軽唇音の欄に二字の書き込みがあり, No. 622 は二段目の文字の下に, 注二字がついている。二段目の文字は『文海』『同音』には登録されていないが, この注字二字を組み合わせると, その字形ができ上るから, 後代に作られた表音字形であることがわかる。

No. 622 の注字 **𪛗𪛘** tsifi (上10) - siew (平46) = tsiew (平46)

筆者は, 平声46韻の韻母として -iew を推定した。『文海』平声46韻は五つの小韻からなり, 所属字数も少ない (10字)。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
46. 1	𪛗	𪛗𪛘	正齒 独	tʃh-iew
2	𪛘	𪛘𪛗𪛘	喉 独	ʔy-iew 重
3	𪛙	𪛘𪛘	喉 独	ʔy-iew
4	𪛚	𪛗𪛘	流風 20	ʒ-iew
5	𪛛	𪛗𪛘	齒頭 独	s-iew

上記の反切下字は, 一類に帰納できるから, いずれも開口韻 -iew を代表したものと考え得る。

反切下字 **𪛘** ⇌ **𪛗** -iew  
**𪛘**

小韻2と3は, 2の方に「重」の注があって弁別されるが, その「重」が具体的に何を意味したのかわからない。また小韻5の齒頭音の音節が何故最後に置かれ, 韻図の二段目に配置されているのか, いまは解決できない問題である。

平声45韻の韻母と声母の連続関係は限られている。

声母 \ 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iew	—	—	—	—	—	s- (ts-)	tʃh-	ʔy-	ʒ-

No. 620

ʔyiew	○	○	○	○
○	tsiew	○	○	○
		○		
		žiew		
		ʔyiew (平声46韻代表字)		
		平		

韻図47を筆者の再構成形式で書き改めると、左のようになる。

48. 韻図48 上声41韻

韻図48は、西夏語上声41韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 620 (32a) の韻図では、一段目舌頭・舌上音の枠と齒頭・正齒音の枠にそれぞれ一

.					
○	𐰃	○	𐰃	○	
		○			
		𐰃			
		𐰃			
		𐰃			

字と五段目流風音の枠の下段に一字が置かれている。

No. 623 (52b), No. 624 (26a) は、No. 620 と一致する。No. 623 には重唇・輕唇音の枠と喉音の枠に書かれた丸印の下にそれぞれ注字が二字あり、No. 624 では流風音の丸印の右側に注字が一字加えられている。No. 622 では流風音の枠は丸印のみで、文字の配置がない。

筆者は上声41韻の韻母の形式を、-i<sup>h</sup>w と推定した。韻図 No. 623, No. 624 の注字は、この韻母の性格を暗示している点で重要であるように思われる。注字を書き出して所属韻を検出すると、いずれも

図48 上声41韻 No. 620

No. 623  
(部分)

○	𐰃	○	𐰃	○
𐰃				𐰃
𐰃				𐰃

重唇・輕唇音と喉音の枠には注字がある

No. 624  
(部分)

○	𐰃
𐰃	

五段目 流風音

平声11韻または平声12・上声11韻であり，筆者の上41韻の韻母の形式 -i<sup>°</sup>w と酷似している。

紆 pi<sup>h</sup> (平11)                      緺 ɣi<sup>ě</sup> (平9)  
 紉 wi<sup>ěh</sup> (平12)                      餅 ?  
 順 li<sup>ěh</sup> (上11)

No. 623, No. 624 の韻図が書かれた当時はすでに，これらの韻母の形式平9 -i<sup>ě</sup>, 平12-上11 -i<sup>ěh</sup>, 上41 -i<sup>ew</sup> と 平11 -i<sup>h</sup> の弁別は，かなり曖昧になっていたのかも知れない。

上声41韻は，六つの小韻からなるが，その反切はわからない。

	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
上41.1	紉	舌頭 64	t-i <sup>°</sup> w
2	緺	舌頭161	th-i <sup>°</sup> w
3	紉	舌頭 2	n-i <sup>°</sup> w
4	紉	齒頭 独	ts-i <sup>°</sup> w
5	紉	齒頭 59	s-i <sup>°</sup> w
6	紉	流風 83	ʒ-i <sup>°</sup> w

『文海雜類』にもこの韻類に属する文字が，三字登録されている。

紉 齒 紉 [反切] 紉 紉 hli<sup>°</sup>w (上41)(反切上字は上声6韻 hliu<sup>h</sup>)

『同音』旧版流風音小類23と新版25は共にこの三字で一類をなす。

上声41韻の韻母と声母の連続関係は，次表の通りであり，この韻母は，重唇，軽唇，舌上，牙，正齒，喉の各音とは結び付かなかったことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-i <sup>°</sup> w	—	—	t-th- n-	—	—	ts-s-	—	—	ʒ-hl-

No. 620

○	tsi <sup>°</sup> w	○	tī <sup>°</sup> w	○
		○		
		ʒi <sup>°</sup> w		
		si <sup>°</sup> w (上声41韻代表字)		
		上		

韻図48を筆者の再構成形式によって書き改めると，左のようになる。何故か hli<sup>°</sup>w は，韻図には含まれていない。

49. 韻図49 平声47韻

韻図49は、西夏語平声47韻の特定の形式を図示したものである。No. 620(32b)

	𐰽	○	○	○	○
			○		
			𐰽		
			𐰽		
			𐰽		
			𐰽		
			𐰽		
			𐰽		

図49 平声47韻 No. 620

の韻図では一段目の喉音の枠と五段目の流風音の枠にそれぞれ一字配置されるのみで、ほかは丸印が書かれている。No. 622 (3a), No. 623 (53), No. 624 (27b 上段) はいずれも No. 620 と一致するが、No. 623 には、重唇・軽唇音の丸印の下に注字が一字書き加えられている。その注字は平声 8 韻 pI で、やはりこの平声47韻と類似する形式をもっていたものと見てよい。

筆者は平声47韻の韻母を -iw とした。平声47韻には piw がなか

No. 622



重唇・軽唇音の枠に書き込まれた文字 pI (平)

ったが、平声 8 韻の pI がそれとはっきり弁別できなかったのかも知れない。

『文海』平声47韻は五つの小韻に分かれるが、全体の所属字は極めて少なく、六字に限られる。

つぎに『文海』の各小韻の代表字と反切をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
47. 1	𐰽	𐰽 𐰽	牙154	ŋ-iw
2	𐰽	𐰽 𐰽	正齒 独	tʃh-iw
3	𐰽	𐰽 𐰽	正齒 独	ʃ-iw
4	𐰽	𐰽 𐰽	喉 独	ʔ-iw
5	𐰽	𐰽 𐰽	流風 独	ʒ-iw

上記の反切下字を帰納すると一類になり，-iw を代表していると考えられる。

反切下字 **𐰃** ⇨ **𐰄** -iw

この韻母 -iw と声母の連続関係も簡単であり，この韻母は重唇，軽唇，舌頭，舌上，齒頭の各音とは結び付かなかった。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iw	—	—	—	—	ŋ-	tšh-š-	—	ʔ-	ʒ-

No. 620

ʔiw	○	○	○	○
		○		
		ziw		
		ʔiw (平声47韻代表字)		
		平		

韻図49を筆者の再構成形式によって書き改めると，左のようになる。

50. 韻図50 平声48韻

韻図50は，西夏語平声48韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 620 (33a) の韻図では，一段目と二段目共に齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が一字配置されるのみで，流風音の枠にも丸印が二つ書込まれている。No. 622 (3b) は No. 620 と一致するが，流風音の枠の丸印が一つ少ない。No. 623 (54a) には，重唇・

○	𐰃	○	○	○	
○	𐰄	○	○	○	
		○			
		○			
		𐰃			
		𐰄			

図50 平声48韻 No. 620

○	𐰃	○	𐰄
𐰃	𐰄	○	𐰃
○			

No. 623 (部分)

○	𐰃
○	

No. 624 (部分)

軽唇音の欄と喉音の欄の丸印の下に注字が記入されている。

この注字はやはり平声48韻と近い形式を示したのであろう。

𪛗 ʔɔfi (平49)  
 𪛘 ʔiʷon (平56)      𪛙 ʔyifi (平29)

筆者は平声48韻の韻母として -ofi を推定した。No. 624 にも流風音の枠に注字が書き加えられている。これは上声韻 lofi にあたる形である。平声48韻には、対応する上声韻代表字はないが、『文海』によると、実際には上声で発音される音節が一つあって、上(声)の注が反切に加えられている。それが lofi である。

『文海』平声48韻は、六つの小韻に分けられ、所属字は僅かに十二字である。まず各小韻代表字と反切をあげてみたい。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
48. 1	𪛗	𪛙 𪛗	正齒 53	tš-ofi
2	𪛘	𪛙 𪛘	正齒 29	tšh-ofi
3	𪛚	𪛙 𪛗	正齒 28	tšh-ofi
4	𪛛	𪛙 𪛘	正齒 35	š-ofi
5	𪛜	𪛙 𪛚 𪛛	流風 独	l-ofi 上
6	𪛝	𪛙 𪛛 𪛜	正齒 独	štšhor 合

上記の各小韻の反切下字を帰納すると、一類と一音注に分かれる。

反切下字 I 𪛗 ⇔ 𪛘 = 𪛚 -ofi

II 𪛛 𪛜 𪛝 (AB 合)  
 A B

小韻5は、さきに述べた上声の一つで、反切のあとに上(声)の注がある。小韻6は反切と言うよりは音注であって、𪛛 š<sub>i</sub> (上9) と 𪛜 tšhor (上80) の二字を合わせよという指示であるから、その音節形式は štšhor であったと考えられる。古い štšh- が残存した形式である。𪛜 の字は『文海雜類』に記



録され、**𐰇𐰏𐰣** (tšhor 上声) の反切が与えられている。**𐰇** 平声48韻 -oh の音注に上声80(=平声89) の文字が使われるこの事実は、これら両韻母に対する筆者の再構成形式が適切であったことを証明している。

『文海雜類』にも、平声48韻の文字を反切下字とする文字が、若干記録されている。

𐰇	𐰇	𐰇𐰏𐰣	ʰdʒoh (平48)	<聰明> cf. WrT <i>grung-po</i>
𐰇	𐰇	𐰇𐰏𐰣	ʰdʒoh (平48)	<穴>
𐰇	𐰇	𐰇𐰏𐰣	loh (平48)	<帰る> cf. WrT <i>log-pa</i>

何故かこの loh は、No. 620 の韻図には登録されていない。

この韻類の韻母は正歯音と流風音に限って結合した。その連続関係を表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-oh	—	—	—	—	—	—	tš-tšh- ʰdž-š- štšh-	—	l-

No. 620	○	tšoh	○	○	○
	○	?	○	○	○
			○		
			○		
			šoh (平声48韻代表字)		
		平			

韻図50を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。『文海雜類』の loh は、ここでも記録されていない。

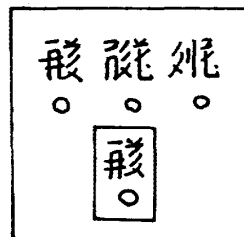
### 51. 韻図51 平声49韻・上声42韻

韻図51は、西夏語の平声49韻・上声42韻の特定の音節形式を図示したものである。

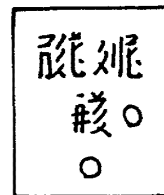
No. 620 (33b) の韻図では、一段目は、重唇・輕唇，舌頭・舌上，牙，喉の

	𪛗	○	𪛘	𪛙	𪛚
	○	○	𪛛	○	○
	○	○	○	𪛜	○
			𪛝		
			𪛞		
			𪛟		
			𪛠		

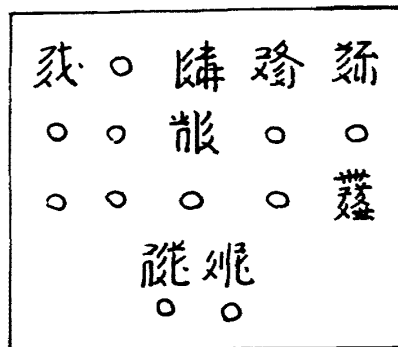
図51 平声49韻・上声42韻 No. 620



枠と枠内の文字はあと  
で書き入れられたもの  
No. 623 (部分 流風音)



No. 624 (部分  
流風音)



No. 622 (韻類代表字を除く 部分)

各音の枠に西夏字が、二段目は、  
牙音の枠に、三段目は舌頭・舌上  
音の枠にそれぞれ文字が配置され

る。流風音には、五段目と六段目をあて、五段目の上方左右に二字と六段目の  
上方中央に一字を配している。No. 623 (55a), No. 624 (28a), No. 622 (4a)  
はいずれも No. 620 と流風音の文字の配置の仕方が相違する。その上、No.  
622 は三段目の文字の位置が他とは異っている。

筆者は、平声49韻・上声42韻の韻母を -ɔh と推定した。

まず『文海』の平声49韻の各小韻代表字とその反切、そしてそれらに相応す  
ると考えられる上声韻形式を列挙しよう。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
49. 1	𪛚	𪛚𪛚	重唇 22	p-ɔh			
2	𪛛	𪛛𪛚	重唇 68	ph-ɔh			
3	𪛜	𪛜𪛚	重唇 68	ph-ɔh			
4	𪛞	𪛞𪛚	重唇135	m-ɔh	𪛟	重唇 59	m-ɔh

						緄	重唇 独66	mb-ɔh
5	𪗇	𪗇	𪗇	舌頭 18	t-ɔh	𪗇	舌頭 18	t-ɔh
6	𪗈	𪗈	𪗈	舌頭 4	th-ɔh	𪗈	舌頭 3	th-ɔh
7	𪗉	𪗉	𪗉	舌頭 77	n-ɔh	𪗉	舌頭 66	n-ɔh
8	𪗊	𪗊	𪗊	舌頭 47	nd-ɔh	𪗊	舌頭 48	nd-ɔh
9	𪗋	𪗋	𪗋	牙 75	k-ɔh	𪗋	牙 独	k-ɔh
10	𪗌	𪗌	𪗌	牙 93	kh-ɔh	𪗌	牙 独	kh-ɔh
11	𪗍	𪗍	𪗍	牙 50	ŋg-ɔh			
						𪗎	齒頭18~19	s-ɔh
12	𪗏	𪗏	𪗏	喉 84	ʔ-ɔh	𪗏	喉 84	ʔ-ɔh
13	𪗐	𪗐	𪗐	喉 85	ʔ-ɔh			
14	𪗑	𪗑	𪗑	流風 19	l-ɔh	𪗑	流風 19	l-ɔh
15	𪗒	𪗒	𪗒	𪗒 舌頭 3	thʒ-ɔh 平			
16	𪗓	𪗓	𪗓	𪗓 舌頭 独	thŋ-ɔh 平			
17	𪗔	𪗔	𪗔	牙 78	kʷ-ɔh			
						𪗕	牙181	ŋ-ʷɔh
						𪗖	喉 独	xʷ-ɔh
18	𪗗	𪗗	𪗗	流風 独	ɬ-ʷɔh			
						𪗘	牙143	ŋ-ɔh
						𪗙	流風 独	ʒ-ɔh

上記の反切下字を帰納すると、つぎの三類に分かれる。

- 反切下字
- I a 𪗒(𪗒) ⇔ 𪗏 -ɔh
  - b 𪗑 ⇔ 𪗑(𪗑) -ɔh
  - II 𪗗 ⇔ 𪗗(𪗗) -ʷɔh
  - III 𪗒 𪗑

I類 a と b は補い合っていて、開口韻 -ɔɦ を、II類はそれに対する合口韻 -\*ɔɦ を代表した。III類の反切下字は上声韻字であって、I, II類とは別の扱いを受けている。もし、III類が同じく合口韻の韻母を代表したのであれば、II類の下字を使ってよい筈である。とくに平の注をつけて上声韻字をあてているところを見ると、小韻15と16は特別な形式をもっていたものと推定できる。いまこの反切二字を結合するものと見て、

𪛗, 𪛘 thzɔɦ<鎖影者> 𪛙 thɔɦ [thyɔɦ] <鞋底の皮>

を推定しておく。後者は、𪛚 thɔɦ (上42) <鞋の底> を意符・音符とする文字である。

韻図の舌頭・舌上音の欄にある不詳の文字 𪛛 もこの音符を含んでいるから、[tyɔɦ] を表記したものと推定できる。𪛜 には、韻図の位置をもとに zɔɦ を推定する。

『文海』で小韻2 (2字) と小韻3 (1字) を分けるのは新版『同音』の組織と合致するが、旧版『同音』では、四字が一類をなしている (重唇68類)。

旧版『同音』	重唇音68	𪛗	𪛘	𪛙	𪛚	phɔɦ
		└──────────┘				
新版『同音』				独字	?	
		└──────────┘				
『文海』		小韻3		小韻2	?	

おそらく小韻3は \*bɔɦ から来源し、平去声であったものと考えられる。

上声の小韻2は三字で一類をなし、新版『同音』の組織と合致するが、旧版『同音』では、二類に分かれる。

新版『同音』	𪛛	𪛜	𪛝	(No. 4775)
	└──────────┘			
『文海』	上声小韻2	mbɔɦ		
	└──────────┘			
旧版『同音』	独字	重唇66		

『文海』の小韻12と13は、旧版『同音』の喉音小類84と小類85にあたる。小類84は平声韻と上声韻の混合類で、合計十六字が所属する中、六字が平声49韻残りの十字が上声42韻である。『文海』の組織と合致する新版『同音』では、そ

の十六字は小類86 (10字) 上声42韻, 小韻87 (6字) 平声49韻, 小韻88 (2字) 平声49韻の三小類に分かれる。実際には上声42韻は九字になっている。

旧版『同音』喉84 詵-----𦉳。 喉85 𦉳𦉳。

16字

新版『同音』喉86 詵-----。 𦉳-----。 𦉳-----。

10字上声42      6字平声49      2字平声49

『文海』      上声42 9字      小韻12平声49      小韻13平声49

小韻12と13はおそらく声母の来源が異り, 声調で対立したのであろう。

小韻18の文字は, 『同音』の組織と対比して扱うと, 旧版『同音』の小類の中には, 種々混合したものがあることがわかる。この小韻に関しては, 新版『同音』の枠組みを基準に考えるとわかり易い。

新版『同音』流風46 頰-----𦉳。 計10字

旧版『同音』流風42 頰-----𦉳 𦉳 𦉳 𦉳。 計13字

『文海』      上声47韻 \*      平声54韻 [tʷɔN]

新版『同音』流風47 𦉳 𦉳。 計2字

旧版『同音』流風 𦉳 42

『文海』      平声49 tʷɔh

新版『同音』流風48 𦉳 𦉳 𦉳 𦉳。 計4字

旧版『同音』流風 137 (小類42) 137 計3字

『文海』      上声62韻 tʷɔ

新版『同音』小類46 tʷɔN[tʷɔN] (上声47)

小類47 tʷɔh (平声49)

小類48 tʷɔ (上声62)

(\*この文字は実際には上声47韻に登録されていないが, そのように見て誤りはない)

(最後の文字は実際には登録されていないが, 上声62韻と見て誤りはない)

筆者は以前に平声54 = 上声47韻に開口韻 -ɔN を推定したが, 後述するように合口韻 -ʷɔN があり, それらは実際には -ɔN, -ʷɔN と発音された可能性が

大きい (p.67)。後者の形が、この小韻18をめぐる相通関係をよく説明することになる。

『文海雜類』には、平声49韻の反切下字をもつつぎの文字がある。

**釋 務 後**      ʔɔh (平49) <梵語の字母也>

平声49韻・上声42韻の韻母 -ɔh, -ʔɔh と声母の連続関係を表示すると、これらの韻母は、軽唇音, 舌上音, 齒頭音, 正齒音とは全く結び付かなかったことがわかる。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɔh	p-ph- m-mb-	—	t-th- n-nd- thž-thŋ-	—	k-kh- ŋ-ŋg-	—	—	ʔ-	l-ž-
-ʔɔh	—	—	—	—	k-ŋ-	—	—	x-	l-

韻図51を筆者の再構成形式に書き改めると、つぎのようになる。

No. 620	ʔɔh	○	kɔh	tɔh	pɔh	No. 623 (流風音)	žɔh	lʔɔh	lɔh
	○	○	kʔɔh	○	○		○	○	○
	○	○	○	tyɔh(?)	○		žɔh	○	○
			lʔɔh	lɔh					
			○	○					
		žɔh							
		○							
		thɔh (平声49韻代表字)							
		thɔh (上声42韻代表字)							

52. 韻図52 平声50韻・上声43韻

韻図52は、西夏語平声50韻・上声43韻の特定の音節形式を

No. 622	ʔɔh	○	kɔh	tɔh	pɔh
	○	○	kʔɔh	○	○
	○	○	○	○	thɔh (誤り)
			lʔɔh	lɔh	
			○	○	

示したものである。No. 620 の韻図 (34a) では、一段目は重唇・軽唇音と牙音の枠に文字があり、二段目は齒頭・正齒音の枠にのみ西夏字が書かれている。あとの文字は『文海』『文海雜類』『同音』いずれにも登録されていない。流風

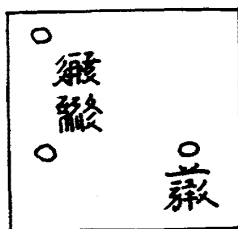
○	○	焮	○	薇	
○	𦉳	○	○	○	
		○𦉳			
		焮			
		薇			

図52 平声50韻上声43韻 No. 620

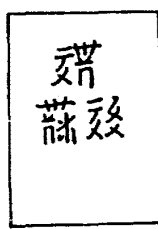
の注字 liuh (上6) の一部 𦉳 を傍として組み合わせたもので、おそらくこの注字は同時に音注になっていると考えられる。tši-liuh=tšliuh その文字の発音は tšliow であったのであろう。筆者は平声50韻・上声43韻の韻母に -iow を推定した。

音類には、五段目があてられ、上方右側に一字あるのみで、上方左側と下方左右両側にそれぞれ丸印が記されている。

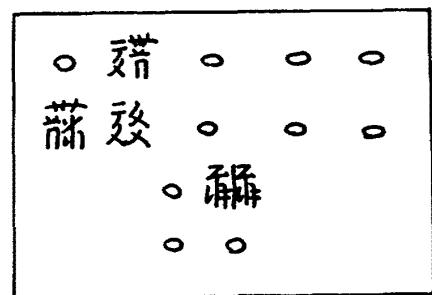
No. 623 (56b) では、重唇・軽唇音の二段目と喉音の欄に書き込みがある。重唇・軽唇音の注字は、**薇** fion (平55) であって、平声50韻と近似した形式を示したものであることがわかるが、左の注字(上) ykië>?ië (平9), (下) ?yir (上77) はいずれも喉音であるほか、何を意味するのか詳かではない。No. 624 (29b) には、齒頭・正齒音の文字に二字の注がつけられ、後代に作られたこの文字を説明している。この文字は右側の注字 tši (上9) の偏 𦉳 を偏とし、左側



No. 623 (重唇・軽唇音と喉音の注字)



No. 624 (齒頭・正齒音の注字)



No. 7192 (二段目 三段目 五段目)

No. 7192 は、No. 620 などと異って、三段目が使われ齒頭・正齒音と喉音の枠に文字が配置されているが、この二字は No. 624 の注字と一致するから

もともとは二段目の tšliow に与えられた注字であったことがわかる。

『文海』平声50韻の各小韻代表字とその反切ならびにそれらに相応すると考えられる上声韻字をあげてみよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
50. 1	茲	靜 嶺	重唇109	p-ïow			
					紅	重唇116-7	ph-ïow
2	律	綴 匪	重唇 92	mb-ïow	統	重唇 92	mb-ïow
3	嶺	訖 茲	牙 92	k-ïow	嶺	牙 92	k-ïow
4	核	核 匪	牙152	kh-ïow	統	牙152	kh-ïow
5	訖	綴 匪	正齒 8	tšh-ïow	統	正齒 独	tšh-ïow
6	匪	嶺 核	正齒(新)独	š-ïow	統	正齒(新)89	š-ïow
					訖	正齒 独	tšl-ïow
7	靜	綴 嶺	流風 独	ʒ-ïow			

上記の反切下字を帰納すると、二類になるが、それらに対立していたとは考え難い。いずれも開口韻 -ïow を代表した。

反切下字	I	嶺 ⇌ 茲	-ïow
	II	匪 ⇌ 核	-ïow

旧版『同音』重唇音小類92は平声韻字と上声韻字の二字一類であり、『文海』の小韻2に相応する。新版『同音』ではそれらは独字の項に移されている。同様に旧版『同音』牙音小類152 khïow も『文海』の小韻4に該当する平声韻字と上声韻字からなるが、新版『同音』では、その二字は当然独字の項に所属させられている。

平声50韻・上声43韻の韻母 -ïow は、重唇音，牙音，正齒音，流風音とのみ連続した。



韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iow	p-ph- mb-	—	—	—	k-kh-	—	tšh-tšl- š-	—	ʁz-

No. 620

○	○	kiow	—	piow
○	tšliow	—	—	—
		○ ʁziow		
		○ ○		
		kiow (平声50韻代表字)		
		kiow (上声43韻代表字)		

韻図52を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。ʁziow は、韻図では、流風音類の l- の位置を占めているから、韻図の言語では liow<sup>(9)</sup>であったかも知れない。

53. 韻図53 平声51韻・上声44韻

韻図53は、西夏語平声51韻・上声44韻の特定の音節形式を図示したものである。

	𐰇	𐰇	𐰇	○	𐰇
	○	𐰇	○	○	○
	○	𐰇	○	○	𐰇
	○	𐰇	○	○	○
			○ 𐰇		
			○ 𐰇		
			𐰇		
			𐰇		

図53 平声51韻・上声44韻 No. 620

No. 620 (34b) の韻図では、一段目は重唇・輕唇音，牙音，齒頭・正齒音と喉音の枠に，二段目と四段目は，齒頭・正齒音に，三段目は重唇・輕唇音の枠と齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が配される。流風音には六段目があてられ，上下とも右側に文字が置かれ，左側には丸印がある。

筆者は平声51・上声44の韻母として，-iɔɸ -ʷiɔɸ を推定した。

No. 623 には，喉音の欄に若干の書き込みがある。いずれも音注と思われ，つぎのように読める。

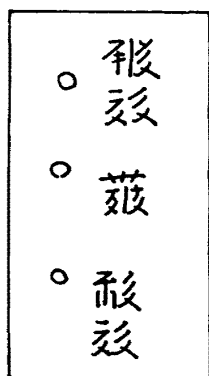
(9) 反切上字の音価か韻図の位置かどちらを優先すべきかはむつかしい問題である。しかし，基本的には，『文海』が代表する言語と韻図が記録した言語の差異として考えるべきであろう。

𦉳𦉳      ʔwɪh-šɪɔh = ʔwɪɔh (上44)

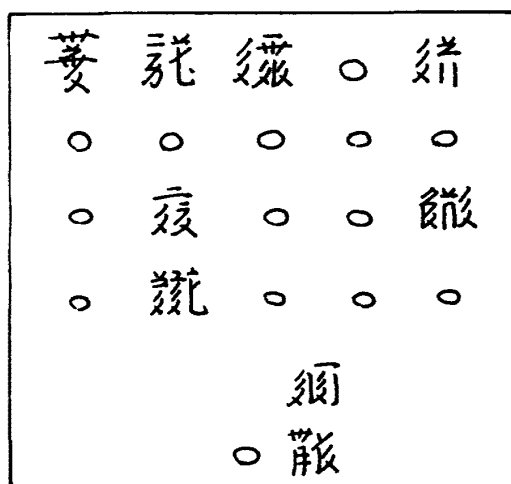
𦉳      ʔyɪɔh (上44)

𦉳𦉳      ɸɪr (平92) - šɪɔh = ɸɪɔh (上44)

また No. 621 (14a) と No. 7192 はほとんど同じ配置を示し、No. 620 と比べると歯頭・正歯音の欄が異っている。異同の具体的な内容についてはあとで示す。



No. 623 (喉音の注字)



No. 621, No. 7192 (韻類代表字は略する)

まず平声韻の各小韻代表字とその反切およびそれらに相應すると考え得る上声韻形式をあげよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
51. 1	𦉳	𦉳 𦉳	輕唇 43	w-ɪɔh			
2	𦉳	𦉳 𦉳	輕唇 43	w-ɪɔh			
3	𦉳	𦉳 𦉳	牙 独	k-ɪɔh	𦉳	牙 独	k-ɪɔh
4	𦉳	𦉳 𦉳	正歯(新) 84	tš-ɪɔh	𦉳	正歯(新) 独	tš-ɪɔh
5	𦉳	𦉳 𦉳	正歯 23	tšh-ɪɔh	𦉳	正歯 23~24	tšh-ɪɔh
					𦉳	正歯 独	š-ɪɔh
					𦉳	喉 81	ʔy-ɪɔh
6	𦉳	𦉳 𦉳	流風 155	l-ɪɔh	𦉳	流風 45	l-ɪɔh

					𪗇	正齒 独	š-ïɔɦ
7	𪗇	𪗇	流風 独	ziɔɦ	𪗇	流風 独	ž-ïɔɦ
8	𪗇	𪗇	重唇120	p-ïɔɦ			
9	𪗇	𪗇	重唇 38	ph-ïɔɦ	𪗇	重唇 39	ph-ïɔɦ
10	𪗇	𪗇	重唇 15	m-ïɔɦ	𪗇	重唇 14	m-ïɔɦ
					𪗇	重唇124	mb-ïɔɦ
					𪗇	舌頭 独	th-ïɔɦ
					𪗇	舌頭 独	nd-ïɔɦ
					𪗇	舌頭 91	n-ïɔɦ
11	𪗇	𪗇	齒頭 独	ts-ïɔɦ			
12	𪗇	𪗇	齒頭 独	tsh-ïɔɦ			
13	𪗇	𪗇	齒頭 25	s-ïɔɦ	𪗇	齒頭 25	s-ïɔɦ
14	𪗇	𪗇	齒頭 独	ts-ʷïɔɦ			
15	𪗇	𪗇	齒頭 61	s-ʷïɔɦ	𪗇	齒頭 61	s-ʷïɔɦ

上記の反切下字を帰納すると、つぎの二類になる。

反切下字	I a	𪗇	⇌	𪗇	
	b	𪗇	→	𪗇	→
				𪗇	⇌
				𪗇	←
				𪗇	-ïɔɦ
	II	𪗇	⇌	𪗇	
					-ʷïɔɦ

I類は a b 共に開口韻 -ïɔɦ を，II類はそれに対する合口韻 -ʷïɔɦ を代表した。後者の形式は，小韻15の文字が漢字表音 相合 をとることによっても支持される。I類の下字を与えられた文字は韻図 (No. 620) の一段目に，II類の下字をもつ文字は四段目にそれぞれ配置されている。韻図では，一つの欄を重唇と輕唇，齒頭と正齒のように二種の音類が共有するために，ここでは上二段と下二段に分けて，上二段には輕唇音と正齒音の開口韻と合口韻を，下二段には重唇音と齒頭音の文字を配分したものと考えられる。

二段目の文字 **𪗇** は、『文海』『文海雑類』『同音』には登録されていないが、この韻図の位置から合口韻  $t\check{s}wioh$  を推定できる。

小韻1と2は、共に旧版『同音』では軽唇音小類43に属するが、新版『同音』ではいずれも独字の項に移されている。この両者は共に動詞の B 形式であり、語幹  $wi$  と人称接辞  $-oh$  に分析できる。

B 形式		A 形式		
<b>𪗇</b>	$wioh$	<b>𪗇</b>	$wi$ (平10)	新版『同音』独字 する
<b>𪗈</b>	$wioh$	<b>𪗈</b>	$wi$ (平10)	小類 5 送る

平声10韻では両者は反切上字で弁別されたがここでは上字は同じで、反切下字が Ia と Ib に書き分けられている。しかし韻図では区別がない。『文海』と新版『同音』で両者を分割したのはどのような理由によるのか確証はないが、いまは平声と平去声の声調の違いにもとづいたものと考えておきたい。

上声韻 **𪗉**  $sioh$  と **𪗊**  $sioh$  は、旧版『同音』と新版『同音』共に独字の項に属しているが、これも声調の相違を反映しているのであろう。

韻図では、流風音にはじまる形式は  $lio$  と  $zio$  の二形式に限られる。小韻7の上声韻字は、ブリテッシュ・ミュージアムに所蔵される韻書の断片の中にその反切が記録されていて、 $zio$  を再構成できる。したがって小韻6にあたる上声韻字は **𪗋** <投げる>であったと考えられ、それには  $lio$  を推定したい。小韻7の平声韻と上声韻の反切は、つぎのように対照される。

<b>𪗌</b>	<b>𪗍</b>	$zio$ (平声)	速く流れる
<b>𪗎</b>	<b>𪗏</b>	$zio$ (上声)	売る

『文海雑類』には、この韻類に所属する以下の文字が登録されている。

<b>𪗐</b>	<b>𪗑</b>	${}^n dzio$ (平51)	(喉を) しめる
<b>𪗒</b>	<b>𪗓</b>	${}^n dzio$ (平51)	食べる
<b>𪗔</b>	<b>𪗕</b>	${}^n dzio$ (上44)	長い
<b>𪗖</b>	<b>𪗗</b>	${}^n dzio$ (上44)	有る

この韻類の形式には、1人称接辞  $-ɔh$  を含んだ動詞形式 (=B 形式) が多い。いまあげた  $\bar{d}z\dot{ɔ}h$  も  $\bar{d}z\dot{ɔ}h$  [反切]  $\bar{d}z\dot{ɔ}h$  (平10) <食べる> [文海雜類] の B 形式である。

この韻類の韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。『文海』『文海雜類』では合口韻は齒頭音とのみ連続するが、韻図には正齒音と結び付く形式が記録されている。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
$-iɔh$	p-ph- m-mb-	w-	—	th-nd- n-	k-	ts-tsh- s- $\bar{d}z$ -	tš-tšh- š- $\bar{d}ž$ -	ʔy-	l-ž-
$-w'iɔh$	—	—	—	—	—	ts-s-	(tš-)	—	—

No. 620	$\bar{y}iɔh$ (上)	$tš\dot{ɔ}h$	$k\dot{ɔ}h$	○	$wiɔh$
	○	$tš^w\dot{ɔ}h$	○	○	○
	○	$ts\dot{ɔ}h$	○	○	$p\dot{ɔ}h$
	○	$ts^w\dot{ɔ}h$	○	○	○
		○ $liɔh$			
		○ $ž\dot{ɔ}h$			
		$s\dot{ɔ}h$ (平声51韻代表字)			
		$s\dot{ɔ}h$ (上声44韻代表字)			

No. 621	$tš\dot{ɔ}h$
No. 7192	○
	$tš^w\dot{ɔ}h$
	$ts\dot{ɔ}h$

韻図53を筆者の再構成形式に書き改めると上のようになる。喉音の  $\bar{y}iɔh$  は上声韻である。また  $wiɔh$  はすでに [ $liɔh$ ] と無声音化していたのであろう。

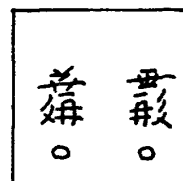
No. 621 と No. 7192 の韻図では、正齒・齒頭音の欄が違っている。これは No. 620 の形を書き誤ったものと思われる。

#### 54. 韻図54 平声52韻・上声45韻

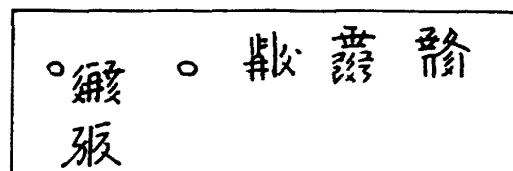
韻図54は、西夏語平声52韻と上声45韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 620 の韻図 (35a) では、一段目の重唇・輕唇音の枠と舌頭・舌上音の枠、それに五段目の流風音の枠の上側左右にそれぞれ西夏字が書き込まれている。No. 622 (4b) は、流風音の枠の下側に丸印がなく、No. 624 (31b) は下側の左右両方に丸印が置かれている。No. 623 (58b) では、一段目牙音の枠に一

○	○	○	𪛗	𪛘	
		𪛗	𪛘		
		𪛗			
		𪛘			

図54 平声52韻・上声45韻 No. 620



No. 624 (流風音)



No. 623 (一段目と喉音の注字)

𪛗 kɔw (上45) <つむじ風>

𪛗 𪛘 =?ië+kɔN (平54)  
=?ɔN (平54) を示している。

字と喉音の丸印の右下に二字（音注）が書き込まれる。

筆者は、平声52韻上声45韻の韻母として、-ɔw を推定した。

つぎに『文海』平声韻各小韻の代表字と反切およびそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
52.					𪛘	重唇 独	p-ɔw
1	𪛗	𪛗 𪛘	重唇 独	ph-ɔw			
2	𪛘	𪛗 𪛘	重唇 99	mb-ɔw	𪛗	重唇 99	mb-ɔw
3	𪛗	𪛗 𪛘	舌頭 36	th-ɔw	𪛗	舌頭 独	t-ɔw
4	𪛗	𪛗 𪛘	舌頭158	n-ɔw	𪛗	舌頭 36	th-ɔw
5	𪛗	𪛗 𪛘	舌頭 独	n-ɔw	𪛗	舌頭158	n-ɔw
					𪛗	舌頭125	n-ɔw
					𪛗	牙 77	k-ɔw

6	泚	𪗇	齒頭 独	s-ɔw	
7	𪗇	𪗇	流風 18	l-ɔw	
8	𪗇	𪗇	流風 18	l-ɔw	
9	𪗇	𪗇	流風独(?)	l-ɔw	𪗇 流風独(?) l-ɔw

上掲反切下字を帰納すると、つぎの二類になり、互に系聯はしないが、共に開口韻 -ɔw を代表したと考えてよい。

反切下字 Ia 𪗇 ⇔ 𪗇 b 泚 → 𪗇 ⇔ 𪗇 -ɔw

小韻4の文字が属する旧版『同音』舌頭音小類158は、平声韻と上声韻の二字で一類をなす。新版『同音』では、共に独字の項に移されている。

小韻7と8の文字は、旧版『同音』では流風音小類18に属し、平声韻と上声韻が混合して、四字で一類をなす。新版『同音』ではその中二字のみで一類を作っている。

旧版『同音』	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇
	└──────────────────┘			
	流風音小類18			
新版『同音』	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇
	└──────────┘			
	流風音小類18		独字(?)	独字
『文海』所属韻	平52	平52	上45	平52

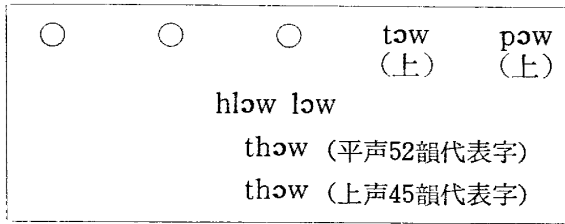
韻図の流風音の枠には二形式が登録されるのみである。小韻7と8の反切上字は互に系聯しないが、共に l- を代表したと考えれば、小韻9の形式は、反切によると low となるが、韻図の言語では hlow であつたと推定できる。<sup>〔補注1〕</sup>

𪗇 (平5) → 𪗇 ⇔ 𪗇 l-

韻母 -ɔw と声母の連続関係を表示すると、この韻母は軽唇音、舌上音、正齒音、喉音とは結び付かなかつたことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɔw	p-ph- mb-	—	—	t-th- n-	k-	s-	—	—	l-hl-

No. 620

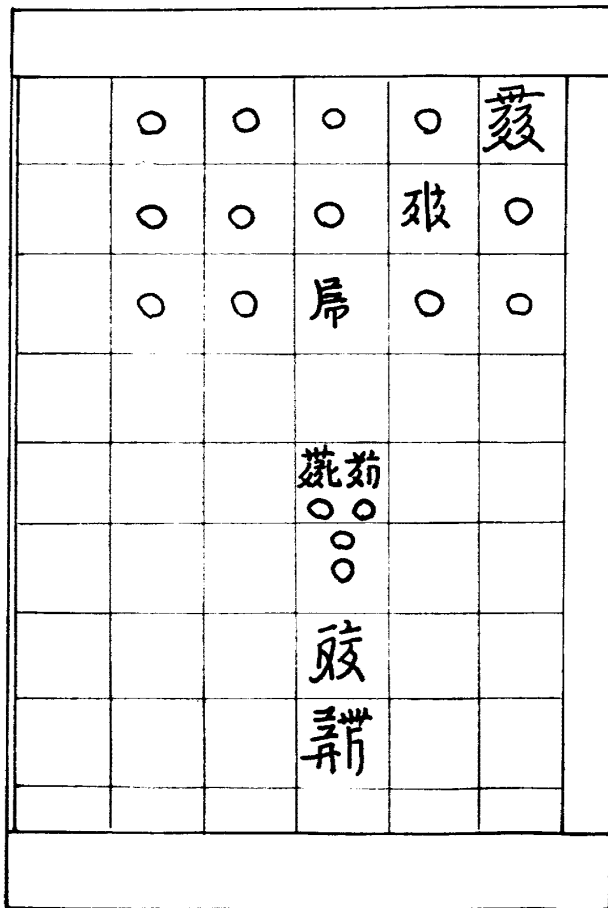


韻図54の形式を筆者の再構成形式に書き改めると、左のようになる。tow, pow いずれも上声韻字である。No. 623 の韻図では、この牙音の枠に kow(上) が

加えられている。

55. 韻図55 平声53韻・上声46韻

韻図55は、西夏語平声53韻・上声46韻の特定の音節形式を図示したものである。



No. 620 (35b) の韻図では、一段目は重唇・軽唇音の枠、二段目は舌頭・舌上音の枠、三段目は牙音の枠にそれぞれ西夏字が置かれる。五・六段目は流風音にあてられるが、五段目の上側左右に二字書き込まれるのみで、下側左右と六段目の上下に丸印がある。No. 623 (59a) と No. 624 (31b 下段) は、No. 620 の配置と合致するが、No. 622 (5a) は、流風音のところ

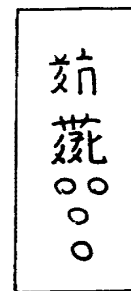


図55 平声53韻・上声45韻 No. 620

No. 622 (流風音)

がやや異なる。

筆者は、平声53韻・上声46韻の韻母として -ow を推定した。

まず『文海』の平声韻各小韻の代表字とその反切、そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式を列举しよう。



	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
53. 1	𪗇	𪗇𪗇	重唇 98	mb-ow <sub>2</sub>	𪗇	重唇 独	mb-ow <sub>2</sub>
2	𪗈	𪗈𪗈	牙 独	k-ow <sub>2</sub>			
3	𪗉	𪗉𪗈	牙 独	kh-ow <sub>2</sub>			
4	𪗊	𪗊𪗈	牙 独	ŋ-ow <sub>2</sub>			
5	𪗋	𪗋𪗈	正歯 64	š-ow <sub>2</sub>	𪗌	正歯 64	š-ow <sub>2</sub>
					𪗍	重唇111	ph-ow
6	𪗎	𪗎𪗎	軽唇 独	mʲv-ow			
7	𪗏	𪗏𪗎	牙 独	ŋ-ow	𪗐	牙 独	ŋ-ow
8	𪗑	𪗑𪗎	正歯 独	š-ow	𪗒	正歯 独	š-ow
					𪗓	流風 独	l-ow
9	𪗔	𪗔𪗔	舌頭 独	t- <sup>w</sup> ow			
10	𪗕	𪗕𪗔	舌頭 独	th- <sup>w</sup> ow			
11	𪗖	𪗖𪗔	舌頭 独	n- <sup>w</sup> ow			
12	𪗗	𪗗𪗔	流風 独	l- <sup>w</sup> ow	𪗘	流風 独	l- <sup>w</sup> ow

上記の反切下字を整理すると，三類に別れる。

反切下字	I	𪗇 → 𪗈 ⇔ 𪗉	-ow <sub>2</sub>
	II	𪗎 ⇔ 𪗏	-ow
	III	𪗔 ⇔ 𪗕	- <sup>w</sup> ow

I類は小韻1から5まで（重唇，牙，正歯），II類は小韻6から8まで（軽唇，牙，正歯），III類は小韻9から12まで（舌頭・流風）に使われる。この三類の弁別はまた上掲の韻図における配置によって支持される。I類は三段目，II類は二段目，そしてIII類は一段目にそれぞれ配置されている。したがって原則にしたがって，一段目は開口韻 -ow，二段目は合口韻 -<sup>w</sup>ow，三段目はそれらに対立する -ow<sub>2</sub> [実際の音価は不詳] をそれぞれ代表したものと推定できる。

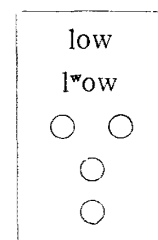
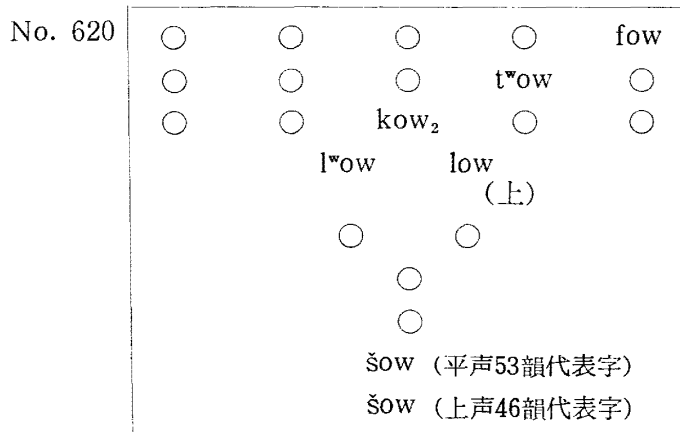
同じ初頭音をもち実際に対立を示すのは、小韻5 𪛗 <集> と小韻8 𪛘 <斬>で、その反切上字は系聯しないが共に *š-* を代表したと考えられる。もし韻図上にこの二字を配置すると<集>を三段目に、<斬>を一段目に置かねばならない。この<斬>と対になる上声韻字 𪛘 𪛙 は、特定の意味をもたず韻類代表字（上声46韻）として作り出されたもので、『同音』（旧版）では 𪛘 𪛙 <韻字の注がある。新版『同音』では 𪛘 <韻>だけの注になっている。小韻5の<集>には、𪛚 <双>があるのに、8の<斬>を平声韻代表字としそれと対になる上声韻代表字を作り出したのは、一段目に配置される音節がこの韻類の正当な形式と見たからであろう。この韻類の所属字には独字が多い。

この韻類の三つの韻母と声母の連続関係を、つぎに表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ow	ph-	mv-	—	—	ŋ-	—	š-	—	l-
- <sup>w</sup> ow	—	—	t-th-	—	—	—	—	—	l-
			n-						
-ow <sub>2</sub>	mb-	—	—	—	k-kh-	—	š-	—	—
					-ŋ				

これらの韻母は、舌上音、齒頭音、喉音とは結び付かず、合口韻は舌頭音と流風音にのみあらわれたことがわかる。

韻図55を筆者の再構成形式によって書き改めると、下のようになる。韻図の言語では、*mv-*→*f-* の変化を完了していたのであろう。No. 622 の韻図では、流風音の配置が開口韻形式と合口韻形式を上下に並べた形になっている。



No. 622

56. 韻図56 平声54韻・上声47韻

韻図56は、西夏語平声54韻・上声47韻の特定の音節形式を図示したものである。

𐰇	𐰈	𐰉	𐰊	𐰋	
𐰌	○	𐰍	○	○	
		𐰎	𐰏		
		○	𐰐		
		𐰑			
		𐰒			

図56 平声54韻・上声47韻 No. 620

No. 620 の韻図では一段目はすべて枠に西夏字が埋められ、二段目は牙音と喉音のみに文字が置かれる。五段目の流風音には上方右側中央左側と文字が配され、六段目は上方右側に一字と左側に丸印がある。

No. 623 (59b) の韻図には、重唇・軽唇音の欄の二段目に一字書き込まれている。この文字は、喉音類で、この平声54韻に属する。No. 622 (5b) は No. 620 と五段目流風音のところが少し異り、No. 624 (32a 上段) は No. 620 と比べると、流風音五段目上方の左側の文字と中央の文字の配置が逆になっている。

筆者は平声54韻・上声47韻の韻

𐰊	𐰋
○	𐰌

No. 623 (重唇・軽唇音)

𐰎	𐰏	𐰐
	○	𐰑

No. 622 (流風音 五段目)

𐰏	𐰎	𐰐
	○	𐰑

No. 624 (流風音 五段目)

母として -ON を推定した。しかし、この韻図から見ると、実際にはそれと対になる合口韻 -<sup>w</sup>ON も含まれていたことがわかる。そして、この -ON, -<sup>w</sup>ON は、対立する -ON, -<sup>w</sup>ON をもたなかったから、平声54韻・上声47韻は広い母音 [ɔ] をもって発音された可能性も大きい (cf. p. 53)。

まず『文海』平声韻各小韻の代表字と反切、そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげよう。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
54. 1	翁	該	重唇 独	p-ON			
2	翁	該	重唇 70	ph-ON	侂	重唇 70	ph-ON
3	翁	該	重唇 74	m-ON	茲	重唇 74	m-ON
4	翁	該	舌頭 17	t-ON			
5	翁	該	舌頭 独	th-ON	侂	舌頭 独	th-ON
6	翁	該	舌頭 49	n-ON	龍	舌頭 50	n-ON
7	翁	該	牙 23	k-ON	翁	牙 23	k-ON
8	翁	該	牙 60	kh-ON	翁	牙 独	kh-ON
9	翁	該	齒頭 94	ts-ON	翁	齒頭 94	ts-ON
10	翁	該	齒頭 10	s-ON	翁	齒頭 10	s-ON
11	翁	該	齒頭 19	s-ON			
12	翁	該	喉 35	x-ON	翁	喉 35	x-ON
13	翁	該	喉 74	ʔ-ON	翁	喉 独	ʔ-ON
14	翁	該	牙 独	k- <sup>w</sup> ON	翁	牙 153	k- <sup>w</sup> ON
					翁	齒頭 独	tsh- <sup>w</sup> ON(?)
15	翁	該	輕唇 23	ʔ- <sup>w</sup> ON			
16	翁	該	輕唇 独	ʔ- <sup>w</sup> ON	翁	輕唇 独	ʔ- <sup>w</sup> ON
17	翁	該	流風 52	l-ON	翁	流風 52	l-ON
18	翁	該	流風 42	l-ON	翁	流風 42	l-ON
19	翁	該	流風 独(?)	ʒ-ON	翁	流風 59	ʒ-ON
20	翁	該	流風 独	l- <sup>w</sup> ON			

上記の反切下字を整理すると、つぎの三類になる。

反切下字 I 𦉳 → 𦉳 ⇄ 𦉳

Ⅱ 𦉳 → 𦉴 → 𦉵 → 𦉶 (𦉷) ⇌ 𦉸 → 𦉹 (𦉺) → 𦉻 (𦉼)

-ON

Ⅲ 𦉽 ⇌ 𦉿

-<sup>w</sup>ON

韻図では三段に分けられていないところから見ると、この韻類の韻母は二つで、反切下字Ⅰ類とⅡ類は韻図の一段目に置かれ開口韻 -ON を、Ⅲ類は二段目に配置されその合口韻 -<sup>w</sup>ON を、それぞれ代表したと考えられる。

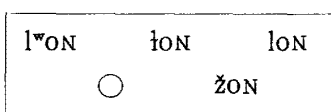
小韻10と11は、反切上字下字いずれも系聯して、共に SON をあらわした。おそらく11は平去声であったろう。

小韻15と16の反切上字は喉音に属し、ʔ- を代表した。ところが『同音』では、旧版新版共に、これらの文字は軽唇音類に属している。したがって、『同音』のシステムでは、15. f<sup>w</sup>ON 16. w<sup>w</sup>ON となるが、『文海』の反切にしたがうと、どちらも ʔ<sup>w</sup>ON を伝えている。そして韻図 No. 620. 622. 624 では、それらは喉音の合口韻の枠に配置された。それに対して、No. 623 の韻図だけが、古い形式にしたがって、小韻15の文字を軽唇音の枠に入れたことになる。

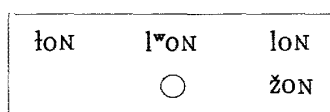
	『同音』	旧版	新版	『文海』
𦉵	f <sup>w</sup> ON	(23類)	(36類)	→ ʔ <sup>w</sup> ON (平54)
𦉶 𦉷	w <sup>w</sup> ON	(独字)	(独字)	→ ʔ <sup>w</sup> ON (平54) (上47)

韻図の流風音類は、つぎのように考える。

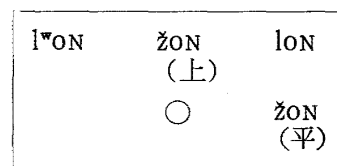
No. 620 上方の三字は右から lon lon l<sup>w</sup>ON とならび下方の一字は žON を代表する。中央の文字𦉸は小韻20𦉽と同音節である。No. 624 は中央と左側の文字が入れ替っており、右から lon l<sup>w</sup>ON lon と並ぶ。No. 622 は中央の文字が小韻19にあたる上声韻字で、右から lon, žON, l<sup>w</sup>ON と並べられる。おそらくこの中央の字は、lon を書き誤ったのであろう。



No. 620



No. 624



No. 622

なお上声47韻代表字は、上掲 **𐵓** と同形式である。

『文海雜類』には、この韻類に属するつぎの二字が登録されている。

**𐵓**    **𐵓**    SON (平54)    皇后

**𐵓**    **𐵓**    <sup>h</sup>dzON (平54)    智慧

反切上字 **𐵓** は『文海雜類』に含まれる若干の文字の間で系聯する。

**𐵓** → **𐵓** ⇌ **𐵓**    s-

(上29)            (上12)            (平7)

この韻類の二韻母と声母の連続関係を表示すると、それらの韻母は舌上音と正歯音には結び付かず、合口韻は、軽唇音，牙音，齒頭音，流風音と連続したことがわかる

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ON	p-ph- m-	—	t-th- n-	—	k-kh-	ts-s- <sup>h</sup> dz-	—	ʔ-x-	l-l- ʒ-
- <sup>w</sup> ON	—	f-w-	—	—	k-	tsh-(?)	—	ʔ-	l-

No. 620

ʔON	tSON	kON	ton	pon
ʔ <sup>w</sup> ON	○	k <sup>w</sup> ON	○	○
	l <sup>w</sup> ON	lon	lon	
	○	ʒON		
	XON (平声54韻代表字)			
	XON (上声47韻代表字)			

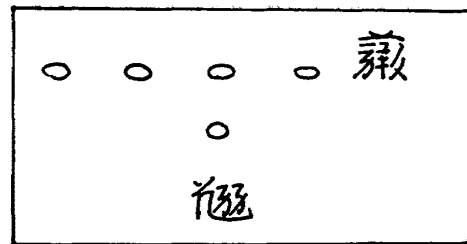
韻図56を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

### 57. 韻図57 平声55韻・上声48韻

韻図57は、西夏語の平声55韻・上声48韻の特定の形式を図示したものである。No. 620 の韻図 (36b) では、一段目は舌頭・舌上音の枠以外に西夏字が置かれ、二段目は喉音のところに限って文字を配している。

No. 622 (6a) は No. 620 と一致し、No. 623 と No. 624 では、二段目の喉音の文字が重唇・軽唇音の欄に移動している。No. 623 の方はあとでそのよ

	𪛗	𪛘	𪛙	○	𪛚
	𪛛	○	○	○	○
			○		
			𪛜		
			𪛙		
			𪛞		



No. 624 (二段目と流風音)

うに書き込まれたことがはっきりしている。筆者は平声55韻・上声48韻の韻母として、-iŋ を推定した。

まず『文海』平声韻各小韻の代表字とその反切，そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげたい。

図57 平声55韻・上声48韻 No. 620

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
55. 1	𪛚	𪛛𪛙	重唇 独	p-iŋ			
2	𪛛	𪛜𪛙	重唇115	ph-iŋ			
3	𪛜	𪛝𪛙	重唇115	ph-iŋ			
4	𪛝	𪛞𪛙	舌上 独	n <sub>ɿ</sub> -iŋ	𪛞	舌上 4	n <sub>ɿ</sub> -iŋ
5	𪛞	𪛟𪛙	牙135	k-iŋ	𪛟	牙 135	k-iŋ
6	𪛟	𪛠𪛙	牙 独	kh-iŋ			
7	𪛠	𪛡𪛙	正齒118	tš-iŋ	𪛡	正齒 独	tš-iŋ
8	𪛡	𪛢𪛙	正齒 独	š-iŋ			
9	𪛢	𪛣𪛙	喉 独	ʔ-iŋ	𪛣	喉 独	ʔ-iŋ
					𪛤	流風140	ž-iŋ

𪗇 舌頭 独 -iON

10 𪗇 𪗇 𪗇 正齒 独 tšh-<sup>w</sup>iON

11 𪗇 𪗇 𪗇 輕唇 独 w-iON

上記の反切下字を整理すると、一類にまとまる。何故か小韻9に上声韻字が一字使われている。

反切下字 I 𪗇 → 𪗇 → 𪗇 → 𪗇 ⇔ 𪗇(𪗇) -iON  
 (上) (平)  
 𪗇 ↗

韻図57の二段目に置かれる文字は『同音』では輕唇音類に属しており、w<sup>i</sup>ONの形式をもっていた。『文海』ではこの形式の反切上字に喉音 ʔ- の文字を使っている。そして No. 620 の韻図では喉音の合口韻の位置が与えられるが、No. 623 と No. 624 の韻図ではこの文字は輕唇音のところに置かれていて、『同音』と合致した形を示している。小韻10は、この文字を反切下字としているために tšh<sup>w</sup>iON を推定した。この形は無声出気音にはじまるから、韻図の二段目に記録されていなくて当然である。

小韻2と3は共に ph<sup>i</sup>ON であり、旧版『同音』では重唇115に属し、四字で一類をなすが、新版『同音』ではその一類は独字と三字一類に分割されている。

旧版『同音』重唇115 𪗇 𪗇 𪗇 𪗇 四字一類 ph<sup>i</sup>ON

新版『同音』重唇音 独字 𪗇 𪗇 𪗇 𪗇 三字一類

後者はおそらく平去声で発音したのであろう。

流風音と連続する形式は上声韻のみで、𪗇 は韻図の位置から、ž<sup>i</sup>ON であったと推定できる。

しかし上声 𪗇 <妹>は t<sup>i</sup>ON でないことは確かであるが、th<sup>i</sup>ON, nd<sup>i</sup>ON, n<sup>i</sup>ON のいずれであったのかは、推定する根拠に欠ける。

この韻母 -iON と声母の連続関係をつぎに表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iON	p-ph-	w-	ʔ	n <sub>r</sub> -	k-kh-	—	tš-tšh- š-(tšh <sup>w</sup> -)	ʔ-	ž-



No. 620

ʔiON	tšiON	k̄iON	○	piON
(ʷ)wiON	○	○	○	○
		○		
		žiON		
		k̄iON (平声55韻代表字)		
		k̄iON (上声48韻代表字)		

この韻母は、齒頭音とは結び付かなかった。

韻図57を、筆者の再構成形式を以って書き改めると、左のようになる。

58. 韻図58 平声56韻・上声49韻

韻図58は、西夏語平声56韻・上声49韻の特定の音節形式を図示したものである。

𐰪	𐰪	𐰪	○	○	
○	𐰪	○	○	○	
𐰪	○	○	○	○	
𐰪	○	○	○	○	
		○ 𐰪			
		○ 𐰪			
		𐰪			
		𐰪			

No. 620 の韻図 (37a) によると、一段目は牙音，齒頭・正齒音，喉音の枠，二段目は齒頭・正齒音の枠，そして三段目と四段目は喉音の枠に，それぞれ一字西夏字が書き込まれている。四段目には上(声)の注がつけられる。五段目の流風音には，上段下段ともに右側に文字が置かれ，左側には丸印がある。

No. 623 (61b) の韻図には，重唇

No. 623  
(部分)

○	𐰪
○	𐰪
○	𐰪

重唇・輕唇音の枠に書き込みがある

図58 平声56韻・上声49韻 No. 620

・輕唇音の欄に三字の書き込みがあるが，判読し難い。No. 622 (6b) と No. 624 (33b) の韻図では，四段目の文字の下に上(声)の注がない。No. 622 では，その替りに中央下部に大きく書かれた上声韻代表字の下に，上(声)の注がつけられている。

筆者はいままでこの韻類の韻母として，-iʷON を推定して来たが，いまそれ

を -iɔN と -iʷɔN に改める。すぐあとで述べるように、実際にはこのほかに、  
-iɔN<sub>2</sub>, -iʷɔN<sub>2</sub> を認めなければならない。

まず『文海』平声韻各小韻代表字とその反切，そしてそれらに相応すると考  
えられる上声韻形式を列挙する。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
56.					羸	舌上 3	ŋ-iɔN
1	羸	羸弱	牙 33	k-iɔN	羸	牙 33	k-iɔN
2	羸	羸旤	牙101	kh-iɔN <sub>2</sub>	羸	牙100	kh-iɔN <sub>2</sub>
					羸	牙 3	ŋ-iɔN
3	羸	𪗇羸	正齒 6	tš-iɔN	羸	正齒 独	tš-iɔN
4	羸	羸羸	正齒 57	tšh-iɔN			
5	羸	羸旤	正齒 独	tšh-iɔN <sub>2</sub>			
6	羸	羸旤	正齒 33	š-iɔN	羸	正齒 33	š-iɔN
7	羸	羸羸	喉 独	ʔ-iɔN	羸	喉 20	ʔ-iɔN
8	羸	羸旤	喉 15	x-iɔN <sub>2</sub>	羸	喉 15	x-iɔN <sub>2</sub>
9	羸	羸旤	喉 92	ʔy-iɔN <sub>2</sub>	羸	喉 独	ʔy-iɔN <sub>2</sub>
10	羸	羸旤	流風 62	l-iɔN	羸	流風 62	l-iɔN
11	羸	羸旤	流風119	l-iɔN <sub>2</sub>			
12	羸	羸旤	流風 独	ž-iɔN <sub>2</sub>	羸	流風178	ž-iɔN <sub>2</sub>
13	羸	羸旤	𪗇 正齒 独	štšh-iʷɔN 平			
14	羸	羸旤	牙171	ŋ-iʷɔN	羸	牙163	ŋ-iʷɔN
					羸	正齒 独	tš-iʷɔN
					羸	正齒 独	tšh-iʷɔN
15	羸	羸旤	正齒 独	š-iʷɔN	羸	正齒 独	š-iʷɔN
					羸	喉 20	ʔy-iʷɔN <sub>2</sub>

上記の反切下字を帰納すると，つぎの三類になる。

反切下字	I	𦉰 → 𦉱 (𦉲) ⇌ 𦉳 (𦉴)	-iɔN
		𦉵	
	II	𦉶 ⇌ 𦉷 ← 𦉸	-iɔN <sub>2</sub>
	III	𦉹 ⇌ 𦉺	-i <sup>w</sup> ɔN

I類は開口韻 -iɔN を代表し、韻図では一段目に、III類はその合口韻 -i<sup>w</sup>ɔN であって、韻図の二段目に置かれる。そしてII類は韻図の三段目に配されるから、韻図の原則にしたがって、-iɔN、-i<sup>w</sup>ɔN に対立する -iɔN<sub>2</sub> を推定したい。

IV類にあたる形式は平声韻には含まれず、上声韻にのみあって、最後にあげた 𦉻 ʔy<sup>i</sup>ɔN<sub>2</sub> がそれである。韻図では四段目に置かれ、そこではとくに上(声)とことわっている。

流風音類の形式に対しては、どの韻図もその配置から見て、l- と ž- の二形式に限って登録している。小韻10は liɔN、小韻11は liɔN<sub>2</sub> で共に一形式として上段右側に置かれ、小韻12は žiɔN<sub>2</sub> で下段右側に配置された。この流風音形式については -iɔN と -iɔN<sub>2</sub> を、韻図では弁別していないことになる。

上声合口韻で正歯音と結び付く形式は、それ自体はっきりとした根拠に欠けるが、文字の配列順にしたがって、

𦉻 tš<sup>i</sup>ɔN (上) 放つ

𦉷 tš<sup>h</sup>i<sup>w</sup>ɔN (上)

𦉺 š<sup>i</sup>ɔN (上) 奉納する

を推定する。この推定の妥当なことは、小韻13の反切によって証明できる。その反切 𦉻 𦉷 [𦉺は誤り] は、子音結合をもつ形式 š<sup>i</sup><sub>2</sub>-tš<sup>h</sup>i<sup>w</sup>ɔN=štš<sup>h</sup>i<sup>w</sup>ɔN を表記したもので、ちょうど上述の平声48韻の小韻6 štšhor の表記に二字を使ったのと同じ手段を用いている。ここでも子音結合であることを示すために、反切下字には上声韻字をあてた。それ故、平の注が必要であったのである。

正歯音合口韻の枠に書き入れられた 𦉻 は、『文海』『同音』の中には見当たらないが、おそらく上声韻字 𦉻 tš<sup>i</sup>ɔN (上) に対する平声の形式であろう。

『文海雜類』にはこの韻類に属するつぎの文字が記録されている。

𠵹	𠵹	𠵹	<sup>a</sup> dʒiɔN <sub>2</sub>	<遍, 度>
𠵹	𠵹	𠵹	<sup>a</sup> dʒi <sup>w</sup> ɔN	<鳥>
𠵹	𠵹	𠵹	hliɔN	<掃草>

この韻類の韻母と声母の連続関係を表示する。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iɔN	—	—	ŋ-	—	k-ŋ-	—	tš-tšh- š- <sup>a</sup> dž-	ʔ-	l-hl-
-i <sup>w</sup> ɔN	—	—	—	—	ŋ-	—	tš-tšh- štšh-š- <sup>a</sup> dž-	—	—
-iɔN <sub>2</sub>	—	—	—	—	kh-	—	tšh-	x-ʔy-	l-ž-
-i <sup>w</sup> ɔN <sub>2</sub>	—	—	—	—	—	—	—	ʔy-	—

No. 620

ʔiɔN	tš <sup>i</sup> ɔN	k <sup>i</sup> ɔN	○	○
○	tš <sup>i</sup> <sup>w</sup> ɔN	○	○	○
ʔy <sup>i</sup> ɔN <sub>2</sub>	○	○	○	○
ʔy <sup>i</sup> <sup>w</sup> ɔN <sub>2</sub> (上)	○	○	○	○
	○	liɔN		
	○	ž <sup>i</sup> ɔN		
		ʔy <sup>i</sup> ɔN <sub>2</sub> (平声56韻代表字)		
		ʔy <sup>i</sup> ɔN <sub>2</sub> (上声49韻代表字)		

これらの韻母は、重唇音、軽唇音、舌頭音、齒頭音とは全く結び付かない。

韻図58を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

59. 韻図59 平声57韻

韻図59は、西夏語平声57韻の特定の形式を図示したものである。No. 620の韻図(57b)では、一段目は齒頭・正齒音と喉音の枠に、二段目は舌頭・舌上音の枠にそれぞれ西夏字が配される。流風音に対しては五段目に丸印、六段目に枠一杯に一字が大書されている。No. 623(63a)には<三有り>の書き込みがあり、No. 624(34a 上段)はNo. 620と一致する。またNo. 622(7a)は、流

	𪛗	𪛘	○	○	○
	○	○	○	𪛙	○
			○		
			𪛚		
			𪛛		
			𪛜		

散  
流

No. 623 (書き込み)

風音五段目の丸印がない点を除いて No. 620 と合致する。

この韻類は平声韻のみで、相応する上声韻がない。したがって、韻図にも平(声)の注記がついている。筆者は平声57韻の韻母として  $-i^w\circ$  を推定したが、あとで述べるように、その形を、標準音として考え得る  $-i\circ$  に改めたい。

『文海』平声韻各小韻の代表字とその反切を列挙する。

図59 平声57韻 No. 620

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	旧再構成形式	改訂形式
57. 1	𪛘	𪛛 𪛜	正齒117	$tš-i^w\circ$	$\rightarrow tš-i\circ$
2	𪛙	𪛛 𪛜	正齒 79	$tšh-i^w\circ$	$\rightarrow tšh-i\circ$
3	𪛚	𪛛 𪛜	正齒 5	$š-i^w\circ$	$\rightarrow š-i\circ$
4	𪛛	𪛛 𪛜	喉 21	$ʔy-i^w\circ$	$\rightarrow ʔy-i\circ$
5	𪛜	𪛛 𪛜	舌頭145	$n-i^w\circ$	$\rightarrow n-i\circ$
6	𪛙	𪛛 𪛜	流風 独	$ž-i^w\circ$	$\rightarrow ž-i\circ$

上記の反切下字は、二字で互に系聯し一類をなす。

反切下字 I 𪛜  $\rightleftharpoons$  𪛘  $-i\circ$

韻図で一段目に置かれた文字、すなわち小韻1と小韻4の文字には開口韻

-io を、それに対して二段目の文字には合口韻 -i<sup>w</sup>o を推定したいが、小韻 1 と小韻 4 の文字は、『掌中珠』において、共に □<sub>合</sub> の漢字表音をもっている。

		『掌中珠』漢字表音		
正齒	5	𪛗	東 <sub>合</sub> , 蜀 <sub>合</sub>	<食物>
喉	21	𪛗	藥 <sub>合</sub>	<功德>
		𪛗	与 <sub>合</sub>	<裁く>

それ故、筆者は平声57韻の韻母を -i<sup>w</sup>o とした。ところが韻図をみると、これらの文字は一段目開口韻の枠に配置され、それらと対立して二段目合口韻の舌頭・舌上音の枠に別の一字がある。もし一段目の文字を -i<sup>w</sup>o と推定すると二段目の文字と弁別できなくなる。したがって、この韻母を -i<sup>w</sup>o と発音したのは、『掌中珠』が代表する東の地域の西夏語で、首都圏の標準音では、-io と発音し、一方それに対立する合口韻 -i<sup>w</sup>o をもつ形式もあって、この韻図では ti<sup>w</sup>o の形が登録されたと考えたい。ただし、その文字 ti<sup>w</sup>o は、『文海』『文海雑類』『同音』の中に含まれておらず、おそらく後代に作られた字形であろう。このように解釈すると、この韻図の枠組みは理解できる。

標準音（韻書韻図が代表）      東の地域の方音（『掌中珠』が代表）

𪛗	šio	š <sup>w</sup> io
𪛗	ʔyio	ʔyi <sup>w</sup> o

筆者は、新しい再構成形式として、開口韻 -io（合口韻 -i<sup>w</sup>o）を認めたい。『文海雑類』には、平声57韻の反切下字をもつ文字が若干含まれている。

𪛗	𪛗	ʔdžio	うどん粉	𪛗	𪛗	lio
𪛗	𪛗	ʔdžio	勝つ	𪛗	𪛗	hlio 塚

韻図の流風音類の枠には ž-io があるのみで、『文海雑類』に含まれる l- hl- にはじまる形式は登録されていない。

これらの韻母と声母の連続関係を表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-i <sup>o</sup>	—	—	n-	—	—	—	tš-tšh- š- <sup>o</sup> dž-	ʔy-	ž- (l-hl-)
-i <sup>wo</sup>	—	—	t-	—	—	—	—	—	—

No. 620

ʔyio	tšio	○	○	○
○	○	○	ti <sup>wo</sup>	○
		○		
		žio		
		ʔyio (平声57韻代表字)		
		平		

韻図59を筆者の新しい再構成形式で書き改めると、左のようになる。

60. 韻図60 上声50韻

上声50韻					
𪛗	○	○	○	○	
		○			
		○			
		𪛗			
		𪛗			

図60 上声50韻 No. 620

韻図60は、上声50韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 620の韻図(38a)では、一段目喉音の枠に西夏字一字が入る以外は、丸印が六個置かれるにとどまる。No. 622(7b), No. 624(34a下段)はNo. 620と合致し、No. 623(63b)は、中央部に𪛗𪛗の書き込みがある。この二字が何を意味するのか不詳である。

韻類代表字の下に上(声)の字が書かれているごとく、この韻図には上声韻があるのみでそれにあたる平声韻はない。当初は上声50韻は平声57韻に相応する上声韻と考えていたが、韻図を二分しているところから、平声57韻 -i<sup>o</sup> に対

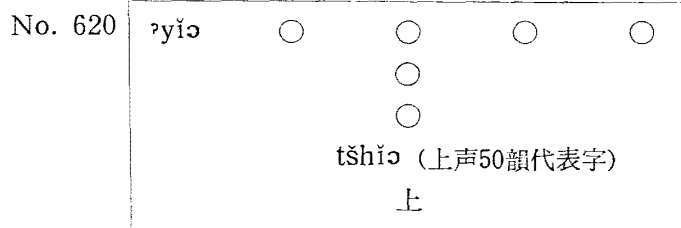
立する上声50韻 -iɔ を推定しておきたい。所属字は僅かに四字に限られ、いずれも反切はわからない。『同音』(旧版) 喉音小類97に属する別の一字も、新版『同音』で一類をなすから、同じく上声50韻と見てよいであろう。

𪚩   𪚪   𪚫
 
ʔšhiɔ

 𪚬 (𪚭)
 
ʔyiɔ

旧正齒50   新正齒57
旧喉97   新喉97

ʔyiɔ に与えられた『掌中珠』における漢字表音 藥合 は、平声57韻の場合と



同じように扱える。\*tšhiɔ の形ははっきりとした根拠がないが、仮りにそのように推定しておく。韻図60を筆者の再構成形式で書き改めると、左のようになる。

61. 韻図61 平声58韻・上声51韻

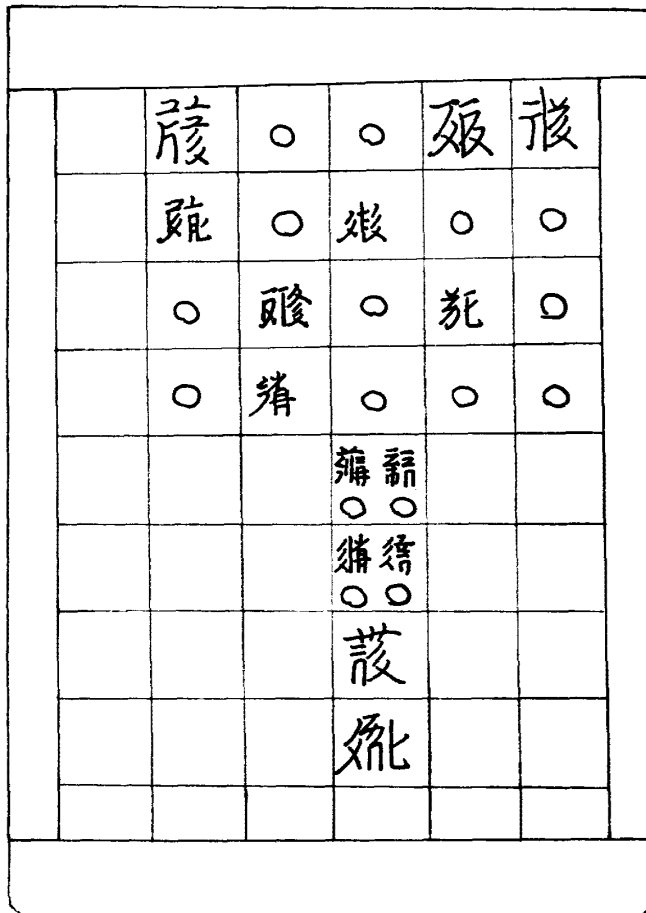
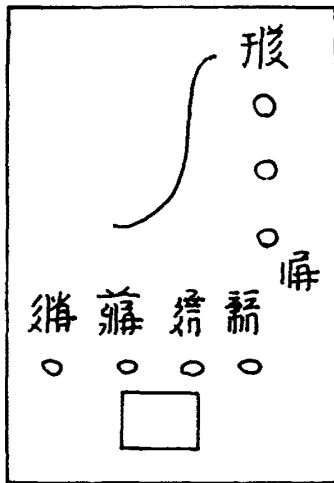


図61 平声58韻・上声51韻 No. 620

韻図61は、西夏語平声58韻・上声51韻の特定の音節形式を図示したものである。韻図 No. 620では(38b), 全部で六段が使われ、一段目は重唇・軽唇音, 舌頭・舌上音と喉音の枠, 二段目は牙音と喉音の枠, 三段目は, 舌頭・舌上音と齒頭・正齒音の枠, 四段目は齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が一字づつ配置される。五段目と六段目は同じように上方左右に二字並べられ, 下方左右に丸印が二つ置かれる。この流風音の丸印は, 合口韻形式がなかったことを示している。

No. 624 (20b) は, No. 620 と合致するが, No. 622 (8a) は, 二段目の牙音の文字がないのと, 六





No. 623 (部分)

段目の流風音の下側の丸印が二つとも欠いている点で、No. 620 と相違する。No. 623 (65a) は、No. 620 に比べて、重唇・軽唇音の欄の四段目に書き込みがあるほか、流風音の形式の配置が異っている。もとの体裁 (No. 620 と同じ) の上に紙を貼り、その紙の上段に、No. 620 と同じ四つの文字を左右一列に並べ、その下に丸印を四つ置いている。

筆者は平48韻・上声51韻の主要韻母として、-u の緊喉母音 -u を推定した。

まず『文海』の平声韻各小韻代表字と反切、およびそれらに相応すると考え得る上声韻形式を列挙しよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
58.					脣	重唇123	p-u
1	脣	脣 該	舌頭127	n-u			
2	該	該 脣	舌頭 独	n-u	脣	舌頭 69	n-u
3	脣	脣 脣	舌頭 独	nd-u			
4	脣	脣 脣	喉 88	?w-u	脣 脣 脣	牙 11 喉 89 流風 独	k-u ?w-u l-u
5	脣	脣 該	軽唇 独	w-u			
6	脣	脣 脣	舌頭126	t-u <sub>2</sub>	脣	舌頭126	t-u <sub>2</sub>
7	脣	脣 脣	舌頭 独	n-u			
8	脣	脣 脣	牙 独	ŋ <sup>w</sup> -u <sub>2</sub>			
9	脣	脣 脣	流風 独	hl-u <sub>2</sub>	脣 脣	齒頭 独 流風 独	ts-u <sub>2</sub> hl-u <sub>2</sub>
10	脣	脣 該 脣	牙 67	kt-u 平	脣 脣	牙 独	kt-u
					脣	牙 80	kh-u

					𪛗	喉 67	ʔ-u
11	𪛗	𪛗 𪛗	流風 47	t-u	𪛗	流風(?)	-u
12	𪛗	𪛗 𪛗	流風 10	t-wu			
13	𪛗	𪛗 𪛗	齒頭 独	ts-wu			

上掲の反切下字を整理すると、つぎの三類に分れる。

反切下字	I	𪛗(𪛗) → 𪛗(𪛗) → 𪛗 ⇌ 𪛗	-u
	II	𪛗 ⇌ 𪛗(𪛗)	-u <sub>2</sub>
	III	𪛗 ⇌ 𪛗	-wu

反切下字 I 類をもつ文字は韻図一段目に配され、開口韻 -u を代表し、II 類をもつ文字は韻図三段目に置かれ -u<sub>2</sub> を、III 類の文字は四段目にあつて、ts<sup>w</sup>u のような合口韻を指示した。韻図二段目の牙音の枠に入れられた文字は、反切によると子音結合をもつ klu であつたと考えられる。No. 620 の韻図で二段目牙音の枠に丸印を置いているのは、この子音結合を合口韻の枠に入れるのに躊躇したためであろう。

小韻10 klu の反切下字に平声韻字を使いながら平の注字をつけるのは、反切の原則からはずれて、奇妙である。あるいは合の書き誤りであろうか。

韻図一段目の重唇音 pu は上声韻字である。小韻4の反切上字は、『同音』では軽唇音類に属し、wu であるが、この韻図では一段目喉音の枠に置かれる。ʔu であつたのだろうか。『同音』旧版小類88、新版小類90は共に四字をもって一類をなしている。

『同音』旧版喉88 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 ʔwu  
 新版 90

『文海』のシステムでは、小韻4 ʔwu 小韻5 wu の対立を示す。

流風音は、この韻図では四形式の対立が指示されている。上述のように No. 620 と No. 623 は配置の方法が違うが、内容は同じである。

No. 620 流風音類	hl̥u	lu(上)
	○	○
	h̥u	lu
	○	○

No. 623 流風音類	h̥u	hl̥u	lu	lu
	○	○	○	○

上声韻形式の中に ku があると考えられるが、何故か韻図には記入されていない。

これらの韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-u	p-	w-	t-n- nd-	—	k-kh- kɬ-	ts-	—	ʔ-ʔw-	l-l̥- hl-
-u <sub>2</sub>	—	—	t-n-	—	ŋ <sup>w</sup> -	ts-	—	—	ɬ-

これらの韻母は、舌上音と正齒音とは全く結び付かなかったことがわかる。

韻図61を筆者の再構成形式をもって書き改めると、つぎのようになる。

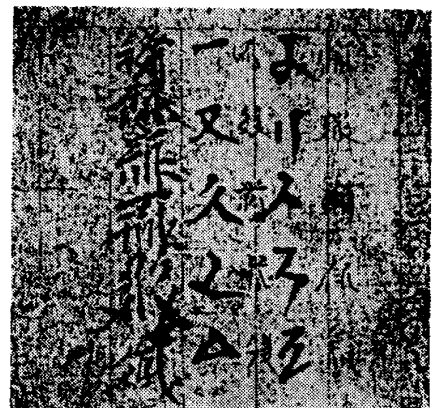
No. 620	ʔu	○	○	tu	pu(上)
	ʔwu	○	kl̥u	○	○
	○	tsu <sub>2</sub>	○	tu <sub>2</sub>	○
	○	ts <sup>w</sup> u	○	○	○
			hl̥u	lu(上)	
			○	○	
			h̥u	lu	
			○	○	
			n̥u (平声58韻代表字)		
			n̥u (上声51韻代表字)		

No. 620 の『五音切韻』はこの韻図61で終了する。このあと不明の文字と西夏字が対照された五言二句があり、乾祐癸巳年<sup>(10)</sup>歳(1173)の日付がついている<sup>(11)</sup>。

以下 No. 622 の韻図を中心に考察を進める。

(10) 『五音切韻』の体裁については、本稿(上) p. 113-を参照されたい。五言二句と日付は右の図版のように並べられている。

(11) この裏(?)に五音切韻と書かれ、また羊皮の裏表紙の内側には 𐰽𐰺𐰸𐰾𐰿 𐰽𐰺𐰸𐰾𐰿 大磐若 の書き込みなどがあるが、不鮮明で判読し難い。



62. 韻図62 平声59韻・上声52韻

韻図62は、平声59韻・上声52韻の特定の音節形式を図示したものである。

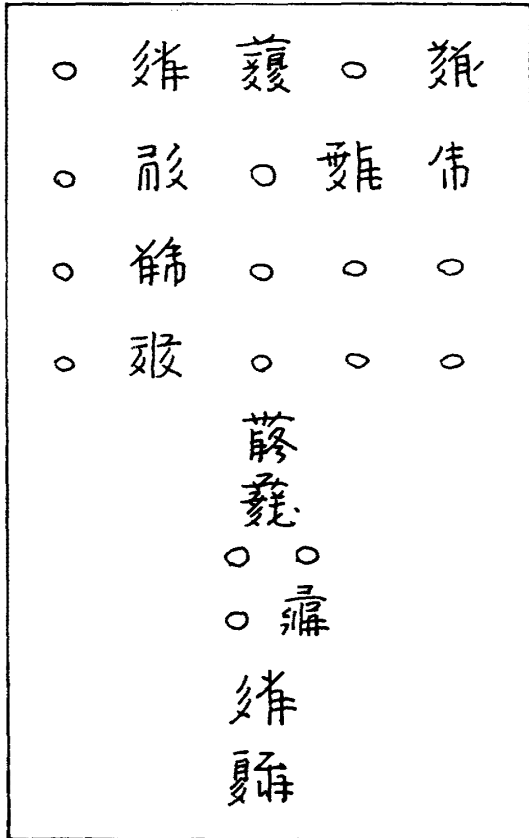
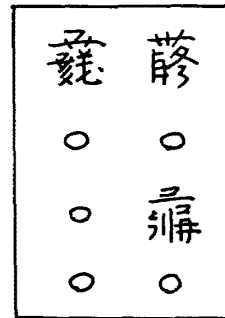


図62 平声59韻・上声52韻 No. 622

No. 622 の韻図によると (8b), 一段目は舌頭・舌上音と喉音を除いた三つの枠, 二段目は牙音と喉音のほかの三つの枠に, それぞれ西夏文字が置かれ, 三段目と四段目は歯頭・正歯音のところのみ文字が記入されている。流風音は五段目に上下一字ずつ, 六段目は下方右側にのみ一字が書き入れられているほか, 丸印が三つある。



No. 623, 624 (流風音類)

No. 623 は, No. 622 と流風音形式の配置が異り, No. 624 は, 一段目の牙音の字が欠けるほか, 流風音形式の配置は, No. 623 と一致する。

筆者は平声59韻・上声52韻の韻母として,  $-i\uparrow$  と  $-w^*i\uparrow$  を推定した。

まず『文海』平声韻各小類の代表字と反切, そしてそれらに相応すると考えられる上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
59. 1	叢	叢 蕤	正歯 独	$t\check{s}-i\uparrow_2$			
2	叢	叢 蕤	正歯 独	$t\check{s}h-i\uparrow_2$			
3	蕤	叢 叢	正歯 独	$\check{s}-i\uparrow_2$			
4	類	緋 叢	輕唇 7	$w-w^*i\uparrow$	叢	輕唇7~6	$w-w^*i\uparrow$

5	𪗇	𪗇	牙 4	k-iu		
6	𪗈	𪗈	牙 64	ng-iu	𪗉	牙63~64 ng-iu
7	𪗉	𪗉	正齒 78	tš-iu	𪗊	正齒 78 tš-iu
8	𪗋	𪗋	正齒 11	tšh-iu		
9	𪗌	𪗌	重唇128	p-wiu	𪗍	重唇127 p-wiu
10	𪗎	𪗎	重唇 独	mb-wiu		
11	𪗏	𪗏	舌頭149	t'-iu	𪗐	舌頭148 t'-iu
					𪗑	舌頭166 th-wiu
12	𪗒	𪗒	舌頭 97	n-wiu		
13	𪗓	𪗓	齒頭 63	ts-wiu		
					𪗔	齒頭117 s-wiu
14	𪗕	𪗕	流風 独	ž-wiu	𪗖	流風 12 l-wiu
15	𪗗	𪗗	流風 79	hl-wiu		
16	𪗘	𪗘	流風 80	l-wiu		

上記の反切下字を整理すると、つぎの三類になる。

反切下字	I 類	𪗇 ⇨ 𪗈	-iu <sub>2</sub>
	II 類	𪗌 → 𪗍 → 𪗎 (平3)	-wiu
	III 類	𪗋 → 𪗉 → 𪗊 (𪗏)	-iu

I 類は開口韻 -iu<sub>2</sub> を代表し、韻図四段目に置かれ、II 類は合口韻 -wiu<sub>2</sub> であって、韻図二段目に配置されている。この II 類の反切下字は互に系聯せず、何故か小韻13 (齒頭63) には反切下字 𪗎 (平3 ndiuf) が使われる。III 類の文字は開口韻 -iu を代表し、韻図の一段目に配される。

II 類の反切下字が合口韻を代表することは、『掌中珠』に見られる漢字表音によって証明できる。

小韻 11 舌頭149 二字一類

𠵹 <唾> 漢字表音 底合 t<sup>w</sup>i<sup>u</sup>

小韻 15 流風 79 四字一類

𠵹 <秩(はり)> 。六合 hl<sup>w</sup>i<sup>u</sup>

この韻図では、歯頭・正歯音の欄は、一段目正歯音 tš<sup>i</sup>u (開口)、二段目歯頭音 ts<sup>w</sup>i<sup>u</sup> (合口)、四段目正歯音 tš<sup>i</sup>u<sub>2</sub> (開口) と並べられる。それらに対立して、三段目の文字𠵹は、『同音』『文海』『文海雑類』に入っていないが、おそらく歯頭音 ts<sup>i</sup>u (開口) の形式をもっていたであろうと考えられる。

この韻図では、流風音にはじまる形式は、三種類 t<sup>w</sup>i<sup>u</sup>, ž<sup>w</sup>i<sup>u</sup>, hl<sup>w</sup>i<sup>u</sup> が記入されている。いずれも合口韻である。t<sup>w</sup>i<sup>u</sup> は、韻図の言語では、流風音小類12の形式(上声) t<sup>w</sup>i<sup>u</sup> と合一していたかも知れない。

また『文海雑類』には、この韻類に属するつぎの文字が登録されている。

𠵹	𠵹	dz <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (上52)	塚
𠵹	𠵹	dz <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (上52)	雨
𠵹	𠵹	dž <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (平59)	誘い
𠵹	𠵹	t <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (平59)	動物の名(二音節単語)
𠵹	𠵹	hl <sup>w</sup> u (平59)	
𠵹	𠵹	t <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (上52)	修歌弹琴
𠵹	𠵹	hl <sup>w</sup> i <sup>u</sup> (上52)	獲得する

反切上字𠵹と𠵹は同じく流風音小類124に属し → 𠵹 → 𠵹 (流風124) と系聯する。(流風音124(旧版)の一字𠵹(平67)が反切上字として𠵹をもつ)

これらの韻母と声母の連続関係を表示すると、舌上音と喉音にはじまる形式が全くなかったことがわかる。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-i <sub>1</sub>	—	—	—	—	k-ng-	—	tš-tšh- ʰdz-	—	—
- <sup>w</sup> i <sub>1</sub>	p-mb-	w-	—	t-n-	—	ts-s- ʰdz-	—	—	hl-t- ž-
-i <sub>2</sub>	—	—	—	—	—	—	tš-tšh- š-	—	—

No. 622

○	tš <sub>1</sub> i <sub>1</sub>	k <sub>1</sub> i <sub>1</sub>	○	f <sub>1</sub> i <sub>1</sub>
○	ts <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>	○	t <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>	p <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>
○	ts <sub>1</sub> i <sub>1</sub> (?)	○	○	○
○	tš <sub>2</sub> i <sub>2</sub>	○	○	○
		t <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>		
		ž <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>		
		○ ○		
		○ hl <sup>w</sup> <sub>1</sub> i <sub>1</sub>		
		tš <sub>1</sub> i <sub>1</sub> (平声59韻代表字)		
		tš <sub>1</sub> i <sub>1</sub> (上声52韻代表字)		

韻図62を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

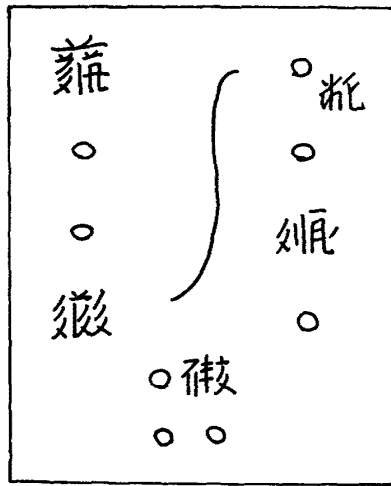
63. 韻図63 平声60韻・上声53韻

韻図63は、西夏語平声60韻・上声53韻の特定の音節形式を图示したものである。No. 622の

韻図では(9a)、一段目と二段目共に牙音と齒頭・正齒音の枠にのみ西夏字があり、三段目は喉音の枠に一字置かれている。流風音類には五段目があてられ、上段右側に一字書かれ、上段左側と下段左右両側に丸印が記入される。No. 623の韻図には、重唇・輕唇音の欄の一段目に書き込みがあり、三段目は丸印の替りに西夏字一字が入っている。また喉音の欄は一段目と四段目に文字があり、二段目と三段目に丸印が置かれる。流風音の欄は五段目のほかに、六段目に一字と丸印一つが上下に並べられている。

○	𐽀	𐽁	○	○
○	𐽂	𐽃	○	○
𐽄	○	○	○	○
○	○	○	○	○
	○	𐽆		
	○	○		
		𐽇		
		𐽈		

図63 平声60韻・上声53韻 No. 622



No. 623 (部分)



No. 624 (部分)

No. 624 の韻図 (36b) は、重唇・輕唇の二段目にも書き込みがあるほか、喉音の一段目が No. 622 のように丸印であり、流風音の追加がない点を除けば No. 623 と同じである。

書き込まれた文字 泚 は  $mbi\epsilon$  (上53) <条> (重唇独) と 泚  $p\epsilon$  (上54) (重唇141) で、いずれも上声53韻あるいはそれに近似する形式を記入したのである。筆者は、平声60韻・上声53韻の韻母として  $-i\epsilon$  を推定した。

まず『文海』の平声各小韻代表字およびその反切、そしてそれらに相應すると考える上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
60. 1	泚	微 泚	重唇 独	$p-i\epsilon_2$			
2	泚	死 滋	重唇 独	$m-i\epsilon_2$			
3	泚	蕪 滋	牙 独	$kh-i\epsilon_2$			
					泚	舌頭160	$n-i\epsilon_2$
					泚	舌頭 86	$nd-i\epsilon_2$
4	滋	泚 泚	喉 独	$?-i\epsilon_2$			
5	泚	泚 泚	流風121	$l-i\epsilon_2$	泚	流風121	$l-i\epsilon_2$
6	泚	泚 泚	重唇 独	$mb-i\epsilon$	泚	重唇 独	$mb-i\epsilon$



7	𪛗	𪛘	𪛙	牙 41	k- <i>iɛ</i>	𪛚	牙 41	k- <i>iɛ</i>
8	𪛛	𪛜	𪛝	正齒 独	tš- <i>iɛ</i>	𪛞	正齒 独	tš- <i>iɛ</i>
9	𪛞	𪛟	𪛠	正齒103	š- <i>iɛ</i>	𪛡	正齒103	š- <i>iɛ</i>
10	𪛢	𪛣	𪛤	流風 60	l- <i>iɛ</i>			
11	𪛥	𪛦	𪛧	牙 独	k- <i>wiɛ</i>			
12	𪛨	𪛩	𪛪	正齒 独	tš- <i>wiɛ</i>	𪛫	喉 独	ʔ- <i>iɛ</i>

上記の反切下字を整理すると、つぎの三類になる。

反切下字	I	𪛗 → 𪛘 → 𪛙 ⇔ 𪛚	- <i>iɛ</i> <sub>2</sub>
	II	𪛞 ⇔ 𪛠	- <i>iɛ</i>
	III	𪛥 ⇔ 𪛧	- <i>wiɛ</i>

この三類が代表する韻母の形式を韻図上に配分されている位置から推定すると、II類は開口韻 -*iɛ* を(一段目)、III類はその合口韻 -*wiɛ* を(二段目)、そしてI類はそれらに対立する -*iɛ*<sub>2</sub> (三段目) を代表していたことになる。この韻類では小韻の配列が順序だっていて、小韻1から5まではI類、小韻6から10までがII類、小韻11と12がIII類である。

No. 623 の韻図では p*iɛ*<sub>2</sub> と ʔ*iɛ* (上声) が記入され、No. 624 の韻図には上述の書き込みのほかに、p*iɛ*<sub>2</sub> と流風音 l*iɛ*<sub>2</sub> が記入されている。No. 622と No. 623 では流風音の h*iɛ* (小韻10) のみが記入されたが、No. 624 ではそれに、l*iɛ*<sub>2</sub> (小韻5) の形式がつけ加えられている。

『文海雑類』には平声60韻をもつつぎの一字がある。

𪛬 𪛭 𪛮 <sup>ʔ</sup>dʒ*iɛ* (平60) 流風18 切断(?)

この韻類の韻母と声母の連続関係を、つぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iɛ	mb-	—	—	—	k-	—	tʃ-ʃ-	ʔ-	l-
-ʷiɛ	—	—	—	—	k-	—	tʃ-	—	—
-iɛ₂	p-m-	—	—	n-nd-	kh-	—	—	ʔ-	l-

No. 622

○	tʃiɛ	kiɛ	○	○
○	tʃʷiɛ	kʷiɛ	○	○
ʔiɛ₂	○	○	○	○
○	○	○	○	○
	○	hiɛ		
	○	○		
		kiɛ (平声60韻代表字)		
		kiɛ (上声53韻代表字)		

この韻類には全体として、輕唇音と舌上音と齒頭音にはじまる形式はなかった。

韻図63を筆者の再構成形式で書き改めると、左のようになる。

64. 韻図64 平声61韻・上声54韻

韻図64は、西夏語平声61韻・上声54韻をもつ特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (9b) では、一段目は重唇・輕唇音の枠、二段目は重唇・輕唇音、舌頭・舌上音と牙音の枠に、それぞれ西夏字が置かれる。三段目は重唇・輕唇音の枠にのみ一字記入されるが、

○	𐰃	○	○	𐰃
○	○	𐰃	𐰃	𐰃
○	○	○	○	𐰃
				𐰃𐰃
	𐰃	𐰃		
	𐰃	𐰃		
	𐰃			
	𐰃			

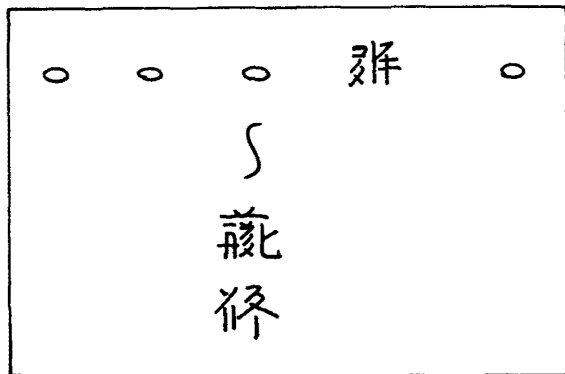
その下に二字の注字がある。これはその文字の構成を示したもので、注字右の偏と左の傍を組み合わせると、三段目の文字が出来上る。

𐰃𐰃 (𐰃𐰃 が正しい) →

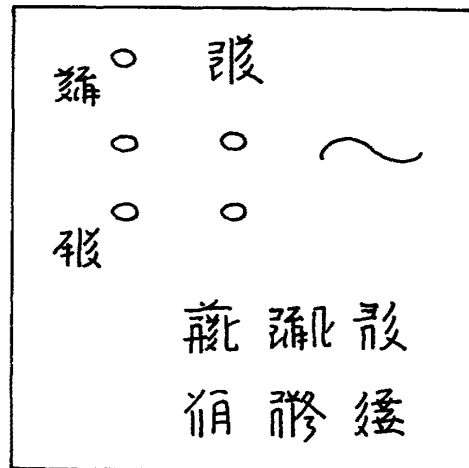
𐰃 tih(平11) + žɛ = tɛ(平61) したがってこの文字は舌頭・舌上音三段目に置かれるのが正しい。

No. 624 (34a) では、No. 622で重唇・輕唇音三段目に置かれた文字が、舌頭・舌上音の枠に移動し

図64 平声61韻・上声54韻 No. 622



No. 624 (三段目と流風音)



No. 623 (一・二・三段目と流風音)

ているほか、流風音の四字の下にあたる六段目に、上下二字の追加がある。

No. 623 (68b) は、No. 624 に比べると、喉音の欄に二字書き込みがあり、流風音の形式が、上下二段に三字ずつ並べられるという相違を見せている。注字 **孺** < 拡げる > (喉96) は平声61韻  $\text{?}\epsilon(\text{?})$ 、**叢** は上声10韻  $\text{?}wif$  (喉63) である。

筆者は、平声61韻・上声54韻の韻母として  $-\epsilon$  を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字および反切、そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
61. 1	孺	叢 孺	軽唇 12	w- $\epsilon$	叢	軽唇 12	w- $\epsilon$
2	孺	孺 孺	軽唇 37	m $\eta$ v- $\epsilon$			
3	叢	孺 叢	正歯 15	tš- $\epsilon$	叢	正歯 15	tš- $\epsilon$
4	蕪	孺 叢	正歯 95	tšh- $\epsilon$			
5	叢	孺 叢	流風 91	l- $\epsilon$	叢	流風 57	l- $\epsilon$
6	脣	孺 叢	流風 独	ž- $\epsilon$	叢	流風 独	ž- $\epsilon$
7	孺	叢 叢	重唇141	p- $\epsilon$	叢	重唇141	p- $\epsilon$
8	孺	孺 叢	重唇 独	ph- $\epsilon$			
9	脣	孺 叢	重唇 9	mb- $\epsilon$	叢	重唇 10	mb- $\epsilon$

10	愷	𪛗	𪛘	重唇 61	m-ɛ	愷	重唇 61	m-ɛ
11	𪛙	𪛚	𪛛	舌頭 25	t-ɛ			
12	𪛜	𪛝	𪛞	舌頭 24	t-ɛ	𪛟	舌頭 23	t-ɛ
13	𪛡	𪛢	𪛣	舌頭 42	n-ɛ			
14	𪛥	𪛦	𪛧	牙113	k-ɛ			
15	𪛩	𪛪	𪛫	牙 16	ŋg-ɛ	𪛬	牙 16	ŋg-ɛ
16	𪛭	𪛮	𪛯	牙141	ŋg-ɛ			
						𪛰	齒頭 93	tsh-ɛ
						𪛱	齒頭 43	s-ɛ
						𪛲	齒頭 独	s-ɛ
17	𪛶	𪛷	𪛸	流風 98	l-ɛ			
18	𪛺	𪛻	𪛼	流風 88	ʒ-ɛ	𪛽	流風 32	ʒ-ɛ
19	𪛿	𪛾	𪛿	舌頭 独	nd- <sup>w</sup> ɛ			
20	𪛻	𪛼	𪛽	流風 81	hl- <sup>w</sup> ɛ 平	𪛾	流風 81	hl- <sup>w</sup> ɛ
21	𪛾	𪛿	𪛾	流風 82	hl- <sup>w</sup> ɛ			
						𪛿	流風167(?)	l- <sup>w</sup> ɛ
						𪛾	流風167	l- <sup>w</sup> ɛ

上記の反切下字を整理すると、つぎの三類になる。

- 反切下字 I 𪛘 → 𪛙 → 𪛚(𪛛) → 𪛜 ⇔ 𪛛(𪛜)
- 𪛘 ↗
𪛙 ↗
-ɛ
- II 𪛛(平) = 𪛜(上) → 𪛛(平36-ef) -ɛ
- III 𪛜 ⇔ 𪛛 ← 𪛜(上) -<sup>w</sup>ɛ

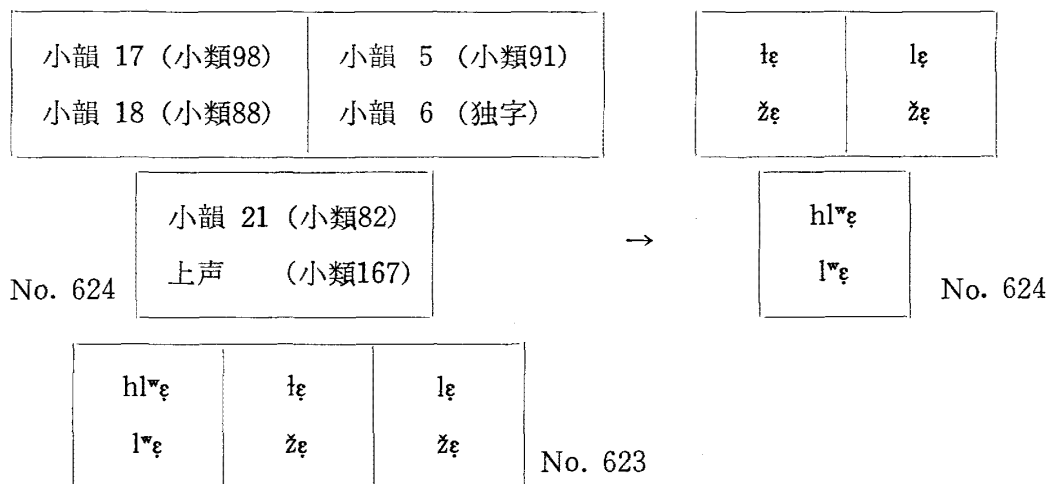
反切下字 I 類をもつ文字も、II 類をもつ文字も、韻図一段目に配当され、I 類をもつ文字は、一段目のほかに二段目にも置かれている。したがって、一段

目と二段目は、韻図の性質上、

一段目 軽唇 正歯  
二段目 重唇 舌頭 牙

のように分配されたのであって、韻母の開合韻の対立を示したものではなかった。Ⅱ類の反切下字が使われるのは正歯音（無声無気音）に限られ、しかも平声36韻の文字を下字としている。これは -ɣ が狭い母音となっていたからであろう。tʃɛ [tʃɛ] 韻図三段目は、組合せ文字によって t-ĩɣ を表示した。反切下字Ⅲ類は合口韻を代表し、流風音類のみ該当する形式をもっている。

この韻類の流風音類の形式の表示は、三つの形態で残されている。反切と照合するとその中、No. 623 と No. 624 の韻図が正しいことがわかる。No. 623 は、反切下字Ⅲ類をもつ形式を横に一行に並べた形態であるのに対して、No. 624 は、Ⅲ類が代表する合口韻形式を下段に配置した形である。いま各々の位置に『文海』小韻番号と『同音』小類番号および具体形式を代入すると、つぎのようになる。小韻6の反切上字と小韻18の上字は、系聯する。



『文海雑類』には、平声61韻・上声54韻の文字を反切下字とするつぎの文字が含まれる。

𪛗	𪛗	<sup>a</sup> dze (上54)	渡る
𪛗	𪛗	<sup>a</sup> dze (上54)	不浄, 集って厚くなる
𪛗	𪛗	<sup>a</sup> dze (平61)	行う

𪚩	𪚩	𪚩	hl <sup>w</sup> ɛ (平61)	かたむける
𪚩	𪚩	𪚩	hl <sup>w</sup> ɛ (平61)	顔
𪚩	𪚩	𪚩	hl <sup>w</sup> ɛ <sub>(上)</sub> (上54)	変化する, 不純になる
𪚩	𪚩	𪚩	hlɛ (上54)	鉢

これらの韻母 -ɛ -<sup>w</sup>ɛ と声母の連続関係をつぎに表示する。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɛ	p-ph- mb-m-	w-mjv-	—	t- n-	k-ŋg-	tsh- s-	tš-tšh-	—	l-hl- t-ž-
- <sup>w</sup> ɛ	—	—	—	nd-	—	—	—	—	l-hl-

No. 622

○	tšɛ	○	○	wɛ
○	○	kɛ	tɛ	pɛ
○	○	○	○	tʰɛ
		tɛ	lɛ	
		žɛ	žɛ	
		tšɛ (平声61韻代表字)		
		tšɛ (上声54韻代表字)		

合口韻は舌頭音と流風音に限られ、開口韻は、舌上音と喉音には結び付かなかった。

韻図64を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

### 65. 韻図65 平声62韻・上声55韻

韻図65は、西夏語平声62韻・上声55韻をもつ特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (10a) では、一段目は重唇・軽唇音と舌頭・舌上音の枠、二段目は牙音の枠、三段目は舌頭・舌上音と齒頭・正齒音の枠、四段目は齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字がある。流風音には、五段目上方右側一字と六段目上方左右に二字が置かれる。No. 624 の韻図 (38b) は、重唇・軽唇音の欄に二字書き込みがあり、流風音の欄の六段目下方にも丸印がある以外は、文字の配置は No. 622 と相違がない。No. 623 (70a) の韻図では、重唇・軽唇音の欄と喉音の欄に書き込みが多く、流風音の欄の配置が No. 622 や No. 624 とは

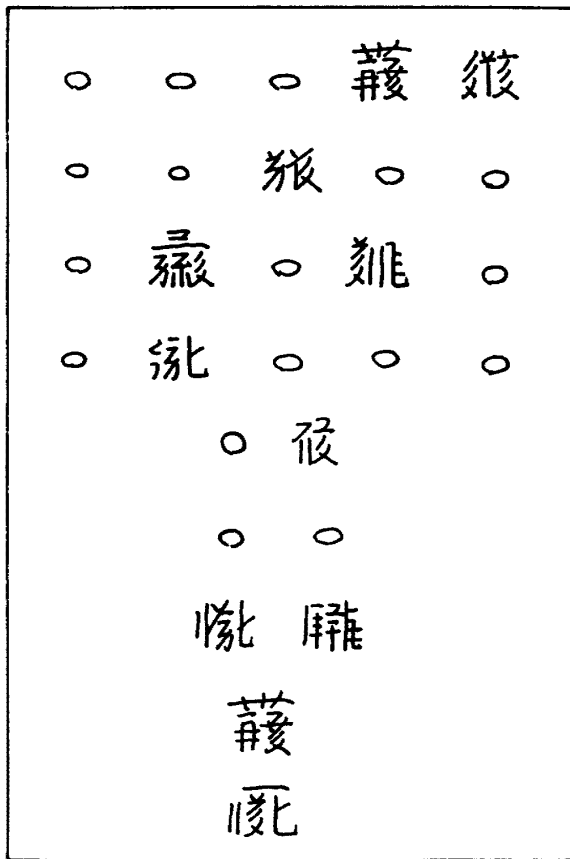
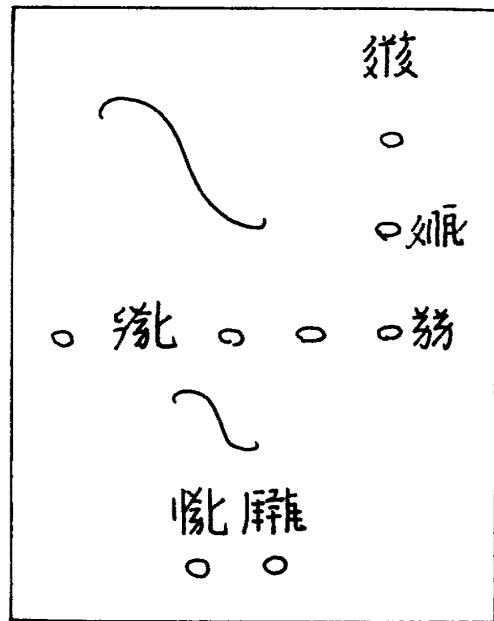


図65 平声62韻・上声55韻 No. 622



No. 624 (部分)

異って横に二列に並べられている。  
注字の形式：

絃<sup>?</sup> 𪛗<sup>pĩɛ₂</sup> (平60)

𪛗<sup>wɛ</sup> (平33) 𪛗<sup>?ɛ</sup> (平61)

𪛗<sup>?i</sup> (上60) 𪛗<sup>fɛN</sup> (上55)

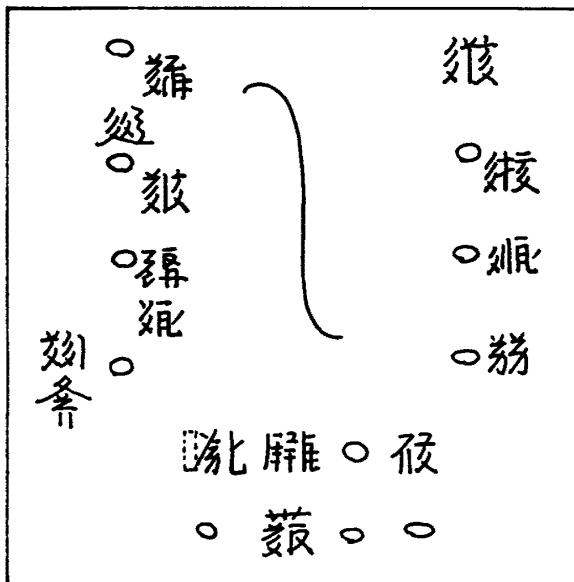
𪛗<sup>?iɛ</sup> (平66) ?

𪛗<sup>ndzʷi</sup> (上28) ?

これらの注字はいずれも音注であるが、一体何を意図しているのか明瞭ではない。

筆者は平声62韻上声55韻の韻母として、-ɛN を推定した。

つぎに『文海』平声韻各小韻の代表字と反切、そしてそれらに相



No. 623 (部分)

応すると考え得る上声韻形式をあげよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小韻	再構成形式
62. 1	𪗇	𪗇𪗇	舌頭108	t-ɛN <sub>2</sub>	𪗇 𪗇	舌頭108 舌頭160	t-ɛN <sub>2</sub> n-ɛN <sub>2</sub>
2	𪗈	𪗈𪗇	齒頭 独	ts-ɛN <sub>2</sub>			
3	𪗉	𪗉𪗇	流風 独	l-ɛN <sub>2</sub>	𪗉	流風 独	l-ɛN <sub>2</sub>
4	𪗊	𪗊𪗇	流風 独	hl-ɛN <sub>2</sub>			
5	𪗋	𪗋𪗇	齒頭 独	s-ɛN <sub>2</sub>			
6	𪗌	𪗌𪗇	重唇 47	p-ɛN	𪗌	重唇 47	p-ɛN
7	𪗍	𪗍𪗇	舌頭 26	t-ɛN	𪗍 𪗍	舌頭 61 舌頭 独	t-ɛN n-ɛN
8	𪗎	𪗎𪗇	齒頭135	ts-ɛN			
9	𪗏	𪗏𪗇	𪗏牙 69	k-wɛN	𪗏 𪗏 𪗏	牙 69 流風 94 輕唇 独	k-wɛN l-ɛN w-ɛN

上記の反切下字を整理すると、つぎの四類と一字になる。

反切下字	I	𪗇 ⇌ 𪗇	-ɛN <sub>2</sub>
	II	𪗇 ⇌ 𪗇	-ɛN <sub>2</sub>
	III	𪗇(𪗇) ⇌ 𪗇(𪗇)	-ɛN
	IV	𪗇 (上声)	wɛN

韻図一段目の文字は反切下字 III 類をとり、三段目の文字は I 類と II 類をとる。前者は -ɛN、後者は -ɛN<sub>2</sub> を表示したと考えられる。二段目の文字は小韻 9 に該当し、上声字 wɛN を反切下字とし、合口韻 kwɛN (k<sup>w</sup>i-wɛN) の形をもっていた。四段目の文字は所属が不明であるが、おそらく ts<sup>w</sup>ɛN<sub>2</sub> であつたろうと推定できる。



流風音の欄は、韻図64と同じ関係を示しており、つぎのように複元できる。

No. 622 No. 624	○	lɛN(上)	No. 623	hlɛN <sub>2</sub>	lɛN <sub>2</sub>	○	lɛN(上)
	○	○		○	ɬɛN <sub>2</sub> (上)	○	○
	hlɛN <sub>2</sub>	ɬɛN <sub>2</sub>					

これらの開口韻の韻母は、重唇音，軽唇音，舌頭音，齒頭音と流風音とのみ連続し，合口韻は k-（と ts-）にはじまる音節に限られていた。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌上	舌頭	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɛN	p-	w-	—	t-n-	—	ts-	—	—	l-
-ɛN <sub>2</sub>	—	—	—	t-n-	—	ts-s-	—	—	ɬ-hl-
-wɛN	—	—	—	—	k-	(ts-)	—	—	—

No. 622	○	○	○	tɛN	wɛN
	○	○	kwɛN	○	○
	○	tsɛN <sub>2</sub>	○	tɛN <sub>2</sub>	○
	○	ts <sup>w</sup> ɛN <sub>2</sub>	○	○	○
			○ lɛN(上)		
			○ ○		
		hlɛN <sub>2</sub> ɬɛN <sub>2</sub>			
		tɛN (平声62韻代表字)			
		tɛN (上声55韻代表字)			

韻図65を筆者の再構成形式に書き改めると，左のようになる。  
wɛN は無声音化して [ʌɛN] に変わっていたのであろう。

### 66. 韻図66 平声63韻・上声56韻

韻図66は，西夏語平声63韻・上声56韻の特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (10a) では，一段目は齒頭・正齒音の枠を除きすべての枠に，二段目は重唇・軽唇音と牙音の枠にのみ西夏字が置かれている。流風音の欄はいままでの韻図とはやや違って，三字を右上から左下に向けて斜めに並べている。No. 623 (70b) では，喉音の欄二段目に一字書き込みがある。書き込まれた文字は，<sup>ʔ</sup>ie (平66) <煮る>と読める。

No. 624 の韻図 (39a) は，流風音の欄の配置が，No. 622・623 と異り，三字を左右に並べ，その下に丸印を二つ置いている。

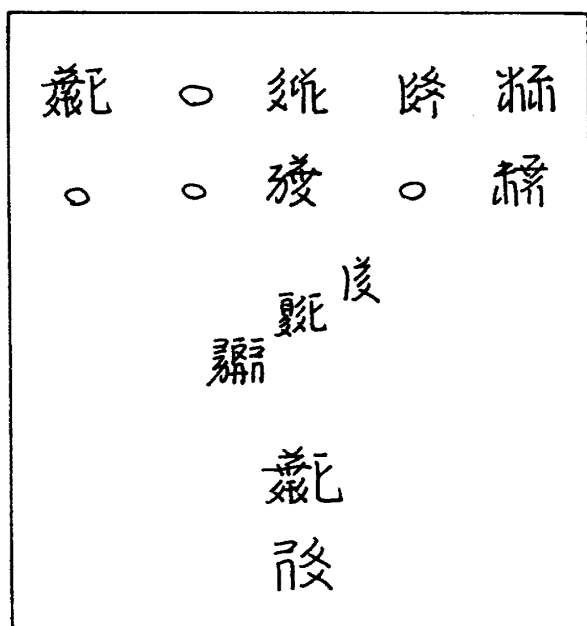
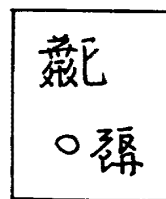
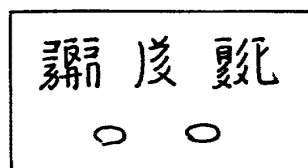


図66 平声63韻・上声56韻 No. 622



No. 623 (喉音の注字)



No. 624 (流風音)

筆者は平声63韻・上声56韻の韻母に -ɑ と -ʷɑ を推定した。

つぎに『文海』平声韻各小韻の代表字と反切，そしてそれらに相応すると考えられる上声韻形式をあげた。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
63. 1	絳	羆 羆	重唇 88	p-ɑ	羆	重唇88-89	p-ɑ
2	麻	縻 縻	重唇 独	m-ɑ	縻	重唇 独	mb-ɑ
3	後	該 絳	重唇 独	m-ɑ			
4	絳	紆 後	舌頭 92	t-ɑ	絳	舌頭 独	t-ɑ
5	葶	藪 縻	舌頭 70	n-ɑ	縻	舌頭 70	n-ɑ
6	蕪	藪 後	舌頭 71	n-ɑ			
7	縻	縻 羆	舌頭 独	nd-ɑ	羆	舌頭 独	nd-ɑ
8	纒	縻 縻	牙17~18	k-ɑ	縻	牙 18	k-ɑ
					縻	牙168	ŋ-ɑ
9	蕪	羆 後	齒頭126	tsh-ɑ			
10	羆	縻 縻	喉 23	ʔ-ɑ	縻	喉 24	ʔ-ɑ

11	駝	駝	流風176	l-ɑ		
12	後	駝	流風146	t-ɑ		
					駝	流風 59    ʁz-ɑ
13	駝	駝	輕唇 38	w-ʷɑ	駝	輕唇 13    w-ʷɑ
14	駝	駝	牙 独	kh-ʷɑ		
15	駝	駝	流風 独	hl-ʷɑ		

上記の反切下字を整理すると、つぎの二類にまとまる。

反切下字 I    駝 → 後 → 駝 ← 駝(駝) ← 駝    -ɑ

II    駝 → 駝 → 駝 (駝)    -ʷɑ

I類は平声80韻の文字 駝 tsar と系わる。この反切下字をもつ文字は韻図一段目に置かれるから、I類は開口韻 -ɑ を代表した。二段目は合口韻であり、輕唇音 wɑ [ʷɑ] と牙音 kʷɑ (上声) < 駝 > が記入されている。流風音の欄は、No. 624 と 623 の形態が正しく、hlʷɑ lɑ lɑ の三形式が登録されている。『文海雜類』にはそのほか、この韻類に属する 駝 駝 駝 lɑ (平63) < 妄 (へつらい) > が含まれる。

この二つの韻母と声母の連続関係を表示すると、つぎのようになる。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɑ	p-mb- m-	—	t-n- nd-	—	k-ŋ-	tsh-	—	ʔ-	l-t- ʁz-
-ʷɑ	—	w-	—	—	k-kh-	—	—	—	hl-

No. 622

ʔɑ	○	kɑ	tɑ	pɑ
○	○	kʷɑ	○	wɑ
		lɑ		
		lɑ		
		hlʷɑ		
		ʔɑ (平声63韻代表字)		
		ʔɑ (上声56韻代表字)		

この韻類には舌上音と正齒音にはじまる音節は全くなかった。韻図66を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

67. 韻図67 平声64韻・上声57韻

韻図67は、西夏語平声64韻・上声57韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (11a) では、一段目は重唇・軽唇音の枠と歯頭・正歯音の枠に、二段目は重唇・軽唇音の枠、舌頭・舌上音と牙音の枠にそれぞれ文字がある。

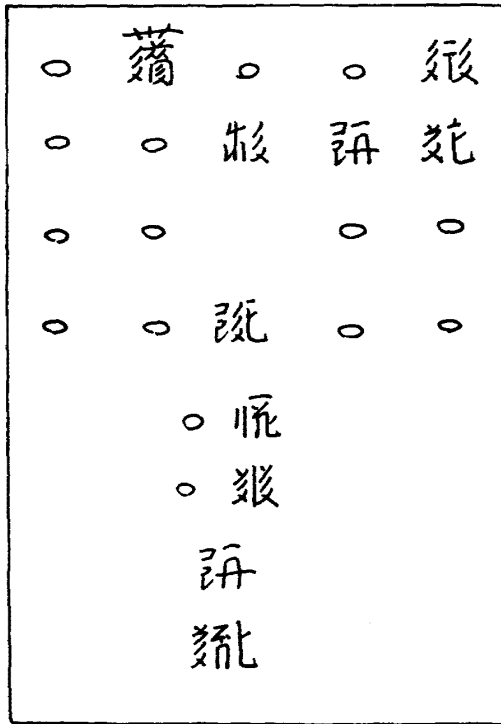
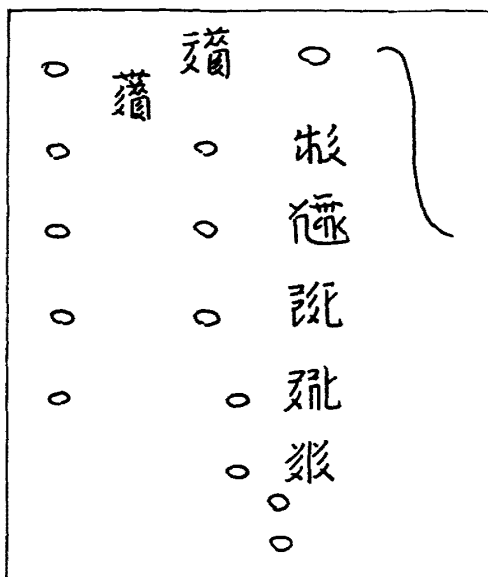


図67 平声64韻・上声57韻 No. 622

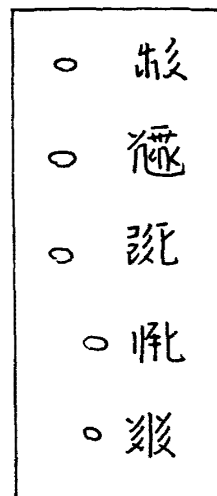
ある。三段目は牙音の枠が空白であり、ほかの枠は丸印がつき、四段目は牙音の枠のみ西夏字が書かれる。流風音の欄は五段目右側上下に文字があり、左側上下には丸印が置かれている。右上の文字は、**𐰃** (上57) であろうか。

No. 623 の韻図では、一段目歯頭・正歯音の枠の文字が別の文字に替り、左下に No. 622 の文字が小さく記入されている。この文字は両方共に『文海』『同音』『文海雑類』に含まれていない。三段目牙音の枠に、**𐰃** k<sup>w</sup>a (上57) <醜い>が入り、流風音の欄の右上の文字が別の文字に替っている (la 平64)。そして六段目の枠の中央上下に丸印を一つずつ加え



No. 623 (部分)

No. 624 (部分)



牙音と流風音

ている。No. 624 の韻図は No. 623 と同じく三段目牙音の枠に醜が入り、五  
 段目右上の文字が𪛗 rar <司> (平82) に替っている。

筆者は、平声64韻・上声57韻の韻母として、-a と -<sup>w</sup>a を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字および反切，そしてそれらに相応すると考え  
 得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
64. 1	𪛗	𪛗𪛗	重唇114	mb-a <sub>2</sub>	𪛗	重唇114	mb-a <sub>2</sub>
2	𪛗	𪛗𪛗	牙156	k-a <sub>2</sub>	𪛗	牙 独	k-a <sub>2</sub>
3	𪛗	𪛗𪛗	輕唇 19	f-a	𪛗	輕唇 25	w-a
4	𪛗	𪛗𪛗	正齒(新)71	š-a			
5	𪛗	𪛗𪛗	重唇 65	p-a			
6	𪛗	𪛗𪛗	重唇118	m-a			
7	𪛗	𪛗𪛗	重唇 独	mb-a			
8	𪛗	𪛗𪛗	舌頭94~95	t-a	𪛗	舌頭 94	t-a
9	𪛗	𪛗𪛗	舌頭137	n-a	𪛗	舌頭 90	n-a
10	𪛗	𪛗𪛗	舌頭137	n-a			
11	𪛗	𪛗𪛗	牙 独	k-a	𪛗	牙 60	k-a
12	𪛗	𪛗𪛗	牙181	ŋ-a			
13	𪛗	𪛗𪛗	齒頭129	tsh-a	𪛗	齒頭129	tsh-a
14	𪛗	𪛗𪛗	流風 92	ʎ-a	𪛗	流風?	ʎ-a
15	𪛗	𪛗𪛗	流風 独	ʒ-a	𪛗	流風?	ʒ-a
					𪛗	牙 独	k- <sup>w</sup> a

上記の反切下字を整理すると，つぎの三類になる。

反切下字 I 𪛗 ⇌ 𪛘 -a<sub>2</sub>

II 𪛙 → 𪛚(𪛛) → 𪛜 ← 𪛝(𪛞) -a  
(平82-ar)

III 𪛟 → 𪛠(𪛡) ⇌ 𪛢 -a

韻図一段目の fa \*tša と四段目の ka には反切下字 I 類が使われ、二段目 pa ta ka には、下字 II 類と III 類があてられる。二段目の ka と四段目の ka が、どのように相違したのか詳かではないが、前者は開口韻 -a、後者は -a<sub>2</sub> を代表したと考えたい。II 類が平声82韻 tsar と系わるのは、ちょうど平声63韻 (上声56韻) -a が平声80韻 tsar を反切下字としているのと同じ関係である。それに対して合口韻は、韻図では三段目に配置された上声韻最後の形式 k<sup>w</sup>a だけであった。

各テキストの流風音類の欄を、つぎのように対照できる。No. 624 には、ここでも平声82韻の字が使われている。

No. 622	○ ta ○ ža	No. 623	○ ta ○ ža ○ ○	No. 624	○ rar (平82) ○ ža
---------	--------------	---------	------------------------	---------	---------------------

『文海雜類』にはこのほか、流風音の平声64韻に属するつぎの形式が記録されている。

𪛛 𪛜 𪛝      hla (平64)      漢字表音 □ 𪛛      <電(稻光)>

𪛞 𪛟 𪛠 𪛡      hl<sup>w</sup>a合(平64)      𪛛舌合      <灰>

この韻母 -a -<sup>w</sup>a<sub>2</sub> と声母の連続関係を表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-a	p-m- mb-	f-w-	t-n-	—	k-ŋ-	tsh-	š-	—	t-ž-hl-
- <sup>w</sup> a	—	—	—	—	k-	—	—	—	hl-
-a <sub>2</sub>	mb-	—	—	—	k-	—	—	—	—

No. 622

○	*tšə	○	○	fə
○	○	kə	tə	pə
○	○	(kʷə)	○	○
○	○	kə₂	○	○
		○	lə	
		○	ʒə	
			tə (平声64韻代表字)	
			tə (上声57韻代表字)	

韻図67を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

\*tšə の推定は、韻図上の位置以外、確かな根拠がない。lə は韻図の言語では lə であったかも知れない。

68. 韻図68 平声65韻・上声58韻

韻図68は、西夏語平声65韻・上声58韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (11b) では、一段目は舌頭・舌上音の枠、二段目は重唇・軽唇音と舌頭・舌上音の枠にのみ西夏字がある。流風音は、上下に二字並んでいる。No. 623 の韻図 (72b) では、二段目の重唇・軽唇音の文字が相違し、喉音の欄に三字の書き込みがある。

𐰇 ʔew (上44) <学ぶ> 𐰇 kīɛ (平60) <雷が鳴る> 𐰇 tsifi (上10) <濕る>

No. 624 の韻図 (41a) では、流風音の欄の配置が違って、No. 622 と同じ二文字が左右に配置され、その下に丸印が二つ置かれている。なお 𐰇 と 𐰇 は同じ音節であった。

筆者は、平声65韻・上声56韻の韻母として -! と -ʷ! を推定した。

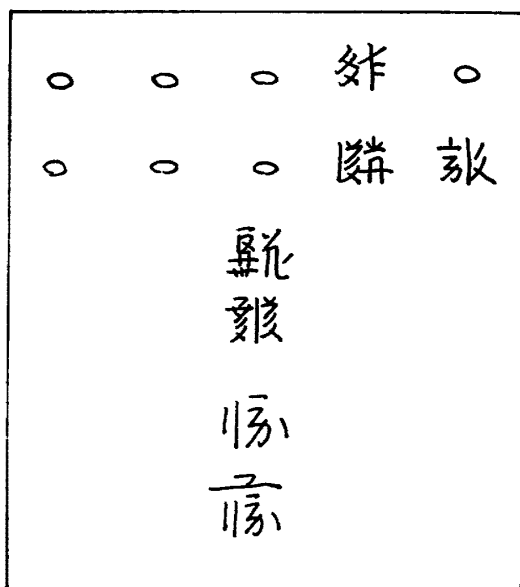
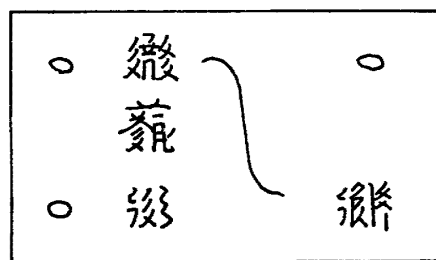
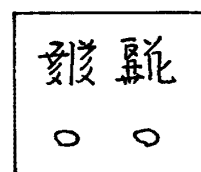


図68 平声65韻・上声56韻 No. 622



No. 623 (重唇・軽唇音と喉音)



No. 624 (流風音)

『文海』平声各小韻代表字と反切およびそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
65. 1	𪛗	𪛗 𪛗	重唇 86	m-ɪ	𪛗	重唇 86	m-ɪ
2	𪛘	𪛘 𪛘	重唇 86	m-ɪ	𪛘	重唇 40	mb-ɪ
3	𪛙	𪛙 𪛘	舌頭 独	t-ɪ			
4	𪛚	𪛚 𪛙	舌頭106	th-ɪ	𪛚	舌頭106	th-ɪ
5	𪛛	𪛛 𪛘	舌頭 独	n-ɪ			
6	𪛜	𪛜 𪛙	舌頭 独	nd-ɪ			
7	𪛝	𪛝 𪛚	流風118	ɬ-ɪ	𪛝	流風118	ɬ-ɪ
8	𪛞	𪛞 𪛛	輕唇 14	f-ɰ			
9	𪛟	𪛟 𪛛 𪛟	舌頭 独	t-ɰ 平			
					𪛟	舌頭 87	th-ɰ
					𪛟	流風 独	ɬ-ɰ

上記の反切下字を整理すると、つぎの二類になる。

反切下字	I	𪛗(𪛗) → 𪛙 → 𪛘 ⇔ 𪛚	-ɪ
	II	𪛛 ⇔ 𪛜(上声)	-ɰ

反切下字 I 類は開口韻 -ɪ を代表し、それをもつ文字は韻図の一段目に、II 類は合口韻 -ɰ で、その文字は二段目に配置されている。後者の反切下字は、上声の合口韻 ɰ と連合する。流風音は二形式のみで、No. 622, 623 と No. 624 は、具体的にはつぎのような分配を示している。

No. 622 623	<table border="1"> <tr><td>ɰ</td></tr> <tr><td>ɰ</td></tr> </table>	ɰ	ɰ	No. 624	<table border="1"> <tr><td>ɰ</td><td>ɰ</td></tr> <tr><td>○</td><td>○</td></tr> </table>	ɰ	ɰ	○	○
ɰ									
ɰ									
ɰ	ɰ								
○	○								

ɰ は韻図の言語では、すでに ɰ となっていたのかも知れない。これらの韻母は極く限られた声母とのみ連続する。



声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɿ	m-mb-	—	t-th- n-nd-	—	—	—	—	—	ɿ-
-ɿ̃	—	f-	t-th-	—	—	—	—	—	ɿ-

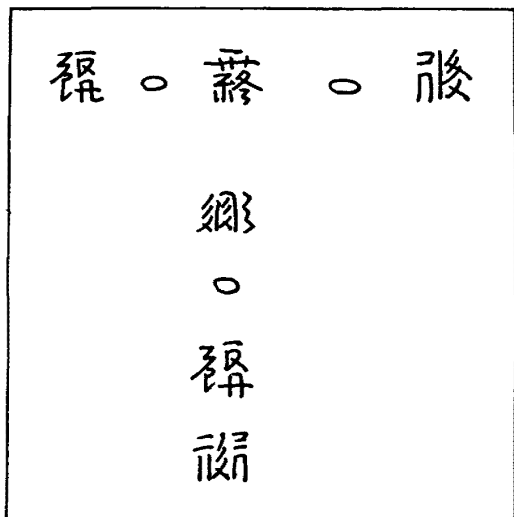
No. 622	○	○	○	tɿ	○
	○	○	○	tɿ̃	fɿ̃
			ɿ		
			ɿ̃		
			mɿ (平声65韻代表字)		
			mɿ̃ (上声58韻代表字)		

韻図68を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

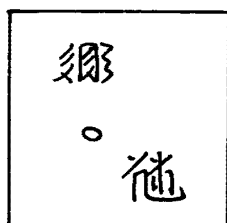
69. 韻図69 平声66韻・上声59韻

韻図69は、西夏語平声66韻・上声59韻の特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (12a) では、一段目は重唇・輕唇音と牙音と喉音の枠に西夏



韻図69 平声66韻・上声59韻 No. 622



No. 624 (流風音)

字が置かれ、流風音の枠は上方に一字、下方に丸印が一つ書かれている。No. 623 の韻図 (73a) は、No. 622 と一致するが、No. 624 (42b) には、流風音の丸印の右に書き込みが一字ある。書き込まれた文字 **穉** は上声 8 韻に属し、非緊喉母音の形 **ziě** をもつから、ここに記入されても見当違いではなく、筆者の再構成の正確さが相互に関連して証明されたことになる。

筆者は平声66韻・上声56韻の韻母とし

て、緊喉母音 **-iě** を推定した。

『文海』平声韻各小韻代表字と反切、およびそれらに相応すると考えられる上声韻形式をあげる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
66. 1	𪛗	𪛗𪛗	重唇 独	p-ɿě			
2	𪛘	𪛘𪛘	重唇 75	p-ɿě			
3	𪛙	𪛙𪛙	重唇 独	mb-ɿě			
4	𪛚	𪛚𪛚	牙 独	k-ɿě	𪛛	牙 独	k-ɿě
5	𪛜	𪛜𪛜	喉 99	ʔ-ɿě	𪛝	喉 53	ʔkɿě
6	𪛞	𪛞𪛞	流風105	ʁz-ɿě			

この反切下字は、一類に系聯する。

反切下字 I 𪛗 ⇌ 𪛜 ← 𪛞 -ɿě

韻図の一段目には pɿě, kɿě, ʔɿě が並べられたことは明らかであり、流風音の音節は ʁzɿě のみであった。『文海』の組織とよく合致している。小韻2の形式は古い段階では \*przɿě であったかも知れない。この韻母は限られた声母としか連続しなかった。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɿě	p-mb-	—	—	—	k-	—	—	ʔ-ʁk-	ʁz-

No. 622	ʔɿě	○	kɿě	○	pɿě
			ʁzɿě		
			○		
			ʔɿě (平声66韻代表字)		
			ʔɿě (上声59韻代表字)		

韻図69を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

#### 70. 韻図70 平声67韻・上声60韻

韻図70は、西夏語平声67韻・上声60韻の中の特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (12b) では、上四段が使われ、一段目は重唇・軽唇音、齒頭

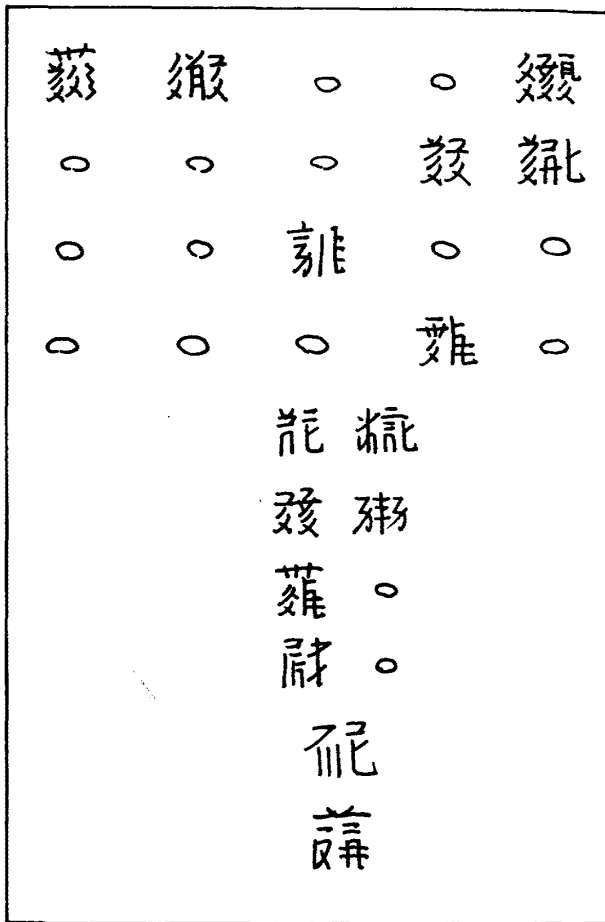
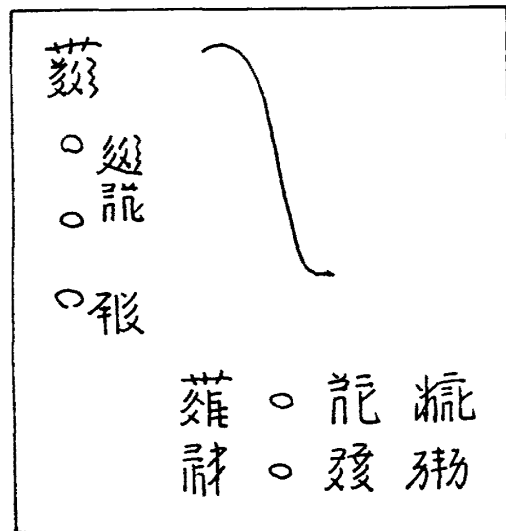


図70 平声67韻・上声60韻 No. 622



No. 623 (喉音と流風音の部分)

・正歯音と喉音の枠に、二段目は重唇・軽唇音と舌頭音の枠に、三段目は牙音、四段目は舌頭・舌上音の枠に、それぞれ西夏字が記入される。流風音には、五段目上方に二字と下方に二字、計四字があり、六段目は左側に上下二字、右側に丸印が上下に二つ並べられる。

No. 624 の韻図 (43a) は、枠組みは No. 622 と変らないが、四段目の文字が **𪗇** になっている。No. 623 (73b) では喉音の欄に書き込みがあり、流風音の配置が相違する。書き込まれた文字を上からあげると、

𪗇 ?i (上60) 𪗈 li (上60), 𪗉 ?wiŋ (上10) となる。

筆者は、平声67韻・上声60韻の韻母として、-i と -wi を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切、そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
67. 1	𪗇	𪗈 𪗉	軽唇 4	w-i	𪗊	軽唇 4	w-i
2	𪗋	𪗌 𪗍	牙142	ŋg-i	𪗎	牙142	ŋg-i
3	𪗏	𪗐 𪗑	正歯 75	tʃ-i			
4	茲	𪗒 𪗓	喉 独	?-i			

5	翯	翯	翯	流風 独	ž-i		
6	翯	翯	翯	重唇136	p-i		
7	翯	翯	翯	重唇102	mb-i		
8	翯	翯	翯	重唇101~2	mb-i <sub>2</sub>		
9	翯	翯	翯	重唇 独	m-i		
10	翯	翯	翯	舌頭 59	t-i	翯	舌頭 59 t-i
11	翯	翯	翯	舌頭 60	t-i		
12	翯	翯	翯	舌頭 75	n-i	翯	舌頭 75 n-i
13	翯	翯	翯	舌頭 75	n-i <sub>2</sub>	翯	舌頭 76 n-i <sub>2</sub>
14	翯	翯	翯	齒頭 独	tsh-i		
15	翯	翯	翯	齒頭 22	s-i		
16	翯	翯	翯	齒頭 22	s-i <sub>2</sub>		
						翯	喉 27 ʔy-i
17	翯	翯	翯	流風2~3	t-i <sub>2</sub>	翯	流風 2 ti <sub>2</sub>
18	翯	翯	翯	流風124	l-i		
19	翯	翯	翯	流風110	ʁz-i		
20	翯	翯	翯	舌頭 独	th-ʷi		
21	翯	翯	翯	牙 独	k-ʷi		
22	翯	翯	翯	牙 独	ŋg-ʷi		
23	翯	翯	翯	流風 70	t-ʷi		
24	翯	翯	翯	流風161	ž-ʷi		

上記の反切下字を整理すると、つぎの四類になる。

反切下字	I	翯	⇔	翯(翯)	←	翯(翯)	-i
	II	翯	→	翯=翯	→	翯 → 翯 (平9)	-i

Ⅲ 𪛗 → 𪛘 → 𪛙 (?) -<sup>w</sup>i

Ⅳ 𪛚(𪛛) → 𪛜 ⇌ 𪛝 -i<sub>2</sub>

I類は韻図一段目の文字に、II類は二段目の文字に、そしてIII類は三段目の文字に使われている。はじめの二つは開口韻 -i を、あとの一類はその合口韻 -<sup>w</sup>i を代表した。韻図の上では、軽唇音と正歯音 w<sup>i</sup> t<sup>ʃ</sup>i を一段目に、重唇音と舌頭音 p<sup>i</sup> と t<sup>i</sup> を二段目に、牙音 k<sup>w</sup>i を三段目に置いた。四段目の文字は t<sup>i</sup>u (上52) であって、なぜここに配置されているのか詳かではない。IV類を反切下字とする文字は、韻図の一段から四段までには現われないが、つぎの各小韻で一類の文字と対立を示すから、IV類が代表する韻母を -i<sub>2</sub> としておきたい。

小韻 7) mb- 𪛗 -i (I類)    12) t- 𪛗 -i (I類)    15) s- 𪛗 -i (I類)

8) mb- 𪛚 -i<sub>2</sub> (IV類)    13) t- 𪛜 -i<sub>2</sub> (IV類)    16) s- 𪛝 -i<sub>2</sub> (IV類)

なおII類の最後の文字は平声9韻に属するが (?re), III類の最後の字は所属が不明である。

流風音の形式は全部で六種登録されている。その配置の仕方は、No. 622 と No. 623 で異なるが、具体形式に替えて示すとつぎのようになる。

No. 622	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">t<sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">l<sub>2</sub></td> </tr> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">bz<sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">z<sub>2</sub></td> </tr> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">t<sup>w</sup><sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">○</td> </tr> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">bz<sup>w</sup><sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">○</td> </tr> </table>	t <sub>2</sub>	l <sub>2</sub>	bz <sub>2</sub>	z <sub>2</sub>	t <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	bz <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	No. 623	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">t<sup>w</sup><sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">○</td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">t<sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">l<sub>2</sub></td> </tr> <tr> <td style="border: none; padding-right: 10px;">bz<sup>w</sup><sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">○</td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">bz<sub>2</sub></td> <td style="border: none; padding-right: 10px;">z<sub>2</sub></td> </tr> </table>	t <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	t <sub>2</sub>	l <sub>2</sub>	bz <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	bz <sub>2</sub>	z <sub>2</sub>
t <sub>2</sub>	l <sub>2</sub>																		
bz <sub>2</sub>	z <sub>2</sub>																		
t <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○																		
bz <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○																		
t <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	t <sub>2</sub>	l <sub>2</sub>																
bz <sup>w</sup> <sub>2</sub>	○	bz <sub>2</sub>	z <sub>2</sub>																

No. 622 の配置は、五段目左側に置かれた t<sub>2</sub> と bz<sub>2</sub> にあたる合口韻形式はあるが、右側の l<sub>2</sub> z<sub>2</sub> の合口韻形式がなかったことを意味している。No. 623 で間に丸印二つを置くのも同じ意味の指示である。

『文海雑類』には、この韻類に属するつぎの文字が含まれる。

𪛗	𪛘	<sup>a</sup> dzi <sub>2</sub> (平67)	𪛚	𪛜	<sup>a</sup> dzi (平67)
𪛝	𪛞	<sup>a</sup> dzi <sub>2</sub> (平67)	𪛗	𪛘	<sup>a</sup> dzi (平67)

𪚩 𪚪 𪚫 𪚬 𪚭 𪚮 𪚯 𪚰 𪚱 𪚲 𪚳 𪚴 𪚵 𪚶 𪚷 𪚸 𪚹 𪚺 𪚻 𪚼 𪚽 𪚾 𪚿 𪚿<sup>2</sup> 𪚿<sup>3</sup> 𪚿<sup>4</sup> 𪚿<sup>5</sup> 𪚿<sup>6</sup> 𪚿<sup>7</sup> 𪚿<sup>8</sup> 𪚿<sup>9</sup> 𪚿<sup>10</sup> 𪚿<sup>11</sup> 𪚿<sup>12</sup> 𪚿<sup>13</sup> 𪚿<sup>14</sup> 𪚿<sup>15</sup> 𪚿<sup>16</sup> 𪚿<sup>17</sup> 𪚿<sup>18</sup> 𪚿<sup>19</sup> 𪚿<sup>20</sup> 𪚿<sup>21</sup> 𪚿<sup>22</sup> 𪚿<sup>23</sup> 𪚿<sup>24</sup> 𪚿<sup>25</sup> 𪚿<sup>26</sup> 𪚿<sup>27</sup> 𪚿<sup>28</sup> 𪚿<sup>29</sup> 𪚿<sup>30</sup> 𪚿<sup>31</sup> 𪚿<sup>32</sup> 𪚿<sup>33</sup> 𪚿<sup>34</sup> 𪚿<sup>35</sup> 𪚿<sup>36</sup> 𪚿<sup>37</sup> 𪚿<sup>38</sup> 𪚿<sup>39</sup> 𪚿<sup>40</sup> 𪚿<sup>41</sup> 𪚿<sup>42</sup> 𪚿<sup>43</sup> 𪚿<sup>44</sup> 𪚿<sup>45</sup> 𪚿<sup>46</sup> 𪚿<sup>47</sup> 𪚿<sup>48</sup> 𪚿<sup>49</sup> 𪚿<sup>50</sup> 𪚿<sup>51</sup> 𪚿<sup>52</sup> 𪚿<sup>53</sup> 𪚿<sup>54</sup> 𪚿<sup>55</sup> 𪚿<sup>56</sup> 𪚿<sup>57</sup> 𪚿<sup>58</sup> 𪚿<sup>59</sup> 𪚿<sup>60</sup> 𪚿<sup>61</sup> 𪚿<sup>62</sup> 𪚿<sup>63</sup> 𪚿<sup>64</sup> 𪚿<sup>65</sup> 𪚿<sup>66</sup> 𪚿<sup>67</sup> 𪚿<sup>68</sup> 𪚿<sup>69</sup> 𪚿<sup>70</sup> 𪚿<sup>71</sup> 𪚿<sup>72</sup> 𪚿<sup>73</sup> 𪚿<sup>74</sup> 𪚿<sup>75</sup> 𪚿<sup>76</sup> 𪚿<sup>77</sup> 𪚿<sup>78</sup> 𪚿<sup>79</sup> 𪚿<sup>80</sup> 𪚿<sup>81</sup> 𪚿<sup>82</sup> 𪚿<sup>83</sup> 𪚿<sup>84</sup> 𪚿<sup>85</sup> 𪚿<sup>86</sup> 𪚿<sup>87</sup> 𪚿<sup>88</sup> 𪚿<sup>89</sup> 𪚿<sup>90</sup> 𪚿<sup>91</sup> 𪚿<sup>92</sup> 𪚿<sup>93</sup> 𪚿<sup>94</sup> 𪚿<sup>95</sup> 𪚿<sup>96</sup> 𪚿<sup>97</sup> 𪚿<sup>98</sup> 𪚿<sup>99</sup> 𪚿<sup>100</sup>

𪚩 𪚪 𪚫 𪚬 𪚭 𪚮 𪚯 𪚰 𪚱 𪚲 𪚳 𪚴 𪚵 𪚶 𪚷 𪚸 𪚹 𪚺 𪚻 𪚼 𪚽 𪚾 𪚿 𪚿<sup>2</sup> 𪚿<sup>3</sup> 𪚿<sup>4</sup> 𪚿<sup>5</sup> 𪚿<sup>6</sup> 𪚿<sup>7</sup> 𪚿<sup>8</sup> 𪚿<sup>9</sup> 𪚿<sup>10</sup> 𪚿<sup>11</sup> 𪚿<sup>12</sup> 𪚿<sup>13</sup> 𪚿<sup>14</sup> 𪚿<sup>15</sup> 𪚿<sup>16</sup> 𪚿<sup>17</sup> 𪚿<sup>18</sup> 𪚿<sup>19</sup> 𪚿<sup>20</sup> 𪚿<sup>21</sup> 𪚿<sup>22</sup> 𪚿<sup>23</sup> 𪚿<sup>24</sup> 𪚿<sup>25</sup> 𪚿<sup>26</sup> 𪚿<sup>27</sup> 𪚿<sup>28</sup> 𪚿<sup>29</sup> 𪚿<sup>30</sup> 𪚿<sup>31</sup> 𪚿<sup>32</sup> 𪚿<sup>33</sup> 𪚿<sup>34</sup> 𪚿<sup>35</sup> 𪚿<sup>36</sup> 𪚿<sup>37</sup> 𪚿<sup>38</sup> 𪚿<sup>39</sup> 𪚿<sup>40</sup> 𪚿<sup>41</sup> 𪚿<sup>42</sup> 𪚿<sup>43</sup> 𪚿<sup>44</sup> 𪚿<sup>45</sup> 𪚿<sup>46</sup> 𪚿<sup>47</sup> 𪚿<sup>48</sup> 𪚿<sup>49</sup> 𪚿<sup>50</sup> 𪚿<sup>51</sup> 𪚿<sup>52</sup> 𪚿<sup>53</sup> 𪚿<sup>54</sup> 𪚿<sup>55</sup> 𪚿<sup>56</sup> 𪚿<sup>57</sup> 𪚿<sup>58</sup> 𪚿<sup>59</sup> 𪚿<sup>60</sup> 𪚿<sup>61</sup> 𪚿<sup>62</sup> 𪚿<sup>63</sup> 𪚿<sup>64</sup> 𪚿<sup>65</sup> 𪚿<sup>66</sup> 𪚿<sup>67</sup> 𪚿<sup>68</sup> 𪚿<sup>69</sup> 𪚿<sup>70</sup> 𪚿<sup>71</sup> 𪚿<sup>72</sup> 𪚿<sup>73</sup> 𪚿<sup>74</sup> 𪚿<sup>75</sup> 𪚿<sup>76</sup> 𪚿<sup>77</sup> 𪚿<sup>78</sup> 𪚿<sup>79</sup> 𪚿<sup>80</sup> 𪚿<sup>81</sup> 𪚿<sup>82</sup> 𪚿<sup>83</sup> 𪚿<sup>84</sup> 𪚿<sup>85</sup> 𪚿<sup>86</sup> 𪚿<sup>87</sup> 𪚿<sup>88</sup> 𪚿<sup>89</sup> 𪚿<sup>90</sup> 𪚿<sup>91</sup> 𪚿<sup>92</sup> 𪚿<sup>93</sup> 𪚿<sup>94</sup> 𪚿<sup>95</sup> 𪚿<sup>96</sup> 𪚿<sup>97</sup> 𪚿<sup>98</sup> 𪚿<sup>99</sup> 𪚿<sup>100</sup>

これらの韻母と声母の連続関係を表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-i	p-mb- m-	w-	t-n-	—	ng-	tsh-s- <sup>2</sup> dz-	tš- <sup>2</sup> dž-	ʔ-ʔy-	l-t- ž-ʂz-
-i <sub>2</sub>	mb-	—	n-	—	—	s- <sup>2</sup> dz-	<sup>2</sup> dž-	—	t-
- <sup>2</sup> i	—	—	th-	—	k-ng-	—	—	—	hl-ʂz- t-

ʔi	tši	○	○	wi
○	○	○	ti	pi
○	○	k <sup>2</sup> i	○	○
○	○	○	tiu (上52)	○
		hi <sub>2</sub>	li	
		ʂzi	ži	
		t <sup>2</sup> i	○	
		ʂz <sup>2</sup> i	○	
		mbi <sub>2</sub> (平声67韻代表字)		
		mbi <sub>2</sub> (上声60韻代表字)		

韻図70を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

71. 韻図71 平声68韻

韻図71は、西夏語平声68韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (13a) では、一段目はすべての枠に、二段目は喉音を除いた全部の枠に、西夏字が記入されている。

流風音類の欄は右上に一字置れるのみで、他は三つの丸印か

𪚩	𪚪	𪚫	𪚬	𪚭
○	𪚮	𪚯	𪚰	𪚱
		○ 𪚲		
		○ ○		
		𪚳		

図71 平声68韻 No. 622

𪚩
○ 𪚪
𪚫

No. 623  
喉音の欄に2字書き込まれている。

が書かれる。No. 624 の韻図 (44b) はこの形と一致するが、No. 623 (74a) は喉音の欄に書き込みがある。𪛗 𪛘 ?iə (平66) liəN (平16) = ?iəN (平16) 平声68韻の韻母を筆者は - $\text{ɥ}$  と推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切をつぎにあげる。平68韻には相応する上声韻はない。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
68. 1	𪛗	𪛗 𪛘	重唇 80	p- $\text{ɥ}$
2	𪛙	𪛙 𪛚	重唇125	m- $\text{ɥ}$
3	𪛛	𪛛 𪛜	舌頭105	t- $\text{ɥ}$
4	𪛞	𪛞 𪛟	舌頭155	th- $\text{ɥ}$
5	𪛡	𪛡 𪛢	舌頭 独	nd- $\text{ɥ}$
6	𪛣	𪛣 𪛤	舌頭 独	n- $\text{ɥ}$
7	𪛧	𪛧 𪛨	牙 独	k- $\text{ɥ}$
8	𪛩	𪛩 𪛪	牙172	kh- $\text{ɥ}$
9	𪛬	𪛬 𪛭	喉 独	?- $\text{ɥ}$
10	𪛯	𪛯 𪛰	輕唇 36	w- $\text{ɥ}$
11	𪛲	𪛲 𪛳	舌頭 独	t- $\text{ɥ}^w$
12	𪛵	𪛵 𪛶	牙 71	k- $\text{ɥ}^w$
13	𪛹	𪛹 𪛺	齒頭 独	ts- $\text{ɥ}^w$
14	𪛻	𪛻 𪛼 𪛽	齒頭 11	ts- $\text{ɥ}$ 清
15	𪛿	𪛿 𪛾	齒頭 11	ts- $\text{ɥ}$
16	𪛿	𪛿 𪛾	流風 独	l- $\text{ɥ}$

上記の反切下字を整理すると、つぎの二類になる。

反切下字 Ia 𪛗 = 𪛚 → 𪛘 (𪛛) → 𪛜 (平27)

b 𪛟 ⇔ 𪛪 c 𪛾 ⇔ 𪛿 - $\text{ɥ}$

II 𪛰 ⇔ 𪛳 - $\text{ɥ}^w$

I類の a b c は補い合っていて、その反切をもつ文字は韻図の一段目に、II類の文字は韻図の二段目に置かれる。前者は開口韻、後者は合口韻であったことは明らかである。I類 a が平声27韻の文字 *tsɿ* と系わるのは、他の韻類にも見られるように緊喉母音 (-ɿ) と非緊喉母音 (-ɿh) の関連を示している。

齒頭音の小韻14と15を最後の流風音の前に置き、小韻14には反切に 𪛗 清の注をつけているのは、何を意図したのか明瞭ではない。

小韻 14 𪛗 𪛘 𪛙 𪛚 𪛛 *tsɿ*  
 色 樹の名 菓 茶 箸

小韻 15 𪛜 𪛝 *tsɿ*  
 秋 肺

cf. WrB *chɔng<sup>2</sup>* 秋, *a-chut* 肺, *chei<sup>2</sup>* 菓

WrT *tshon* 色, *ja* 茶

これらの韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɿ	p-m-	w-	t-th- nd-n-	—	k-kh-	ts-	—	ʔ-	l-
-ɿ <sup>w</sup>	—	—	t-	—	k-	ts-	—	—	—

No. 622

ʔɿ	tsɿ	kɿ	tɿ	pɿ
○	ts <sup>w</sup> ɿ	k <sup>w</sup> ɿ	t <sup>w</sup> ɿ	wɿ
		○ lɿ		
		○ ○		
		ʔɿ (平声68韻代表字)		

韻図71を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

## 72. 韻図72 平声69韻・上声61韻

韻図72は、西夏語平声69韻・上声61韻の中、特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (13b) では、一段目は重唇・輕唇音、齒頭・正齒音、喉音の枠に、二段目は重唇・輕唇音、舌頭・舌上音、牙音の枠、三段目は舌頭・舌上音、牙音と喉音の枠、四段目は齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が記入されてい





					𪗇	牙108	ng-ɿ
6	𪗇	𪗇	正齒 独	tʂ-ɿ			
7	𪗇	𪗇	正齒 独	tʂh-ɿ			
8	𪗇	𪗇	正齒 44	ʂ-ɿ			
9	𪗇	𪗇	喉 6	ʔy-ɿ			
10	𪗇	𪗇	重唇 独	p-ɿ			
11	𪗇	𪗇	重唇131	ph-ɿ			
12	𪗇	𪗇	重唇 81	mb-ɿ	𪗇	重唇 独	mb-ɿ
13	𪗇	𪗇	牙 独	k-ɿ			
14	𪗇	𪗇	舌頭113	t-ɿ	𪗇	舌頭113	t-ɿ
15	𪗇	𪗇	舌頭156	th-ɿ	𪗇	舌頭156	th-ɿ
16	𪗇	𪗇	舌頭 独	nd-ɿ	𪗇	舌頭162	nd-ɿ
17	𪗇	𪗇	舌頭115	nd-ɿ	𪗇	舌頭114	nd-ɿ
18	𪗇	𪗇	齒頭122	s-ɿ			
19	𪗇	𪗇	舌頭 独	t-ʷɿ			
20	𪗇	𪗇	舌頭180	nd-ʷɿ			
21	𪗇	𪗇	舌頭180	nd-ʷɿ	𪗇	舌頭180	nd-ʷɿ
22	𪗇	𪗇	牙 70	k-ʷɿ			
23	𪗇	𪗇	喉 40	ʔy-ʷɿ			
24	𪗇	𪗇	流風 27	ɬ-ʷɿ	𪗇	流風142	ɬ-ʷɿ
25	𪗇	𪗇	流風 73	ɬ-ɿ			
26	𪗇	𪗇	流風 73	ɬ-ɿ			
27	𪗇	𪗇	流風114	ʒ-ɿ	𪗇	流風114	ʒ-ɿ

上記の反切下字を整理すると、つぎの五類と一字になる。

反切下字	I	崩	→	𪛗	⇔	𪛘		-i		
	II a	𪛙	⇔	𪛚		b	𪛛	⇔	𪛜	-i
	III	𪛝	⇔	𪛞					-w <sub>i</sub>	
	IV	𪛟	⇔	𪛠					-i <sub>2</sub>	
	V	𪛡(𪛢)	⇔	𪛣(𪛤)					-i	
	VI	𪛥							(平92-ir)	

『文海』における小韻と声母の配分順序ははっきりとしているから、その順序を反切下字と韻図上の位置に關聯づけて提示することができる。

I類の反切下字は、小韻4から9までに使われ、韻図の一段目に、II類は小韻10から18までと小韻26に使われ、韻図の二段目に、III類は小韻19から24までに使われ、韻図の三段目に、IV類は小韻1から3までに使われ、韻図では四段目にそれぞれ置かれる。I類とII類は開口韻 -i を、III類はその合口韻 -w<sub>i</sub> を、IV類はそれらに対立する -i<sub>2</sub> をそれぞれ代表した。反切下字V類は、小韻25と27の流風音に限って使われている。またVIの一字は平声92韻に属する文字であって、69韻 -i を92韻 -ir に關係づけたのである。

この対立關係を韻図を中心に説明すると、

								反切下字
一段	重唇	○	○	○	正齒	喉	-i	I
二段	○	輕唇	舌頭	牙	○	○	-i	II
三段	○	○	舌頭	牙	○	喉	-w <sub>i</sub>	III
四段	○	○	○	○	正齒	○	-i <sub>2</sub>	IV

となり、舌頭音と牙音には -i と -w<sub>i</sub> の対立があり、正齒音には、-i と -i<sub>2</sub> の対立があったことが韻図の上で明示されている。

流風音の形式については、No. 622 と No. 623 で配置の方法は異なるが、同じ五形式の対立關係が示される。『文海雜類』には、この韻類に属するつぎの文字が登録されている。

No. 622

tʰi	li
○	
Bzi	
zi	

No. 623

Bzi	tʰi	li
zi	○	zi

編 緜 羸 ʳdzi (平69) + 羸 緜 徽 ʳdzi (上61) 紅  
 脛 胤 徽 ʳdzi (上61) 集 張 胤 胤 ʳdzʷi (平69) 依  
 緜 齒 舛 hli₂ (平69) 打 既 胤 舛 zi₂ (平69) 嫉妬  
 報 胤 羸 hli (平69) 弓 緜 羸 徽 hli (平69) 疾走  
 齧 胤 詵 ʳdzi (平69) 日

小韻15と旧版『同音』舌頭音156類は、つぎの関係になる。

旧版『同音』 羸 胤 羸 緜 四字一類  
                   上61      上61      上61      平69  
 新版『同音』           小類164 三字一類           独字

小韻20および21と旧版『同音』舌頭音180類は、つぎの関係になる。

旧版『同音』 羸 胤 緜 茲 四字一類  
                   上61      平69      平69      上61  
 新版『同音』    ↑           独字      独字           ↑  
                                   小類185 二字一類

新版『同音』の分類は、いずれも『文海』の組織と合致している。

これらの韻母と声母の連続関係を、つぎに表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-i	p-ph- mb-	w-mv-	t-th- nd-	—	k-kh- ŋ-	s- ʳdz-	tš-tšh- š-ʳdž-	ʔy-	t-ž-
-ʷi	—	—	t-nd-	—	k-	ʳdz-	—	ʔy-	t-
-i₂	—	—	—	—	—	—	tš-	—	BZ-ž-

No. 622

ʔyᵢ	tṣᵢ	○	○	wᵢ
○	○	kᵢ	tᵢ	pᵢ
ʔyʷᵢ	○	kʷᵢ	tʷᵢ	○
○	tṣᵢ₂	○	○	○
		tʷᵢ lᵢ		
		○		
		ʮzᵢ		
		zᵢ		
		tᵢ (平声69韻代表字)		
		tᵢ (上声61韻代表字)		

韻図72を筆者の再構成形式をもって書き改めると、つぎのようになる。

韻図が代表する言語では、wᵢ は [ʷᵢ] となっていたのであろう。

73. 韻図73 平声70韻・上声62韻

韻図73は、西夏語平声70韻・上声62韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (14a) では、一段目は舌頭・舌上音と喉音の枠、二段目は喉音、三段目は重唇・軽唇音の枠にそれぞれ西夏字が入っている。流風音の形式は三字記入され、上段左右一列に並びその下に丸印が左右に二つとさらにその下に上下に二つの丸印が置かれている。No. 623 の韻図 (76a) では、重唇・軽唇音の欄に二字書き込みがあり、三段目の文字の字形が違っている。

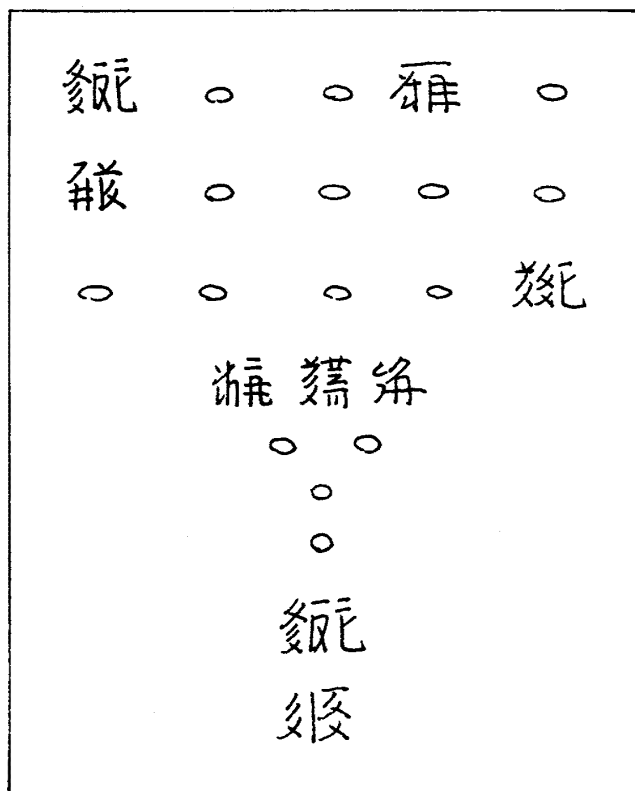
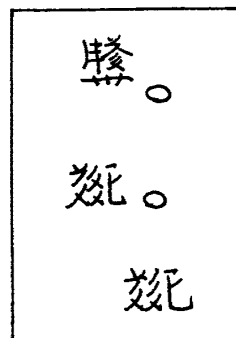


図73 平声70韻・上声62韻 No. 622

重唇音の欄に二字書き込みがあり、三段目の文字の字形が違っている。  
**𐰇𐰺** pᵠᵢ (平71) **𐰇𐰺** pʷᵠ (上62)  
 No. 624 (46b 上段) では、三段目の文字は No. 622 と一致するが、流風音の最下段に置かれた上下二つの丸印がない。

筆者は平声70韻・上声62韻の韻

No. 623



(重唇・軽唇音の部分)

母として -ʔ を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切，それにそれらと相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
70. 1	𪛗	𪛗	舌頭 73	t-ʔ			
2	𪛘	𪛘	舌頭 93	th-ʔ			
3	𪛙	欠	喉 51	?-ʔ	𪛙	喉 51	?-ʔ
4	𪛚	𪛚	流風 独	t-ʔ			
5	𪛛	𪛛	流風 29	hl-ʔ 濁	𪛛		
					𪛜	流風 42	l-ʔ
					𪛝	齒頭 10	tsh-ʔ
					𪛞	牙124	ŋg-ʔ
					𪛟	重唇 43	p-ʔ
					𪛠	重唇117	m-ʔ
6	𪛡	𪛡	喉 43	?-ʔ 平			
7	𪛢	𪛢	喉 43	?-ʔ 濁			

上記の反切下字を整理すると，つぎの一類と一字になる。

反切下字	I	𪛚 ⇄ 𪛛(𪛗)	-ʔ
	II	𪛜 (上62)	-ʔ

Ⅰ類は韻図の一段目の文字に，Ⅱ類は二段目の文字にそれぞれ使われ，開口韻と合口韻を代表した。小韻3は反切を欠くが，韻図の位置から ?ʔ を推定できる。小韻6と7は軽唇音 w- を反切上字とし，上声韻 lʔ を反切下字とする。

『同音』旧版では，小韻6と7の文字二字で喉音43類をなす。新版『同音』では，文字の分配がやや相違している。そこでは小韻6の文字を上声韻と認定したのであろうか。『文海』の注にある濁とは何を指すのかよく判定し難いが，

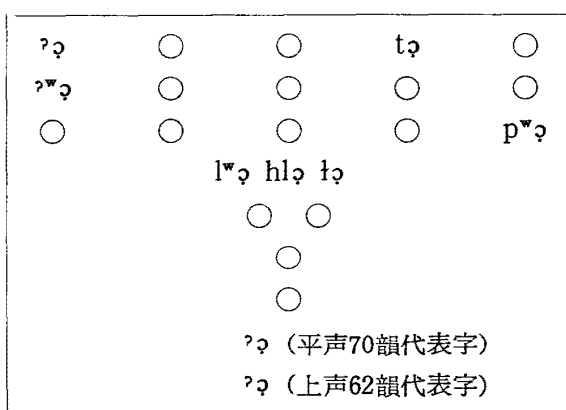
	喉音小類 104		
新版 『同音』	↓	独 字	↓
	𦉳	𦉴	𦉵
	太	氷	源
旧版 『同音』	喉音小類 43		独字
『文海』	平70(6)	平70(7)	上62
	ʔwɿ	ʔwɿ (ʔwɿl)	ʔwɿ

ʔwɿl の形を推定することも可能である。流風音は、lʷɿ hlɿ tɿ を記録している。  
『文海雑類』には、この韻類に属するつぎの文字が含まれる。

𦉳 𦉴𦉵 sɿ (平70) 三 𦉳 𦉴𦉵 hlʷɿ (hlʷɿl) (平70) 𦉵  
𦉶 𦉷𦉸 lʷɿ (上62) 古い甲羅 (?)

この韻類の韻母と声母の連続関係を、つぎにあげる。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɿ	—	—	t-th-	—	ŋg-	tsh-	—	ʔ-	t-hl-
-ʷɿ	p-m-	—	—	—	—	—	—	ʔ-	l-



韻図73を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

tɿ は、韻図が代表する言語では、lɿ の形をとっていたものと考えられる。

#### 74. 韻図74 平声74韻・上声63韻

韻図74は、西夏語平声74韻・上声63韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (14b) では、一段目のみが使われ、齒頭・正齒音以外の枠

能	○	薙	鬣	滕
		薙		
		鬣		
		鬣		
		能		

薙  
○

すべてに西夏文字があるほか、流風音の欄に一字のみ記入されている。

No. 623 の韻図 (76b) は、No. 624 (流風音) No. 622 と一致し、No. 624

(46b) は、流風音の文字の下に丸印がつく。

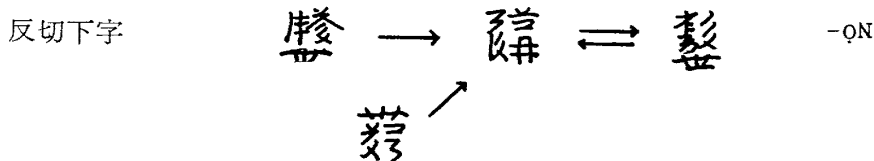
筆者は平声71韻・上声63韻の韻母を -QN と推定した。

『文海』平声韻各小韻代表字とその反切，そしてそれらに相応する上声韻形式をあげる。

図74 平声71韻・上声63韻 No. 622

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小韻	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
71. 1	滕	能 薙	重唇 独	p-QN			
2	鬣	能 滕	重唇 独	m-QN			
3	鬣	能 薙	舌頭 18	t-QN	鬣	舌頭 18	t-QN
4	能	能 鬣	舌頭 独	nd-QN	能	舌頭 独	nd-QN
					能	舌頭103	n-QN(?)
5	薙	能 薙	牙 76	k-QN			
6	薙	能 鬣	流風 独	hl-QN			
7	能	能 薙	喉 87	?-QN			
8	能	能 鬣	喉 86	?w-QN			

上記の反切下字を整理すると，つぎの一類にまとまる。





小韻8の反切上字は、『同音』では軽唇音類に属する。この韻母と声母の連続関係を表示すると、この韻母は極めて限られた声母としか結び付かなかったことがわかる。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɣN	p-mb-	—	t-nd- n-(?)	—	k-	—	—	?-ʔw-	hl-

No. 622

ʔɣN	○	kɣN	tɣN	pɣN
		hlɣN		
		tɣN (平声71韻代表字)		
		tɣN (上声63韻代表字)		
		平		

韻図74を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

75. 韻図75 平声72韻・上声64韻

韻図75は、西夏語平声72韻・上声64韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(15a)では、一段目は重唇・軽唇音，牙音，齒頭・正齒音の枠に、二段目は舌頭・舌上音と齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が置かれて

○	𐰇	𐰇	○	𐰇
○	𐰇	○	𐰇	○
		○		
		𐰇		
		𐰇		
		𐰇		

いる。流風音の枠は上段に丸印，下段に西夏字が一字書かれる。No. 623 (77a)は、No. 622と一致するが、No. 624 (47a上段)は、重唇・軽唇音の二段目に文字があり、喉音の二段目の丸印の下に一字が書き込まれている。𐰇は上声64，𐰇は平声86 ʔir である。

No. 624

○	𐰇	𐰇
○	𐰇	𐰇

(重唇・軽唇音と喉音の部分)

図75 平声72韻・上声64韻 No. 622

筆者は平声72韻・上声64韻の韻母として、-iǝŋ を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字とその反切，およびそれらに相應すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
72.					𪛗	重唇140	m-iǝŋ
					𪛘	重唇 独	mb-iǝŋ
1	𪛙	𪛚 𪛛	輕唇 独	w-iǝŋ			
2	𪛜	𪛝 𪛞	牙 独	k-iǝŋ			
3	𪛟	𪛠 𪛡	牙 独	ŋg-iǝŋ			
4	𪛣	𪛤 𪛥	正齒 71	tʃ-iǝŋ	𪛦	正齒 71	tʃ-iǝŋ
5	𪛧	𪛨 𪛩	舌頭67~68	t-iǝŋ	𪛪	舌頭 68	t-iǝŋ
6	𪛬	𪛭 𪛮	舌頭 67	t-iǝŋ			
7	𪛱	𪛲 𪛳	舌頭 独	nd-iǝŋ	𪛴	舌頭116	nd-iǝŋ
8	𪛷	𪛸 𪛹	舌頭 独	nd-iǝŋ	𪛺	舌頭 独	nd-iǝŋ
9	𪛼	𪛽 𪛾	齒頭 83	ts-iǝŋ	𪛿	齒頭 83	ts-iǝŋ
10	𪛻	𪛼 𪛽	齒頭 独	s-iǝŋ	𪛾	齒頭 独	s-iǝŋ
11	𪛿	𪛺 𪛻	流風 独	ʒ-iǝŋ	𪛼	流風 86	r-iǝŋ
					𪛽	流風 96	ʒz-iǝŋ

上記の反切下字を帰納すると，つぎの一類になる。

反切下字      𪛛(𪛣) → 𪛞 → 𪛮 ⇔ 𪛩      -iǝŋ

反切下字が一類であるのに，韻図で上二段が使われているのは，一段目に輕唇音，正齒音を，二段目に重唇音 (No. 624 で)，齒頭音を配置したからである。舌頭音はあとのグループに入っている。流風音は l- にはじまる形式がないために，上に丸印が置かれ，また上声韻形式の ʒziǝŋ は，この韻図に登録されていない。

小韻5と6はいずれも tᶢᶢᶢᶢ を代表するが、両者は声調の違いを反映しているのであろう。新版『同音』では、小韻5は舌頭音小類73に属し、小韻6の文字は独字の項に入っている。

『文海雜類』には、この韻類に所属するつぎの文字

𠵹 𠵹𠵹 ᵐdzᶢᶢᶢᶢ (平72) <譬えば>と 𠵹 𠵹𠵹 hᶢᶢᶢᶢ (上64)

<獲得する>が含まれる。

この韻母は舌上音と喉音には結び付かなかった。韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ᶢᶢᶢᶢ	m-mb-	w-	t-nd-	—	k-kh- ŋg-	ts-s- ᵐdz-	tš-	—	ž-ʁz- hl-

No. 622

○	tšᶢᶢᶢᶢ	kᶢᶢᶢᶢ	○	wᶢᶢᶢᶢ
○	tsᶢᶢᶢᶢ	○	tᶢᶢᶢᶢ	○
		○		
		žᶢᶢᶢᶢ		
		tᶢᶢᶢᶢ (平声72韻代表字)		
		tᶢᶢᶢᶢ (上声64韻代表字)		

韻図75を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

wᶢᶢᶢᶢ は、韻図の言語では [ʌᶢᶢᶢᶢ] であったと考えられる。

## 76. 韻図76 上声65韻

韻図76は、西夏語上声65韻の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻

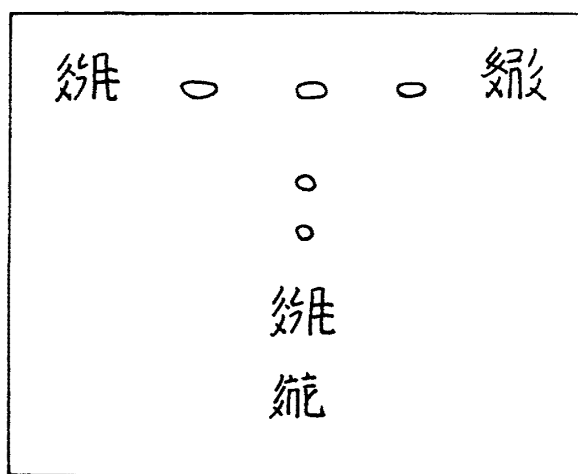
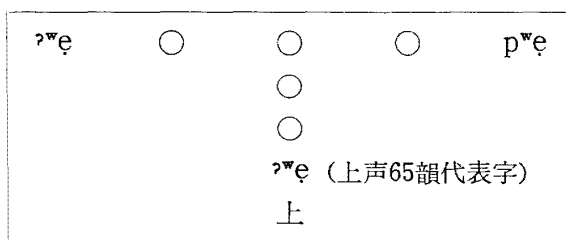


図76 上声65韻 No. 622

図では (15b) 上段のみが使われ、重唇・輕唇音の枠と喉音の枠に文字があるほか、流風音の欄に丸印が上下に二つ置かれる。No. 623 の韻図 (77b) は No. 622 と一致するが、No. 624 (47a 下段) には流風音の丸印がない。この韻類の所属字は少なく、重唇音71の四字と、喉音の一字に限られる。筆者はその韻母の形式を -wᶢ と推定した。

1 𦉑 重唇 71 p<sup>w</sup>e 2 𦉑 喉独 p<sup>w</sup>e



韻図76をこの再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。上声65韻の文字は 𦉑 <溝>が正しく、類似した字形 𦉑 <部姓>は p<sup>y</sup>iufi 平声3韻に属する。この韻類

の代表字 p<sup>w</sup>e は、<おたまじゃくし>を意味する。

77. 韻図77 平声73韻・上声66韻

韻図77は、西夏語平声73韻・上声66韻の特定の音節形式を図示したものである。

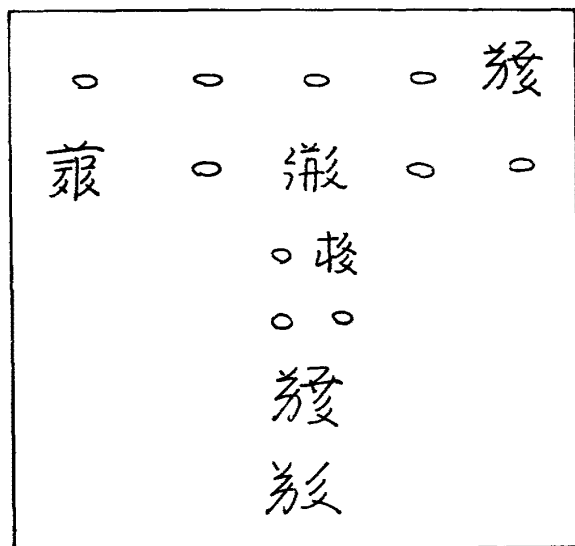
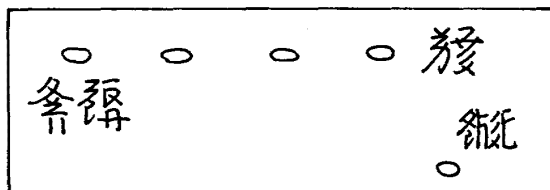


図77 平声73韻・上声66韻 No. 622



No. 623 (部分, 一段目)

No. 622 の韻図 (16a) では、一段目は重唇・軽唇音の枠、二段目は牙音と喉音の枠にそれぞれ西夏字があり、流風音の欄は上段右側に一字置かれるのみで、ほかは丸印が三つ使われる。No. 624 (48b 上段) は、No. 622 と一致するが、No. 623 (78) には重唇・軽唇音の二段目と、喉音の一段目に書き込みがある。注字は、𦉑 平33韻 p<sup>w</sup>e と 𦉑 p<sup>i</sup>ě (平66)? に読める。

筆者は、平声73韻・上声66韻の韻母として -e を推定した。

『文海』の平声韻各小韻代表字と反切、それに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
73. 1	𦉑	𦉑𦉑	舌頭167	n-e			
2	𦉑	𦉑𦉑	軽唇 独	w-e	𦉑	軽唇 15	w-e
					𦉑	軽唇 16	w-e

3 𪛗 𪛘 𪛙 流風 獨 r-ɛ

𪛚 牙 獨 k-wɛ

𪛛 喉 33 ʔw-ɛ

𪛜 流風 51 r-ɛ

これらの反切下字を整理すると、つぎの一類に帰納できる。

反切下字 𪛘 ⇌ 𪛗 -ɛ

小韻2に属する二字は、旧版『同音』では、軽唇音小類16と独字に分けられるのに対して、新版『同音』では、『文海』の組織と同じく、二字で一類(小類27)をなしている。

新版『同音』 小類 27 小類 24 韻図の位置からみると、  
 𪛘 𪛙 𪛚 上声韻牙音独字は、合口  
 平73 平73 上66 韻であった。kwɛとして  
 旧版『同音』 独字 小類 16 おく。

この韻母と声母の連続関係を、つぎに表示する。

声母 韻母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ɛ	—	w-	n-	—	—	—	—	—	r-
-wɛ	—	—	—	—	k-	—	—	ʔw-	—

No. 622

○	○	○	○	wɛ
ʔwɛ	○	kwɛ	○	○
		○ rɛ		
		○ ○		
		wɛ (平声73韻代表字)		
		wɛ (上声66韻代表字)		

韻図77を筆者の再構成形式に書き改めると、左のようになる。韻図の言語では、wɛは[ɰɛ]になっていたのであろう。

78. 韻図78 上声67韻

韻図78は、西夏語上声67韻の形式を図示したものである。No. 622の韻図(16b)では、一段目喉音の枠と流風音下段に西夏字が置かれる。No. 623, No. 624共にNo. 622と一致するが、No. 623の韻図では喉音の文字が異り、重

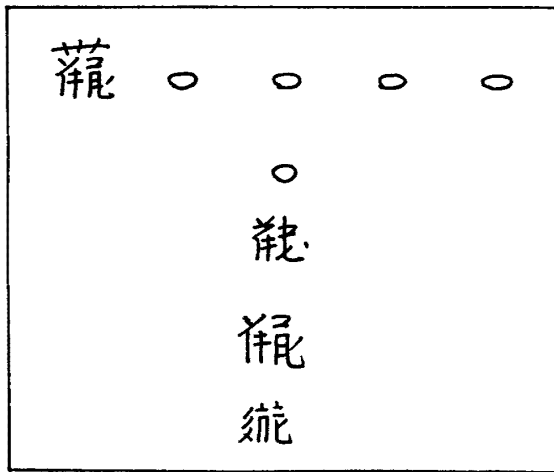
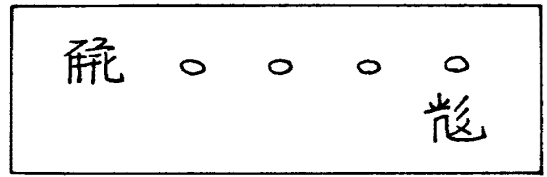


図78 上声67韻 No. 622

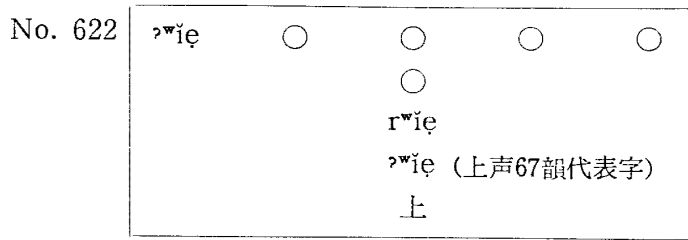


No. 623 (一段目と書き込み)

唇・軽唇音の丸印の下に書き込みがある。穉 pīe <編>は上声31韻に属する。

筆者は上声67韻の韻母を -wīe と推定した。この上声韻には相応する平声韻がなく，所属字はつぎの四字に限られる。

穉 穉 喉 64 ?wīe 穉 穉 流132 r'wīe



この二形式共に韻図に記入されたことになる。筆者の再構成形式をもって，韻図78を書き改めると，左のようになる。

79. 韻図79 平声74韻・上声68韻

韻図79は，西夏語平声74韻・上声68韻の特定の形式を図示したものである。

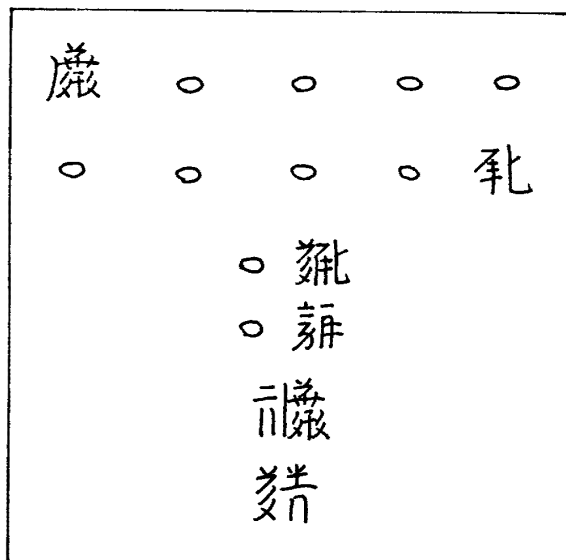
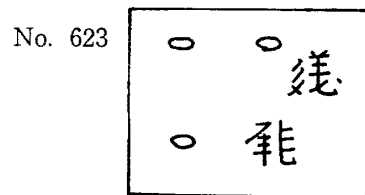


図79 平声74韻・上声68韻 No. 622

No. 622 の韻図 (17a) では，一段目の喉音の枠と二段目の重唇・軽唇音の枠に西夏字があり，流風音の欄の右側上下に文字，左側上下に丸印が置かれる。No. 624 (49a 上段) は No. 622 と合致するが，No. 623 の韻図 (80) は重唇



(重唇・軽唇音)

・軽唇音一段目の丸印の下に書き込みがある。その文字は lu (上1) と読める。筆者は平声74韻・上声68韻の韻母を -iɛ と推定した。

『文海』の平声韻各小韻代表字と反切，そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
74.					𪛗	重唇 4	m-iɛ
1	𪛗	𪛗𪛗	重唇 5	m-iɛ	𪛗	重唇 5	m-iɛ
2	𪛗	𪛗𪛗	重唇 独	mb-iɛ			
3	𪛗	𪛗𪛗	舌頭173	n-iɛ	𪛗	舌頭172	n-iɛ
4	𪛗	𪛗𪛗	喉 30	ʔ-iɛ			
5	𪛗	𪛗𪛗	喉 60	ʔy-iɛ	𪛗	喉 70	ʔy-iɛ
6	𪛗	𪛗𪛗	流風16~17	r-iɛ	𪛗	流風 16	r-iɛ
7	𪛗	𪛗𪛗	流風 17	r-iɛ			
8	𪛗	𪛗𪛗	流風 独	ʁz-iɛ	𪛗	流風 独	ʁz-iɛ
9	𪛗	𪛗𪛗	軽唇 11	w-iɛ	𪛗	軽唇 10	w-iɛ

上記の反切下字を整理すると，つぎの二類になる。

- 反切下字 a 𪛗(𪛗) ⇔ 𪛗
- b 𪛗(𪛗) ⇔ 𪛗 -iɛ

しかし，この a b は声母に対して相補的な分配を示すから，両者は一つの韻母 -iɛ を代表していると考えたい。韻図では，軽唇音にはじまる音節が合口韻形式のように扱われて二段目に置かれている。流風音形式は，riɛ と ʁziɛ が登録され，上下に並んでいる。左側の丸印はその合口韻が欠けることを意味する。

小韻6と小韻7の分割は，声調の弁別 [平声と平去声] を反映しているのであろう。その両類をめぐって『同音』(新版と旧版)と『文海』の組織を対照して示してみよう。

旧版 『同音』 小類 16

小類 17 (五字一類)

..... 𪛗。 𪛘 𪛙 𪛚 𪛛 𪛜

平74 平74 平74 (平74) 平74 平74

新版 『同音』

小類 16

小類 17

『文海』

小韻 6 rię

小韻 7 rię [平去声?]

この韻母 -ię は、かなり限定された声母としか連続しなかった。

声母 \ 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ię	m-mb-	w-	n-	—	—	—	—	?-?y-	r-bz-

No. 622

ꞑię	○	○	○	○
○	○	○	○	wię
		○ rię		
		○ bzię		
		ꞑię (平声74韻代表字)		
		ꞑię (上声68韻代表字)		

韻図79を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

韻図の言語では wię は [mie] であったと考えられる。

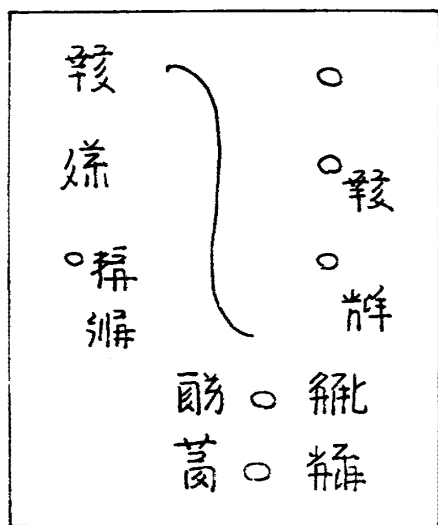
80. 韻図80 平声75韻・上声69韻

𪛗	𪛘	𪛙	○	○
𪛚	○	○	○	○
○	○	○	𪛛	○
		𪛜	𪛝	
		𪛞	𪛟	
		𪛠	𪛡	

図80 平声75韻・上声69韻 No. 622

韻図80は、西夏語平声75韻・上声69韻をもつ特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (17b) では、一段目は牙音、齒頭・正齒音と喉音の枠に、二段目は喉音に、そして三段目は舌頭・舌上音の枠に、それぞれ西夏字が記入される。流風音は上段下段二字ずつ計四字が並べられる。No. 624 の韻図 (49a 下段) は No. 622 と合致するが (ただし舌頭・舌上音の三段目は 𪛛 となる)、No. 623 (80b) では、重唇・輕唇音の欄と喉音の欄に書き込みがあり、流風音の配置が少し異っている。





そこでは左右二字の間に丸印を二つ挿入する。重唇・軽唇音の書き込みは、二段目が wur (喉音一段目と同じ文字)、三段目は khɪě (上8) <米>であり、喉音の欄は ʔiēr (平78) <亡> lu<sub>2</sub> (平2) <乱>と読める。

筆者は、平声75韻・上声69韻の韻母を -ur と推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切、それらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

No. 623 (流風音類と書き込みの部分)

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
75. 1	𪛗	𪛛𪛜	重唇143	mb-ur			
2	𪛘	𪛛𪛝	重唇 50	m-ur	𪛛	重唇 独	m-ur
3	𪛙	𪛛𪛞	重唇 50	m-ur			
4	𪛚	𪛛𪛟	牙 133	k-ur	𪛛	牙133	k-ur
5	𪛛	𪛛𪛡	齒頭108	ts-ur			
6	𪛜	𪛛𪛢	牙 独	ŋ-ur			
7	𪛝	𪛛𪛣	軽唇 独	w-ur			
8	𪛞	𪛛𪛤	喉 78	ʔ-ur			
9	𪛟	𪛛𪛥	流風 7	r-ur			
10	𪛠	𪛛𪛦	流風 7	r-ur	𪛛	流風 7	r-ur
					𪛛	流風 68	t-ur
11	𪛡	𪛛𪛧	流風	ʔz-ur <sup>(12)</sup>	𪛛	流風138	ʔz-ur
12	𪛢	𪛛𪛨	舌頭 独	n-ur			
13	𪛣	𪛛𪛩	牙 59	ŋ <sup>w</sup> -ur			

(12) 小韻11の反切上字は ʔz- であり、上声の流風音138には、チベット文字表音 grzu があるから、両者は対をなすと考えられる。

以上の反切下字を整理すると、つぎのようになる。

反切下字 a 解=解(蕤) ⇔ 訖(戮)

b 穉 → 訖 ⇔ 纒

c 莠(纒) ⇔ 穉 -ur

この三類の中、実際には a 類と b 類は、m- と r- を初頭にもつ形式で対立している。

小韻 3 mur 解 小韻 10 rur 訖 反切下字 a

小韻 2 mur 纒 小韻 9 rur 穉 反切下字 b

小韻 3 と 10 は所属字数が多いのに対して、2 と 9 の方はそれぞれ一字に限られる(後述)。反切下字 a と b が系聯しないから、この二列を -ur と -ur<sub>2</sub> として弁別することも可能であるが、この反切下字の二類は、いままで扱ったような別々の位置を韻図上に与えられていない。韻図の上では一類として扱われている。具体的に言うと、9 rur も 10 rur も韻図上では解によって代表されることになる。したがって mur と rur の『文海』における分割は、声調の相違を反映したものであったと理解したい。反切下字 a b c 三類はともに一つの韻母 -ur を代表したのである。

『同音』(旧版) 重唇音 50 と流風音 7 を『文海』の組織と照合すると、つぎの関係になる。

『同音』(旧版) 重唇 50

6 字一類 (最後の二字の配列順序は変えた)

穉 訖 蕤 訖 戮 纒  
平75 平75 平75 平75 平75 (上69?)

『文海』 平75

小韻 2

小韻 3

[平去声?]

『同音』(旧版) 流風 7

6 字一類

纒 解 解 蕤 穉 穉  
平75 平75 平75 平75 平75 上69

『文海』 平75

小韻 9

小韻 10

[平去声?]

韻図 No. 622 の喉音の欄の一段目と二段目の文字は逆であってほしい。二段目の文字（小韻8）が一段目に置かれ、一段目の文字（小韻7）が、No. 623 のように重唇・軽唇音の欄の二段目に配置されるのが正しい形と思われる。また、この韻母は舌頭・舌上音とは結び付かないため、三段目の文字は何を示すのか詳かではない。𪛗であれば  $t\text{ʰ}h_2$  (平27)。

流風音は四形式が登録されている。No. 622 と No. 623 の配置に具体形式を挿入しよう。ここでは平声  $\text{ʒ}z\text{ur}$  と上声  $\text{ʒ}z\text{ur}$  が対照されたことになるが、韻図の言語では、 $\text{ʒ}z\text{-} : \text{ʒ}\text{-}$  の対立であったかも知れない。

No. 622	<table border="1"> <tr> <td>ʰur (上)</td> <td>ʀur</td> </tr> <tr> <td>ʒzur (上)</td> <td>ʒzur</td> </tr> </table>	ʰur (上)	ʀur	ʒzur (上)	ʒzur	No. 623	<table border="1"> <tr> <td>ʰur (上)</td> <td>○</td> <td>ʀur</td> </tr> <tr> <td>ʒzur (上)</td> <td>○</td> <td>ʒzur</td> </tr> </table>	ʰur (上)	○	ʀur	ʒzur (上)	○	ʒzur
ʰur (上)	ʀur												
ʒzur (上)	ʒzur												
ʰur (上)	○	ʀur											
ʒzur (上)	○	ʒzur											

No. 623 の韻図は、軽唇音  $w\text{ur}$  を二段目に書き入れ、開口韻対合口韻のような扱いをしているため、流風音には合口韻がないことを丸印で示したのであろう。

韻母  $-\text{ur}$  と声母の連続関係を、つぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
$-\text{ur}$	$mb\text{-}m\text{-}$	$w\text{-}$	$n\text{-}$	—	$k\text{-}\eta\text{-}$ $\eta^w\text{-}$	$ts\text{-}$	—	$ʔ\text{-}$	$r\text{-}\text{ʒ}z\text{-}$ $t\text{-}$

No. 622	<table border="1"> <tr> <td>wur</td> <td>tsur</td> <td>kur</td> <td>○</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>ʔur</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td><math>t\text{ʰ}h_2?</math></td> <td>○</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>ʰur (上)</td> <td>ʀur</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>ʒzur (上)</td> <td>ʒzur</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>mur (平声75韻代表字)</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>m̄ir (平86)</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	wur	tsur	kur	○	○	ʔur	○	○	○	○	○	○	○	$t\text{ʰ}h_2?$	○			ʰur (上)	ʀur				ʒzur (上)	ʒzur				mur (平声75韻代表字)					m̄ir (平86)		
wur	tsur	kur	○	○																																
ʔur	○	○	○	○																																
○	○	○	$t\text{ʰ}h_2?$	○																																
		ʰur (上)	ʀur																																	
		ʒzur (上)	ʒzur																																	
		mur (平声75韻代表字)																																		
		m̄ir (平86)																																		

韻図80を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。この韻図では上声韻代表字として、平声86韻の文字が使われるが、これは誤りであって、**𪛗**  $\text{mur}$  (上69) が正しい。

### 81. 韻図81 平声76韻・上声70韻

韻図81は、西夏語平声76韻・上声70韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (18a) では、一段目齒頭・正齒音（これは誤りで、牙音に置くのが正しい）と喉音の枠にそれぞれ一字、それに流風音に2字が上下に配置される

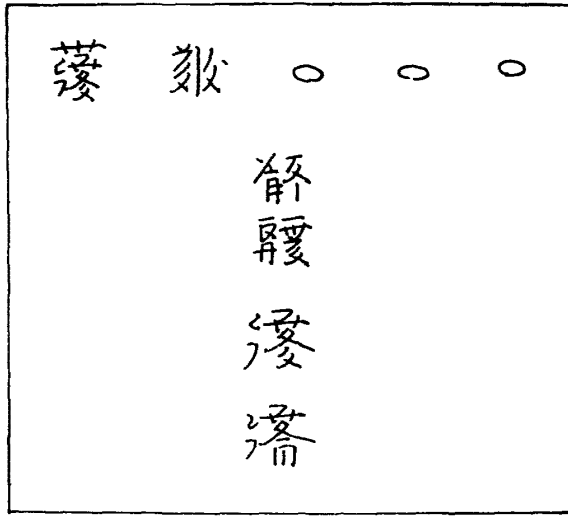
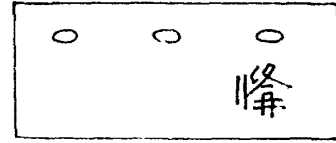


図81 平声76韻・上声70韻 No. 622



No. 623 (重唇・輕唇音の部分)

のみである。No. 624 (50b 上段) は、No. 622 と変りなく、No. 623 の韻図 (82a) には、重唇・輕唇音の丸印の下に一字の書込みがある。この文字は平声59韻 pīu で、平声76韻の pīur と近い形を示している。筆者は平声76韻・上声70韻の

韻母として、-iur を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切，そしてそれに相應すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
76. 1	叢	訛藻	牙 38	k-iur	訛	牙 37	k-īur
2	叢	訛藻	牙109	ŋ-iur	訛	牙109	ŋ-īur
3	藻	訛藻	喉 25	ʔy-iur	訛	喉 25	ʔy-īur
4	藻	訛藻	喉 25	ʔy-iur			
					駭	流風139	ʔz-īur <sup>(13)</sup>
5	藻	訛藻	流風 78	r-iur	駭	流風 78	r-īur
6	藻	訛藻	流風 78	r-iur			

上記の反切下字は系聯し，つぎの一類にまとまる。

反切下字      訛(藻) → 藻 = 藻 ⇔ 藻      -iur

『同音』旧版の喉音小類25，流風音小類78にあたる形式を，それぞれ小韻3と4，小韻5と6の二類に分割するのは，声母と韻母の対立ではなく，声調の違いによったものと考えられる。

(13) 流風音小類139には，漢字表音 □移足がある。138 ʔzur (上69) 139 ʔziur (上70) と並ぶ。

濛  
平76
 

 濛  
平76
 

 濛  
平76
 

 濛  
上60
 

 濛  
上60

『文海』

小韻 3 [平去声?]      小韻 4 [平声]      [上声]

『同音』新版

独字      小韻 34 二字      小韻 33 三字

流風音小類78は、総計18字からなり、平声十字=小韻5 [平声]、平声五字=小韻6 [平去声?], 上声二字=小韻5 に相応する [上声]、一字=上声字?に分けられる。この韻母は結び付き得る声母が限られ、五種類の形式しかない。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-iur	—	—	—	—	k-ŋ-	—	—	?y-	r-ʁz-

No. 622

?yiur	○	kiur	○	○
		riur		
		ʁziur		
		?yiur (平声76韻代表字)		
		?yiur (上声70韻代表字)		

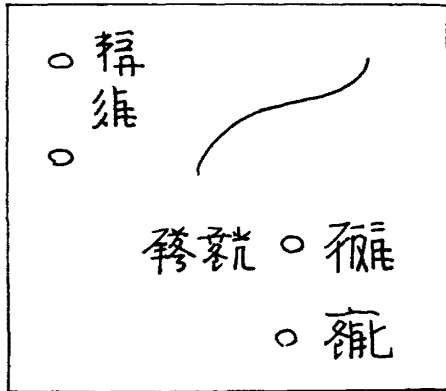
韻図81を筆者の再構成形式で書き改めると、左のようになる。

82. 韻図82 平声77韻・上声71韻

○	後	○	○	○
○	○	○	○	𐰃𐰆
	○	𐰃𐰆		
	○	𐰃𐰆		
	𐰃𐰆			
	𐰃𐰆			

図82 平声77韻・上声71韻 No. 622

韻図82は、西夏語平声77韻・上声71韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(18b)では、一段目齒頭・正齒音の枠と二段目重唇・輕唇音の枠にそれぞれ一字記入されるほか、流風音の欄に上下二字が並べられる。No. 624の韻図(50b下段)は、No. 622と一致するが、No. 623(82b)では、喉音と流風音に書き込みがある。上の方は ?iër (平78)-kəw (平



No. 623 (喉音と流風音の書き込み部分)

43) と読めるが、下の書き込みはよく判読できない。

筆者は、平声77韻・上声71韻の韻母として -ir を推定した。

『文海』の平声韻各小韻代表字とその反切、それにそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
77. 1	穉	穉彘	重唇 独	mb-Ir	穉	重唇 独	mb-Ir
2	穉	穉穉	舌頭 独	n-Ir	穉	舌頭 29	n-Ir
3	穉	穉穉	齒頭 51	ts-Ir			
4	穉	穉穉	齒頭 52	ts-Ir			
5	穉	穉穉	流風 34	r-Ir	穉	流風 33	r-Ir
6	穉	穉穉	流風109	Bz-Ir	穉	流風109	Bz-Ir
7	穉	穉穉	輕唇 9	w-Ir	穉	輕唇 独	w-Ir
8	穉	穉穉	輕唇 9	w-Ir	穉	輕唇 9	w-Ir
9	穉	穉穉	牙 独	ŋ <sup>w</sup> -Ir	穉	牙136	ŋ <sup>w</sup> -Ir

上記の反切下字を整理するとつぎの二類になるが、それらは、一つの韻母 -ir を代表していると考えられる。

反切下字 a 穉(穉) → 穉 ⇌ 穉 ← 穉(穉)

b 穉(穉) ⇌ 穉 -Ir

(tsIr と wIr が、それぞれ二つの小韻に分割される。)

小韻 3 反切下字 b類 齒頭 51 小韻 7 反切下字 b類 流風 9

小韻 4 a類 齒頭 52 小韻 8 a類 流風 9

もしこの二小韻が、 $-ir_2$  と  $-ir$  を代表していたとすると、韻図上、前者がおそらく三段目に配置されている筈である。しかし韻図82ではこれらの形式は一段目開口韻と二段目合口韻扱いを受けた軽唇音に分けられるのみで、三段目は使われていない。したがって『文海』に見られるこの分割も韻母の対立を反映したものではなく、声調の差異によってなされたものと見たい。

小韻3 tsir, 7 wir [平去声]: 小韻4 tsir, 8 wir [平声]

流風音小類109は五字からなり、その所属韻は、平声8韻・上声7韻と平声77韻・上声71韻に分かれる。

平 8  
 系
 

 上 7  
 耗
 

 上 71  
 端 𪛗 𪛘
 

 平 77  
 𪛙

具体的に形式をあげると、 $zi$  (平8・上7) と  $ʒir$  (平77・上71) が同一小類に入っていたことがわかり、韻類相互の関係が証明される。

この韻母  $-ir$  と声母の連続関係を、つぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
$-ir$	m-mb-	w-	n-	—	$\eta^w-$	ts-	—	—	r-ʒ-

No. 622	○	tsir	○	○	○
	○	○	○	○	wir
			○	rir	
			○	ʒir	
				pir (平声77韻代表字)	
				pir (上声71韻代表字)	

韻図82を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

### 83. 韻図83 平声78韻

韻図83は、西夏語平声78韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(9a)では、一段目舌頭・舌上音の枠を除いて全部の枠に西夏字の記入があり、流風音の欄は丸印が上下に二つ並べられる。No. 624(51a)は、No. 622と一致するが、No. 623(84a)の韻図では、流風音の欄に上段丸印、下段には西夏字一字が置かれている。この文字は平声78韻に属する(小韻5)から、

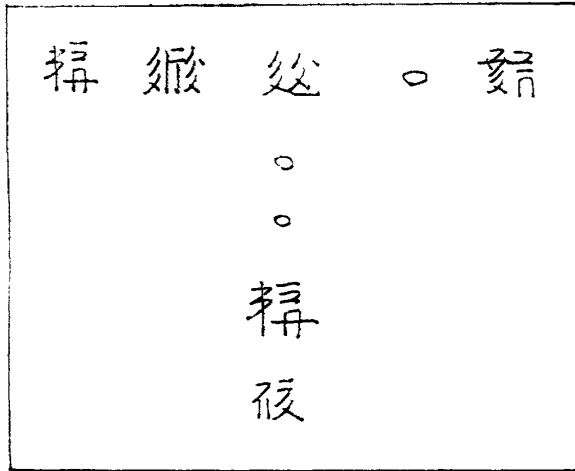
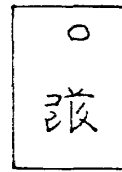


図83 平声78韻 No. 622



No. 623 (部分 流風音)

ここに記入されるのは正しい。筆者は、平声78韻の韻母を -iër と推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字とその反切をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
78. 1	孃	𦉳孃 𦉳	輕唇 33	w-iër 清
2	𦉳	𦉳孃	輕唇 33	w-iër
3	𦉳	𦉳孃	輕唇 独	w-iër
4	孃	嫩迩	喉 独	?-iër
5	孃	𦉳嫩	流風 独	ž-iër
6	𦉳	嫩孃	牙120	k-iër
7	孃	𦉳孃 孃	正齒 97	tš-iër 上
8	孃	𦉳孃	正齒 97	tš-iër

この反切下字を整理すると、つぎの a 類 と b 類になる。

反切下字 a 孃 ⇌ 迩(𦉳)  
 b 孃 ⇌ 孃 ← 孃 -iër

この a 類と b 類は、輕唇音を初頭にもつ形式で対立するが、それらの形式は、韻図の上では、小韻1の孃によって代表されているから、小韻2と3は、さきの諸韻と同じように、声調の相違を反映したものと考えられる。



旧版『同音』 軽唇 33 (三字一類)

	𪛗	𪛘	𪛙	
	平78	平78	平78	
『文海』	小韻 1 〔平声〕	小韻 2 〔平声〕	小韻 3 〔平去声 1〕	: wiër wiër wiër
新版『同音』	独字	独字	独字	

この韻類は平声韻のみで、上声韻の代表字がない。しかし、『文海』によると上声の注をもった小韻があって、実際には上声韻もあったことが判明する。

小韻 7 𪛚 tšïër 〔上声〕 <方便>

小韻 8 𪛛 tšïër 〔平声〕 <右>

小韻 4 の声母は、東部の西夏語では  $\gamma k-$  の形をもっていた。 $\gamma k-$  の方が古い形態を代表している。

𪛜 [標準形] ʔiër : [東部方言形]  $\gamma kiër$  『掌』 漢字表音 夷格<亡>

この韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ʔiër	—	w-	—	—	k-	—	tš-	ʔ-	ʒ-

No. 622	ʔiër	tšïër	kiër	○	wiër
			○		
			○		
			ʔiër (平声78韻代表字)		
			平		

韻図83を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。この韻図の枠組に No. 623 に記された  $ʒiër$  を追加すべきであろう。

### 85. 韻図85 平声79韻・上声72韻

韻図85は、西夏語平声79韻・上声72韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (19b) では、一段目は牙音と齒頭・正齒音の枠に、二段目は齒頭・正齒音と喉音の枠に、三段目は重唇・軽唇音と牙音の枠にそれぞれ西夏字が記入され、流風音の欄は右側上下に西夏字が二字、左側上下に丸印二つ

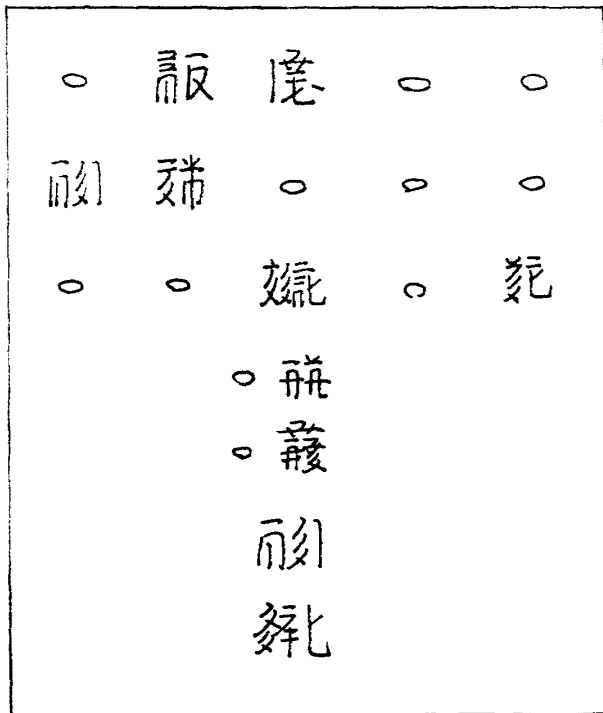
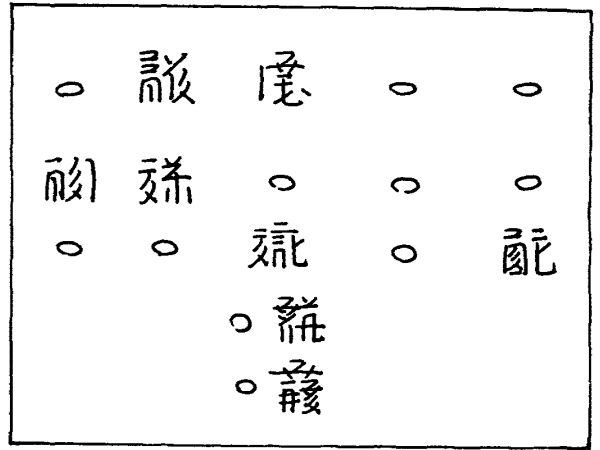


図85 平声79韻・上声72韻 No. 622



No. 624 韻類代類表字を略する

が並べられている。No. 624 は、枠組みは No. 622 と相違がないが、記入される字形が異り、No. 624 の方が正しい場合が多い。No. 622 の 韻 は平38 k-e<sup>y</sup> 孃 は平65 t-i, 孃 は平11 kif<sup>i</sup> でいずれも書き誤りであろう。しかし No. 624 の 孃 は 孃 の誤りと思われる。No. 623 は、No. 624 の字形を書いているが、そのほかに流風音の欄の左側に 孃 s<sup>w</sup>if<sup>i</sup> (平11) <吉祥> の書き込みがある。筆者は、平声79韻・上声72韻の韻母として、-ir を推定した。

『文海』平声韻各小韻の代表字および反切、そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
79. 1	孃	孃 孃	舌頭 独	nd-ir	孃	舌頭174	nd-ir
2	孃	孃 孃	牙128	k-ir	孃	牙129	k-ir
3	孃	孃 孃	牙 独	ŋ-ir			
4	孃	孃 孃	正齒 68	tš-ir			
5	孃	孃 孃	齒頭 53	ts-ir			

6	𪛗	𪛗	喉 独	ʔy-ir	𪛗	喉 37	ʔy-ir
7	𪛗	𪛗	流風 11	ɛz-ir	𪛗	流風 11	ɛz-ir
8	𪛗	𪛗	流風 4	r-ir	𪛗	流風 4	r-ir
9	𪛗	𪛗	流風 4	r-ir			
					𪛗	輕唇 独	w-ir
10	𪛗	𪛗	牙 96	k-wir 平	𪛗	牙 96	k-wir

以上の反切下字を整理すると、つぎの一類と一字にまとまる。

反切下字 I 𪛗 → 𪛗 → 𪛗(𪛗) → 𪛗 ⇔ 𪛗 -ir  
 II 𪛗 wir

反切下字 II の文字は上声72韻に属する文字であり，平声韻の反切下字として小韻10のみに使われ，平の注がつけられる。I 類の反切下字をもつ文字は，韻図の一段目と二段目に置かれる。韻図三段目には，反切下字 II の文字 (No. 623) とそれを反切下字とする kwir が記入される。一段目と二段目は，一段目 tšir kir 二段目 ʔir tsir のように相補的な配置を示す開口韻であり，三段目には，それに対する合口韻と合口韻扱いをされた wir が置かれたのである。

流風音の欄は rir と ɛzir の代表字が上下に並べられ，それらに合口韻形式が存在しなかったことを左側の丸印が指示している。

旧版『同音』の流風音小類4は，28字で一類をなすが，平声79韻・上声72韻のほかに，平去声の字が含まれていた。小韻9 rir [平去声] がそれにあたる。

この韻母と声母の連続関係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ir	—	w-	nd-	—	k-ŋ-	ts-	tš-	ʔy-	r-ɛz-
-ʔir	—	—	—	—	k-	—	—	—	—

No. 622

○	tšir	kir	○	○
ʔyir	tsir	○	○	○
○	○	kʷir	○	wir
		○ rir(上)		
		○ ɣzir		
		ʔyir (平声79韻代表字)		
		ʔyir (上声72韻代表字)		

韻図85を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。No. 624 の rir は平声韻である。tšir tsir wir は、No. 624 の正しい字形にしたがって与えている。

86. 韻図86 平声80韻・上声73韻

韻図86は、西夏語平声80韻・上声73韻の特定の音節形式を図示したものである。

𐰃	○	○	𐰃	○
𐰃	𐰃	𐰃	○	𐰃
○	𐰃	○	○	𐰃
○	○	𐰃	○	○
		○ 𐰃		
		○ 𐰃		
		𐰃		
		𐰃		

韻図86 平声80韻・上声73韻 No. 622

𐰃	○	𐰃	𐰃	𐰃
---	---	---	---	---

No. 623 (一段目部分)

No. 622 の韻図では (20a), 一段目は舌頭・舌上音の枠と喉音の枠に, 二段目は舌頭・舌上音を除いたすべての枠, 三段目は重唇・軽唇音と齒頭・正齒音の枠, 四段目は牙音の枠のみに, それぞれ西夏字が記入される。流風音の欄は右側上下に2字, 左側上下に丸印が二つある。No. 624 (53a) は No. 622 と一致するが, No. 623 の韻図 (86a) では, 一段目の重唇・軽唇音の枠と牙音の枠に, 丸印に替ってそれぞれ一字が記入されている。

𐰃 は mbar (上73) <枝> (重唇 110)

𐰃 は kar (平80?) <分ける> (牙 独)

であり, ここに書き入れられても誤りではない。

筆者は, 平声80韻・上声73韻の韻母として -ar を推定した。

『文海』平声各小韻の代表字および反切, そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式	上声韻小 韻代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
80. 1	緇	訖莠	重唇 独	m-ar	穉	重唇 独	m-ar
2	徭	雍穉	重唇 独	mb-ar	蔞	重唇110	mb-ar
3	莠	徭莠	舌頭 独	t-ar			
4	嬰	徭坮	舌頭 独	nd-ar			
5	龔	蔞坮	牙 独	kh-ar			
6	莠	穉莠	喉 49	?-ar	穉	喉 50	?-ar
7	駁	龔龔	喉 独	x-ar			
8	坮	穉龔	喉 独	?-ar			
9	徭	徭莠	流風 1	r-ar	徭	流風 1	r-ar
10	穉	雍莠	流風103	ʁz-ar			
11	嬰	雍訖	流風102	ʁz-ar	坮	流風102	ʁz-ar
12	徭	龔蔞	輕唇 39	w-ar	蔞	輕唇 24	w-ar
13	龔	龔蔞	牙 68	k- <sup>w</sup> ar			
14	蔞	龔龔	齒頭 独	ts- <sup>w</sup> ar	龔	喉 独	?war
15	龔	龔蔞	喉 77	x- <sup>w</sup> ar			
16	蔞	徭蔞	重唇 独	p-ar <sub>2</sub>			
17	徭	雍龔	重唇 独	mb-ar <sub>2</sub>			
18	龔	龔徭	齒頭 97	ts-ar <sub>2</sub>			
19	蔞	穉徭 龔	牙 独	k- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub> 合			

上記の反切下字を整理すると、つぎの四類になる。

反切下字	I a	訖(徭) → 莠 ⇔ 穉	-ar
		↑ 穉	
	b	坮 ⇔ 龔	-ar

II	羗 ⇌ 羗(縦)	- <sup>w</sup> ar
III	羗 ⇌ 羗	-ar <sub>2</sub>
IV	羗 ( ? ) (平17) ?	-ar

反切下字 I 類 a b の文字は韻図の一段目に配置され、開口韻 -ar を代表した。II 類の文字は、韻図二段目にあつて合口韻 -<sup>w</sup>ar をあらわす。反切下字 III 類は韻図三段目に置かれ、I・II 類と対立する -ar<sub>2</sub> を代表した。IV 類の文字は平声17韻に属する (mah)。韻図の四段目にある文字は、牙音類 (k-) に限られるが、『文海』の小韻19に該当する。その反切下字は III 類+合によって指示されているから、-<sup>w</sup>ar<sub>2</sub> であったと考えられる。

開口韻と合口韻の対立は、小韻7 xar : 小韻15 x<sup>w</sup>ar の形で最も明瞭にあらわれ、韻図 (No. 623) では小韻13 k<sup>w</sup>ar に対する kar を牙音の欄一段目に記入している。18) tsar<sub>2</sub> : 14) ts<sup>w</sup>ar もやはり同じ開合の關係を示し、小韻6 ?ar に対する合口韻として韻図の喉音の欄二段目に 羗 ?<sup>w</sup>ar が置かれる。この文字は上声73韻であろう。小韻6 ?ar と小韻8 ?ar は、声調の相違を反映したもので、小韻6 が平去声であったと考えられる。

小韻 6 羗 ?ar (平去声)

小韻 8 羗 ?ar (平声) : 羗 ?ar (上声)

あとのセットがこの韻類の代表字として使われる。同様に流風音類に属する Bzar に、小韻10と11がある。小韻10が平去声であつたらう。

新刊『同音』小類 119 羗, 羗 Bzar (平去)

小類 120 羗, 羗 Bzar (平) : 羗 Bzar (上)

これらの韻母と声母の連続關係をつぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ar	m-mb-	w-	t-nd-	—	k-kh-	—	—	?-x-	r-Bz-
- <sup>w</sup> ar	—	—	—	—	k-	ts-	—	?-x-	—
-ar <sub>2</sub>	p-mb-	—	—	—	—	ts-	—	—	—
- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>	—	—	—	—	k-	—	—	—	—

No. 622

ʔar	○	(kar)	tar	○
ʔwar	tsʷar	kʷar	○	war
○	tsar <sub>2</sub>	○	○	par <sub>2</sub>
○	○	kʷar <sub>2</sub>	○	○
		○ rar		
		○ ʔzar		
		ʔar (平声80韻代表字)		
		ʔar (上声73韻代表字)		

韻図86を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

牙音の一段目 (kar) は, No. 623による。

87. 韻図87 平声81韻

韻図87は、西夏語平声81韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図 (20b) では、重唇・輕唇音の一段目に一字置かれるのみで、ほかは丸印

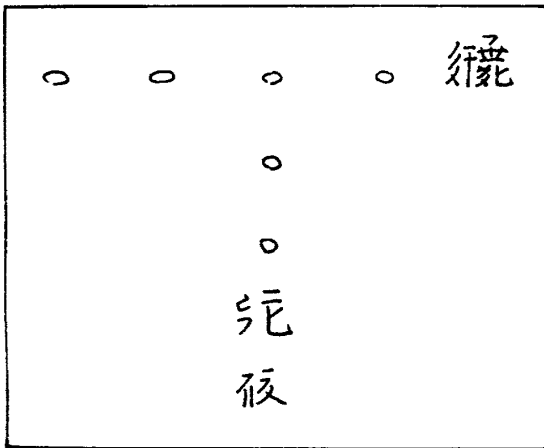
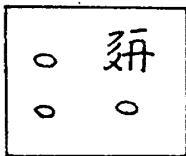


図87 平声81韻 No. 622

が合計六つある。No. 624 (53b) はこの形と一致するが、No. 623 の韻図 (87b) では、流風音の欄の上段右側に一字、上段左側と下段左右に丸印がある。この文字は lɪh (平14) <退く>で、この韻類と関係があるようには見えない。なお重唇・輕唇音に書かれた字形は、『文海』に登録された形とはやや異っている。あとで掲げる phiar に対して、piar を表記するため作られた字形であろう。

No. 623



(部分 流風音)

この韻類には平声韻のみで上声韻はない。筆者はその韻母として -iar を推定した。

『文海』の各小韻代表字と反切をあげる。

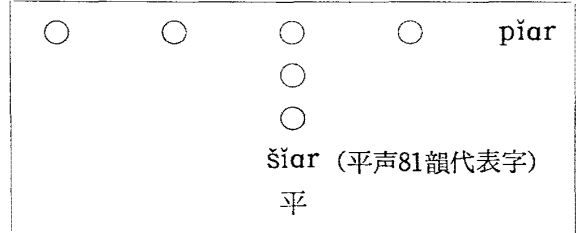
	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
81. 1	穽	穽穽	重唇 独	ph-iar
2	穽	穽穽	重唇 独	m-iar
3	穽	穽穽	牙110	kh-iar
4	穽	穽穽	正齒 55	š-iar

上記の反切下字は一類に系聯する。

反切下字      𪛗 → 𪛘 ⇄ 𪛙      -iar

上にあげた小韻からわかるように、この韻母は極めて少数の声母に限って連続した。許される形式は *phīar*, *mīar*, *khīar*, *šīar* と韻図にある *pīar* の五音節しかなかった。その中、無声無気音にあたる *pīar* のみを韻図に登録したのである。

韻図87を筆者の再構成形式をもって書き改めると、右のようになる。



88. 韻図88 平声82韻・上声74韻

韻図88は、西夏語平声82韻・上声74韻の特定の音節形式を図示したものである。

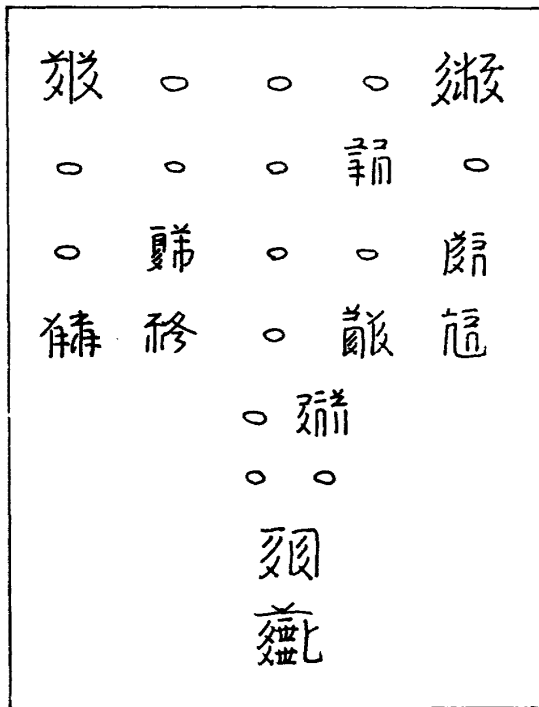


図88 平声82韻・上声74韻 No. 622

No. 622 の韻図 (21a) では、一段目は重唇・軽唇音と喉音の枠、二段目は舌頭・舌上音の枠、三段目は重唇・軽唇音と齒頭・正齒音の枠、四段目は牙音を除くすべての枠に、それぞれ西夏字が入っている。流風音は、上段右側に一字あるのみで、上段左側と下段左右に丸印が置かれる。No. 624 (54a) の韻図は、枠組は No. 622 と一致するが、書き誤りと思えるものを除いて、若干の文字が違っている。一段目の重唇・軽唇音の枠には𪛗 (No. 622 の文字と共に所属不詳) が、三段目の齒頭・正齒音の枠には𪛘 (所属不詳) がそれぞれ

れ記入されている。筆者は平声82韻・上声74韻の韻母として -ar を推定した。

『文海』平声各小韻の代表字と反切をあげる。相応する上声韻字は不明である。



	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式
82. 1	𪗇	𪗇𪗇	輕唇 34	w-ar
2	𪗈	𪗈𪗈	重唇112	ph-ar
3	𪗉	𪗉𪗉	重唇 独	m-ar
4	𪗊	𪗊𪗊	正齒 49	š-ar
5	𪗋	𪗋𪗋	正齒 49	š-ar
6	𪗌	𪗌𪗌	牙 55	kh-ar
7	𪗍	𪗍𪗍	齒頭 独	tsh-ar
8	𪗎	𪗎𪗎	喉 32	ʔy-ar
9	𪗏	𪗏𪗏	流風 74	r-ar
10	𪗐	𪗐𪗐	流風150	r-ar
11	𪗑	𪗑𪗑	舌頭 独	t- <sup>w</sup> ar
12	𪗒	𪗒𪗒	舌頭119	nd- <sup>w</sup> ar
13	𪗓	𪗓𪗓	牙150	kh-ar
14	𪗔	𪗔𪗔	牙 独	ŋ-ar
15	𪗕	𪗕𪗕	舌頭157	t- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>
16	𪗖	𪗖𪗖	舌頭 55	nd- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>
17	𪗗	𪗗𪗗	齒頭 独	ts- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>
18	𪗘	𪗘𪗘	喉 独	ʔ- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>

上記の反切下字を整理すると、つぎの三類にまとまる。

反切下字	I a	𪗇(𪗈) → 𪗈 ⇔ 𪗈	
	b	𪗉 → 𪗊 = 𪗊 ⇔ 𪗊	-ar
	II	𪗑 ⇔ 𪗑(𪗒)	- <sup>w</sup> ar

Ⅲ a 𪛗 ⇌ 𪛘(𪛙)

b 𪛚 ⇌ 𪛛 -<sup>w</sup>ar<sub>2</sub>

このⅠ類を反切下字とする文字は，韻図一段目と三段目に置かれ，Ⅱ類の文字は舌頭音に限って使われ，韻図二段目に配される。そして韻図の四段目にある文字は反切下字Ⅲ類をもっている。

Ⅰ類には開口韻 -ar，Ⅱ類にはその合口韻 -<sup>w</sup>ar，Ⅲ類にはそれらに対立する -<sup>w</sup>ar<sub>2</sub> を推定したい。韻図三段目の文字は，軽唇音 war と正歯音 tšar<sub>2</sub> であった。前者は本来一段目あるいは二段目に置かれるべきものである。後者は正歯音小類84（新版『同音』小類120 四字一類）に属するが，所属韻がわからなかった。いまこの韻図の位置から上声74韻 -ar<sub>2</sub> であったと推定できる。<sup>[補注2]</sup>

新版『同音』	120	𪛚	𪛛	𪛜	𪛝	tšar <sub>2</sub>
旧版	84					
		罪	すだま	誠		

小韻4と小韻5は共に tšar で，反切上字を共有し，下字も系聯する（Ⅰb）。小韻6と13も同じように反切上字は系聯し，下字はⅠ類に属する。小韻9と10も同様の関係にあった。

これらは声調の弁別を反映し，一方が平去声の音節を代表したと考えたい。

小韻4 šar [平去声?]	小韻6 khar [平声]	小韻9 rar [平声]
5 šar [平声]	13 khar [平去声?]	10 rar [平去声?]

なお 𪛗 (軽唇音独字) は上声74韻 war<sub>2</sub> であったろう。

『文海雑類』には上声74韻の文字がある。𪛛 [反切] 𪛜 𪛝 𪛞 <sup>n</sup>dzar (上74) [<sup>n</sup>dz-ar (平82) の上] <滅す>

これらの韻母と声母の連続関係を表示すると，かなりすき間の多い形態であったことがわかる。

韻母 \ 声母	重唇	軽唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ar	ph-m-	w-	—	—	kh-ŋ-	tsh- <sup>n</sup> dz-	š-	?y-	r-
- <sup>w</sup> ar	—	—	t-nd-	—	—	—	—	—	—
-ar <sub>2</sub>	—	—	—	—	—	ts-	tš-	—	—
- <sup>w</sup> ar <sub>2</sub>	—	—	t-nd-	—	—	ts-	—	?-	—

韻図88を筆者の再構成形式によって書き改めると、右のようになる。

No. 622

89. 韻図89 平声83韻

韻図89は、西夏語平声83韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (21b) では、一段目のみが使われて、舌頭・舌上音と牙音の枠に一字ずつ記され、他には丸印が置かれる。No. 624 (58b 上段) もこれと同じである。筆者は、平声83韻の韻母を  $-ar_2$  としたが、いま改めて  $-ar_2$  としておく。これには明瞭な対音根拠がないが、あとであげるように小韻3が平声23韻 (-a) の文字を反切下字としているからである。(- $ar_2$  : -a)

この韻類は平声韻のみで相応する上声韻を欠いている。『文海』平声各小韻代表字と反切をあげる。

ʔyar	○	○	○	ʔ
○	○	○	tʷar	○
○	tšar <sub>2</sub>	○	○	war
ʔʷar <sub>2</sub>	tsʷar <sub>2</sub>	○	tʷar <sub>2</sub>	war <sub>2</sub>
		○	rar	
		○	○	
			ʔyar (平声82韻代表字)	
			ʔyar (上声74韻代表字)	

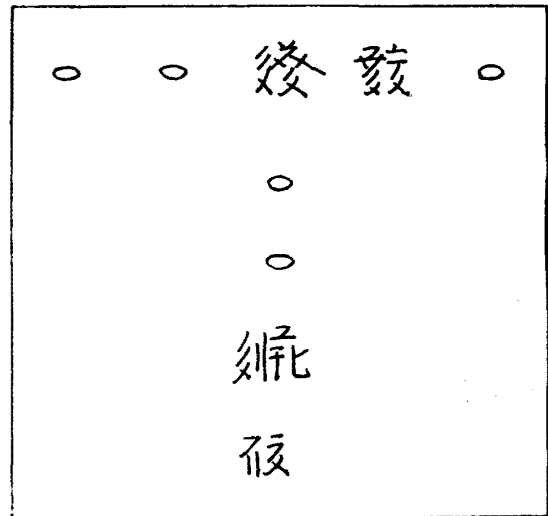


図89 平声83韻 No. 622

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
83. 1	𐵑	𐵑𐵒	重唇104	m- $ar_2$
2	𐵒	𐵑𐵑	舌頭 独	t- $ar_2$
3	𐵓	𐵑𐵓	舌頭147	th- $ar_2$
4	𐵔	𐵑𐵔	舌頭147	th- $ar_2$
5	𐵕	𐵑𐵕	牙 独	k- $ar_2$
6	𐵖	𐵑𐵖	牙 独	ŋ- $ar_2$
7	𐵗	𐵑𐵗	齒頭 45	s- $ar_2$

上記の反切下字を整理すると、つぎの一類と一字にまとまる。

反切下字 I 𪗇 → 𪗈(𪗉) ⇔ 𪗊 -ar<sub>2</sub>

II 𪗋 (平23=-a)

I 類を反切下字とする文字が韻図の一段目に配置されていて問題はない。  
小韻3と4で舌頭音147類 thar<sub>2</sub> を分割するのは、やはり声調の弁別を反映したのであろう。

旧版『同音』 147	𪗊	𪗈	𪗉	(三字一類)
		└──────────┘		
『文海』	小韻 4	小韻 3		
		└──────────┘		
新版『同音』	独字 〔平去声〕	小類 154 〔平声〕		

『文海』小韻5は、『同音』の組織とつぎのような関係を示している。

旧版『同音』	𪗌	𪗍	𪗎	
	眼	秤	量る	
		└──────────┘		
	独字	小類 176 (二字一類)		
	└──────────┘			
『文海』	小韻 5			
	└──────────┘			
新版『同音』	小類 186 (三字一類)			

No. 622	○	○	kar <sub>2</sub>	tar <sub>2</sub>	○
			○		
			○		
			sar <sub>2</sub> (平声83韻代表字)		
			平		

この韻母 -ar<sub>2</sub> は、m- t- th- k- ŋ- s- としか結合しない。韻図89を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

### 90. 韻図90 上声75韻

韻図90は、西夏語上声75韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(22a)では一段目のみを使い、牙音、齒頭・正齒音と喉音の枠に文字が入っている。No. 624(58b下段)はNo. 622と一致し、No. 623の韻図(88a)には重唇・輕唇音の丸印の左上に 𪗏 の書き込みがある。この文字は平声80韻

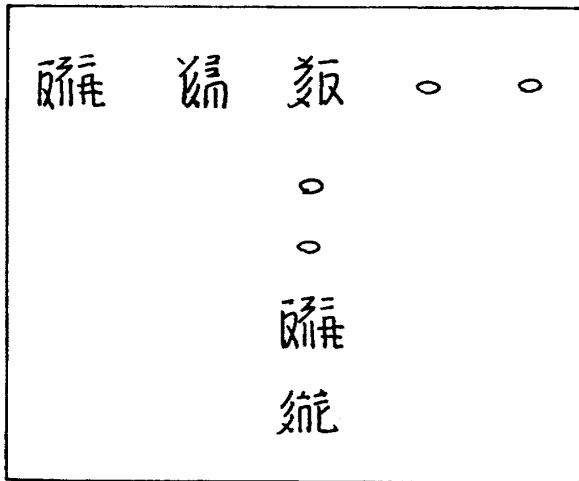


図90 上声75韻 No. 622

	代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
1	𪛙	牙 独	k-iar
2	𪛚	牙 独	ŋ-iar(?)
3	𪛘	正齒 独	tš-iar
4	𪛛	?	



No. 623 (部分)

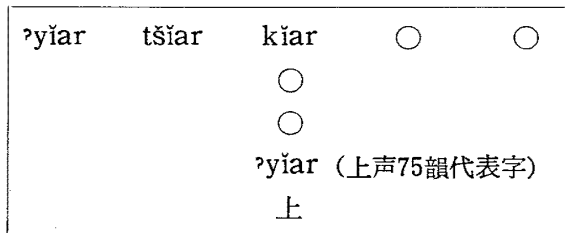
war である。

筆者は上声 75 韻の韻母を -iar と推定した。それに相応する平声韻類はない。つぎにその代表字と推定形式をあげる。

	代表字	『同音』 所属小類	再構成 形式
5	𪛛	舌頭 独	nd-iar
6	𪛜	喉 38	?y-iar
7	𪛝	喉 76	?y-iar

小韻 6 と小韻 7 の分割はおそらく声調の相違を背景としてなされたのであろう。

この韻母は上に見たように、k- ŋ-(?-) tš- nd- ?y- と極めて限定された声母としか連続しなかった。その中、



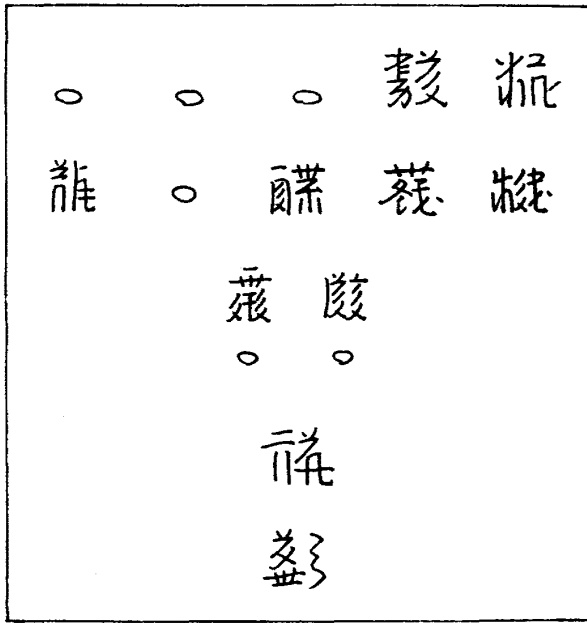
No. 622

無声無気音 kiar, tšiar, ʔyiar の三形式が韻図に登録されたのである。韻図90を筆者の再構成形式で書き改めると、左のようになる。

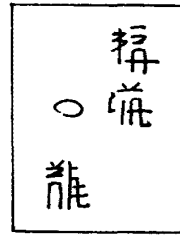
### 91. 韻図91 平声84韻・上声76韻

韻図91は、西夏語平声84韻・上声76韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (22b) では、一段目は重唇・軽唇音の枠と舌頭・舌上音の枠に、二段目は、齒頭・正齒音を除くすべての枠に西夏字が記入される。流風音の欄は上方左右に文字があり、下方左右には丸印が置かれる。

No. 623 の韻図 (88b) には、一段目喉音の枠の丸印の右側に注字二字が書き



韻図91 平声84韻・上声76韻 No. 622



No. 623 (喉音の注字)

込まれている。

能齋  $?ier$  (平78)  $kuh$  (平27)  
 $\rightarrow ?uh$  ( $?uh$  (平27) と  $?ur$   
 (平84) の関係を示している)

筆者は平声84韻・上声76韻の韻母として  $-ur$  を推定した。

『文海』平声韻各小韻代表字と反切，そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
84. 1	能	該龔	重唇 7	p-ur			
2	齋	齋龔	重唇 独	ph-ur			
3	焜	能龔	重唇 17	m-ur			
4	能	能龔	重唇 独	m-ur	能	重唇 11	m-ur
5	齋	齋龔	舌頭 独	t-ur			
					齋	舌頭117	n-ur
6	焜	能龔	牙145	$\eta^w$ -ur	能	牙 独	$\eta^w$ -ur
7	能	齋龔	喉 独	x-ur	齋	喉 独	x-ur
8	齋	能龔	流風 85	r-ur	齋	流風 85	r-ur
					齋	流風 72	$\beta z$ -ur
9	能	能龔	舌頭 独	n-ur			
10	齋	能龔	輕唇32・40	w-ur	能	輕唇 32	w-ur
11	齋	齋龔	舌頭 独	t-ur			

12	豎	猶	齋	舌頭178	th-ur		
13	豎	豎	齋	舌頭129	nd-ur	齋	舌頭129 nd-ur
14	齋	豎	齋	牙 10	k-ur		
15	齋	豎	齋	牙 12	ŋ <sup>w</sup> -ur		
16	齋	豎	齋	牙 12	ŋ <sup>w</sup> -ur	齋	牙 12 ŋ <sup>w</sup> -ur
17	齋	豎	齋	喉 独	ʔ-ur		
18	豎	豎	齋	喉 独	x-ur		
19	豎	豎	齋	齒頭 44	ts-ur		

齋 流風 39 t-ur

上記の反切下字を整理すると、つぎの一類と一字になる。

反切下字 I 齋 → 齋(齋) → 齋 ⇔ 齋 -ur

II 齋 (上76) -ur

II にあげた一字は、小韻6にのみ使われている。したがって、小韻6を除けば全部の小韻の反切下字が系聯するから、この韻類は一つの韻母 -ur のみを代表していたことになる。しかし、一方で韻図では上二段が使われている。反切から見ると、この韻図の二段目は本当の合口韻ではなく、一段目に重唇音 **pur**、二段目に軽唇音 **wur** を並べたが、舌頭音、牙音、喉音も同じように合口韻的な扱いを受けたのであろうと理解したい。韻図の上で対立する舌頭音一段目と二段目の文字は、反切上字は同じ文字で下字も系聯するから、その弁別は声調の相違を反映していて、おそらく一方は平去声であったものと考えられる。

小韻 5 韻図一段目 齋 齋 齋 tur

小韻 11 韻図二段目 齋 齋 齋 tur [平去声?]

同様に小韻15と16は、反切上字も下字も系聯し、同一の音形式を指示した。おそらく小韻15は平去声であった。

小韻 15 翫 𦉳 𦉴 ɲ<sup>w</sup>ur [平去声?]<第四の>

小韻 16 𦉵 𦉶 𦉷 ɲ<sup>w</sup>ur <皇>

それらに対して、小韻6が **ɬur** [上声] を反切下字とするのは **ɲ<sup>w</sup>ur** [ɲɣur] を伝える意図があったためと考えたい。

小韻 6 𦉸 𦉹 𦉺 ɲ<sup>w</sup>ur [ɲɣur] <山>

流風音の平声韻には **ɬur** 音節はなく、小韻7の **rur** に限られたが、上声韻には、**rur** と **ʁzur** と **ɬur** の三形式があった。

𦉸 rur (上) <影> 流風 85 漢字表音 □羅

𦉵 ʁzur (上) <露> 流風 72 □移則 grze

𦉺 ɬur (上) <經典> 流風 39

この中、**rur** と **ɬur** が韻図に登録されている。韻図の左側の文字は流風音39小類に入る。『文海雑類』には、この韻類に属するつぎの文字がある。

𦉻 𦉼 𦉽 žur (平84) <洗う> 流風 独

この韻母 **-ur** と声母の連続関係を表示する。

声母 韻母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ur	p-ph- m-	w-	t-n- th-nd-	—	k-ɲ <sup>w</sup> -	ts-	—	x-ʔ-	r-ʁz- ɬ-ʒ-

No. 622

○	○	○	tur	pur
ɲ <sup>w</sup> ur	○	kur	tur	wur
		ɬur rur		
		(上)		
		○ ○		
		xur (平声84韻代表字)		
		xur (上声76韻代表字)		

韻図91を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

流風音の音節 **ʁzur** (上) **žur** (平) はここには記入されていない。



92. 韻図92 平声85韻

韻図92は、西夏語平声85韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622

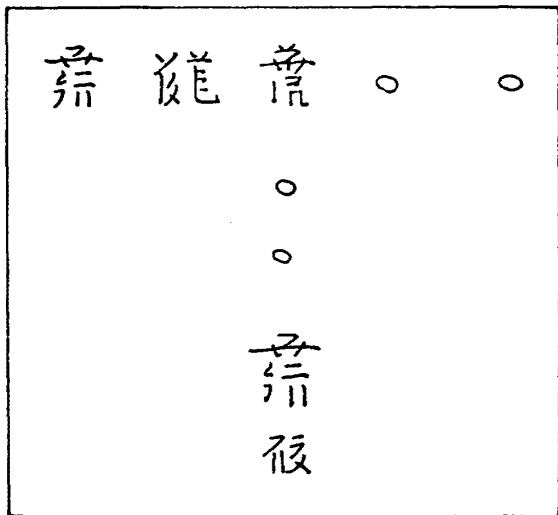


図92 平声85韻 No. 622

(23a) の韻図では、上一段のみが使われ、牙音、齒頭・正齒音と喉音の枠にそれぞれ一字、合計三字が並べられる。No. 624 の韻図 (56a 下段) は No. 622 と一致し、No. 623 (90a) には、流風音に二字書き込みがある。

𐰃  $bzi_2$  (平69) <宝>

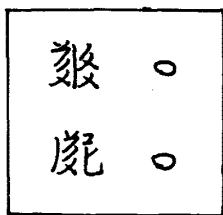
𐰄  $zi_2$  (平69) <左>

いずれも平声69韻の文字である。

筆者は平声85韻の韻母として、

-ər を推定した。この韻母は平声のみで、上声韻はなかった。

『文海』平声韻の各小韻代表字とその反切を、つぎにあげよう。



No. 623 (流風音)

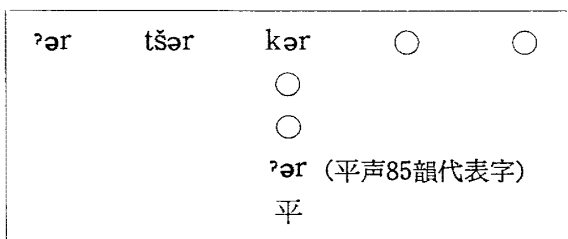
	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式
85. 1	𐰃	𐰃𐰃	重唇 独	mb-ər
2	𐰄	𐰃𐰃	牙175	k-ər
3	𐰅	𐰃𐰃	正齒 独	tš-ər
4	𐰆	𐰃𐰃	正齒 独	tšh-ər
5	𐰇	𐰃𐰃	正齒 独	š-ər
6	𐰈	𐰃𐰃	喉 独	?-ər

反切下字を整理すると、つぎの a b 二類になるが、両者は初頭音に関して補い合っていて、一つの韻母 -ər を代表した。a 類は重唇、牙、喉音の音節に、b 類は正齒音の音節に使われた。

反切下字 I a 𦉑 ⇌ 𦉒(𦉑)

b 𦉑 ⇌ 𦉒 -ər

この韻母は上に列挙したように, mb- k- tš- tšh- š- ʔ- の声母とのみ連続



No. 622

した。その中, 無声無気音の kər, tšər, ʔər の三形式が 韻図92に登録されたのである。韻図92を筆者の再構成形をもって書き改めると, 左のようになる。

93. 韻図93 平声86韻・上声77韻

韻図93は, 西夏語平声86韻・上声77韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (23b) では, 一段目は舌頭・舌上音の枠を除く全部の枠, 二段目は齒頭・正齒音と喉音の枠, 三段目は舌頭・舌上音と喉音の枠, 四段目は齒頭・正齒音の枠にそれぞれ西夏字が置かれる。流風音は五段目右側上下に

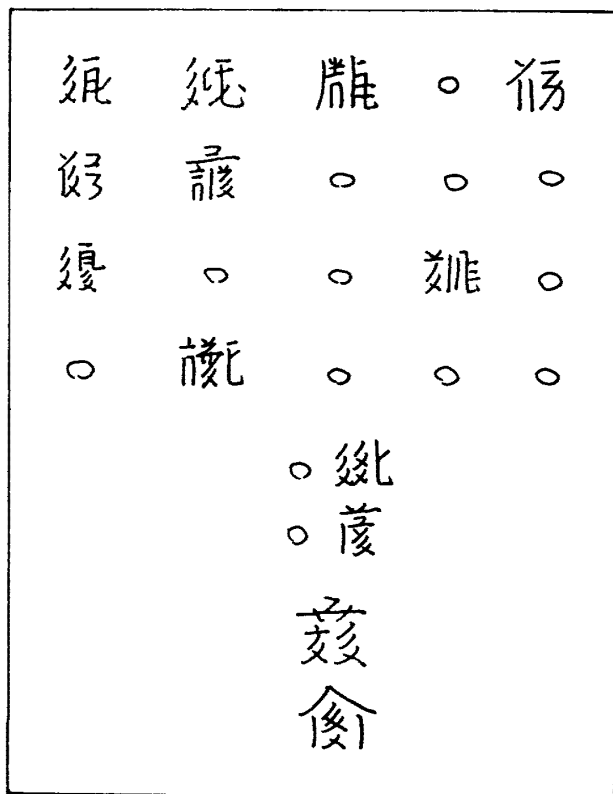
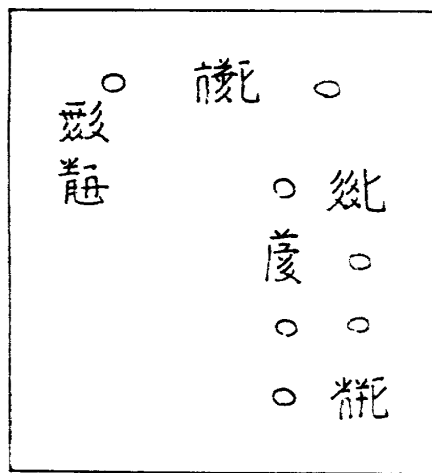


図93 平声86韻・上声77韻 No. 622

二字, 左側上下は丸印が記入されている。No. 624 の韻図 (56b) は No. 622 と一致するが, No. 623 (90b) は, 喉音の欄四段目にある丸印の左側に二字の書き込み (音



No. 623 (喉音の書き込みと流風音)

注) があるのと流風音の欄が相違している。

喉音の音注: 𪛗 ?ih (平29) <伯父> + 𪛗 khir (平92) <盗人> → ?ir

筆者は平声86韻・上声77韻の韻母として, -ir を推定した。

『文海』平声韻各小韻代表字とその反切, およびそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
86. 1	𪛗	訖𪛗	重唇 77	m-ir			
2	𪛗	𪛗𪛗	重唇 独	mb-ir	𪛗	重唇 独	mb-ir
3	𪛗	訖𪛗	牙 独	k-ir			
4	𪛗	訖𪛗	正齒 独	tš-ir			
5	𪛗	𪛗𪛗	正齒 独	š-ir			
6	𪛗	訖𪛗	喉 95	?y-ir	𪛗	喉 2	?y-ir
7	𪛗	𪛗𪛗	重唇 独	p-ir			
8	𪛗	𪛗𪛗	牙 独	ŋ- <sup>w</sup> ir	𪛗	牙 独	ŋ- <sup>w</sup> ir
9	𪛗	𪛗𪛗	正齒106	tš- <sup>w</sup> ir	𪛗	正齒 独	tš- <sup>w</sup> ir
10	𪛗	𪛗𪛗	?	š- <sup>w</sup> ir			
11	𪛗	𪛗𪛗	喉 68	?- <sup>w</sup> ir	𪛗	喉 68	?- <sup>w</sup> ir
12	𪛗	𪛗𪛗	流風 独	ž- <sup>w</sup> ir			
13	𪛗	𪛗𪛗	舌頭144	t-ir <sub>2</sub>	𪛗	舌頭 81	nd-ir <sub>2</sub>
14	𪛗	𪛗𪛗	齒頭 独	tsh-ir <sub>2</sub>			
15	𪛗	𪛗𪛗	齒頭 独	s-ir <sub>2</sub>			
16	𪛗	𪛗𪛗	喉 6	?-ir <sub>(2)</sub>	𪛗	喉 独	?-ir <sub>(2)</sub>
17	𪛗	𪛗𪛗	牙 独	ŋg- <sup>w</sup> ir <sub>2</sub>	𪛗	牙124	ŋg- <sup>w</sup> ir <sub>2</sub>
18	𪛗	𪛗𪛗	流風148	r-ir <sub>2</sub>	𪛗	流風 21	r-ir <sub>2</sub>

					流風 84	r-ir <sub>2</sub>
19	𪛗	𪛘	𪛙	流風107	BZ-ir <sub>2</sub>	𪛚
						流風 独
20	𪛛	𪛜	𪛝	𪛞	齒頭 独	ts- <sup>w</sup> ir <sub>2</sub> 上

上記の反切下字を整理すると、つぎの四類になる。

反切下字	I	𪛗	→	𪛘	⇔	𪛙	-ir
	II	𪛚	⇔	𪛛			- <sup>w</sup> ir
	III	𪛜	⇔	𪛝			-ir <sub>2</sub>
	IV	𪛞	→	𪛟			- <sup>w</sup> ir <sub>2</sub>

反切下字の弁別は、韻図各段の配置と対応し、一段目は反切下字Ⅰ類（小韻1から7と小韻16）に、二段目は反切下字Ⅱ類（小韻8から13）に、三段目は反切下字Ⅲ類（小韻14と15、小韻18と19）に、四段目は反切下字Ⅳ類（小韻17と20）にそれぞれ対照される。（小韻2の反切下字𪛗は𪛘の誤りであろう。またⅣ類の𪛟は上声76韻 η<sup>w</sup>-ur である。）この韻図の配置は、Ⅰ類が -ir、Ⅱ類が -<sup>w</sup>ir、Ⅲ類が -ir<sub>2</sub>、Ⅳ類が -<sup>w</sup>ir<sub>2</sub> であったことを明瞭に示している。小韻16は韻図によると、<sup>?</sup>-ir<sub>2</sub> の筈である。

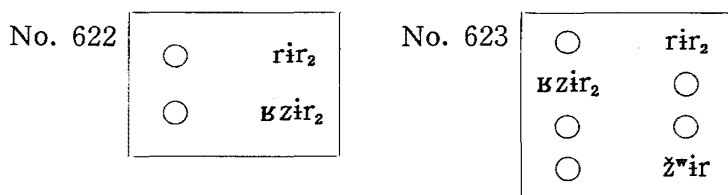
つぎに流風音の形式を整理しておきたい。『文海』は平声韻を三形式、上声韻を別の三形式に分ける。その中、上声韻の𪛞 rir<sub>2</sub> と 𪛟 rir<sub>2</sub> を分けるのは旧版『同音』の弁別法と合致するが、新版『同音』では両者が合一して一類となる。

旧版『同音』21	𪛞, 𪛟, 𪛜, 𪛝, 𪛞	84	𪛛, 𪛜, 𪛝, 𪛞
	五字一類		四字一類
新版『同音』22	九字一類		

したがって、新版『同音』の組織によると、平声を三形式 rir<sub>2</sub> Bzir<sub>2</sub> ž<sup>w</sup>ir、上声を二形式 rir<sub>2</sub> と Bzir<sub>2</sub> に弁別したことになる。

No. 622 の韻図では、平声の二形式のみが登録され、No. 623 では三形式が

あげられる。具体形式でその配置を示すと、下のようになる。



平声86韻

上声77韻

𪛗	rir <sub>2</sub>	骨	𪛗	rir <sub>2</sub>	向かう
𪛘	ʁzir <sub>2</sub>	契約	𪛘	ʁzir <sub>2</sub>	天の河
𪛙	ʒvir	糯粟	_____		

このほかにも流風音平声86韻の形式があって、『文海雑類』に記録されている。

𪛚	𪛚	𪛚	zir	(平86)	重い	流風 独
𪛛	𪛛	𪛛	zir 平	(平86)	癒える	流風 111

『文海雑類』には、そのほかつぎの二字がある。

𪛜	𪛜	𪛜	ʰdzir <sub>2</sub>	(平80)	速疾	齒頭
𪛝	𪛝	𪛝	ñir	(平86)	隱遁	正齒 独

これらの韻母と声母の連続関係を、つぎに表示する。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ir	p-m- mb-	—	—	—	k-ŋ-	—	tš-š- ñ-	ʔy-	ž-
-vir	—	—	—	—	ŋ-	—	tš-š-	ʔ-	ž-
-ir <sub>2</sub>	—	—	t-nd-	—	—	tsh-s- ʰdz-	—	ʔ-	r-ʁz-
-vir <sub>2</sub>	—	—	—	—	ŋg-	ts-	—	—	—

韻図39を筆者の再構成形式をもって書き改めると、右のようになる。

94. 韻図94 平声87韻・上声78韻

韻図94は、西夏語平声87韻・上声78韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(24a)では上二段が使われ、一段目は、舌頭・舌上音と齒頭・正歯音の枠に、二段目は舌頭・舌上音の枠にのみ西夏字が置かれている。流風音の欄には、右側上下に二字、左側上下に丸印二つを記入する。No. 622では上声韻代表字を誤って上と書いているが、この韻類は平声韻と上声韻が揃っている。いま他の韻図から改めた。No. 624(57a 上段)と No. 623(91b)の文字の配置は No. 622と一致するが、後者には重唇・軽唇音の欄と喉音の欄に書き込み(音注)がある。

ʔir	tʂir	kir	○	pir
ʔʷir	tʂʷir	○	○	○
ʔir <sub>2</sub>	○	○	tir <sub>2</sub>	○
○	tʂʷir <sub>2</sub>	○	○	○
			○ rir <sub>2</sub>	
			○ ʂzir <sub>2</sub>	
			ʔir (平声86韻代表字)	
			ʔir (上声77韻代表字)	

No. 622

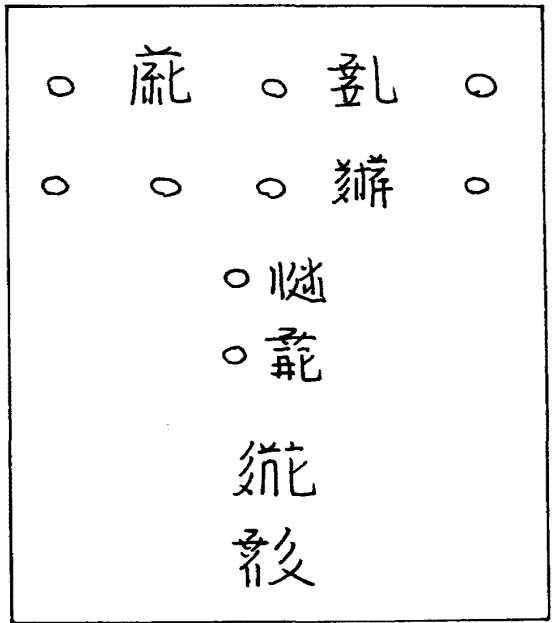


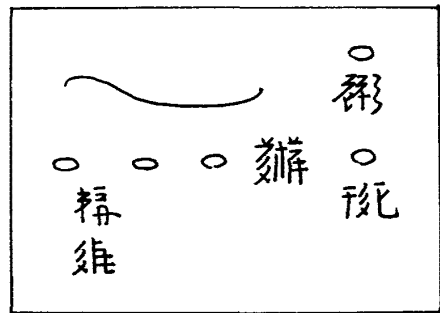
図94 平声87韻・上声78韻 No. 622

𐵓 pi (平8)      𐵕 wi (上7)

𐵓𐵕 ʔiər (平78)      kəw (平43) → ʔəw

筆者は、平声87韻・上声78韻の韻母として、-iərを推定した。

『文海』平声各小韻代表字と反切、そしてそれらに相應すると考え得る上声韻形式をあげる。



No. 623 (書き込まれた文字)

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
87. 1	𐵓	𐵕	舌頭 独	t-iər			

2	𪛗	𪛗	舌頭 独	nd- <i>iər</i>		
3	𪛘	𪛘	牙 34	ŋ <sup>w</sup> - <i>iər</i>	𪛘	牙 34    ŋ <sup>w</sup> - <i>iər</i>
4	𪛙	𪛙	齒頭 64	ts- <i>iər</i>	𪛙	齒頭 65    ts- <i>iər</i>
5	𪛚	𪛚	流風151	r- <i>iər</i>	𪛚	流風128    r- <i>iər</i>
6	𪛛	𪛛	流風134	ʁz- <i>iər</i>	𪛛	流風133    ʁz- <i>iər</i>
7	𪛜	𪛜	舌頭107	nd-r- <i>iər</i>	𪛜	舌頭 65    nd-r- <i>iər</i>

上記の反切下字はすべて系聯して、一類をなしている。

反切下字 I 𪛛(𪛛) → 𪛛 ⇔ 𪛛(𪛛) = 𪛛 -*iər*

韻図二段目の文字は、『文海』『同音』にはないが、これは小韻7の文字 𪛛 から派生した字形である。『文海』で小韻7が流風音のあとに置かれて別扱いされ、しかも、流風音の *rīər* を反切下字とするのは、おそらく *ndrīər* を表示するためであったと考えられる。*ndrīər* に対立する無声無気音 *triər* を表記するため、*ndrīər* に手編をつけて作ったのが韻図二段目の文字である。したがって、韻図の舌頭・舌上音の欄は、一段 *tīər* 二段 *triər* の対立を示している。

この韻母は、t-, nd-, ŋ<sup>w</sup>-, ts-, r-, ʁz-, tr-, ndr- の限られた声母とのみ連

No. 622

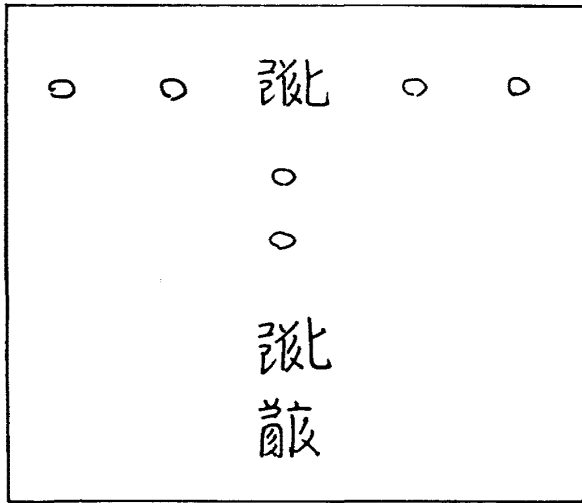
○	tsiər	○	tīər	○
○	○	○	triər	○
		○	rīər	
		○	ʁziər	
			ŋiər (平声87韻代表字)	
			ŋiər (上声78韻代表字)	

続した。

韻図94を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。韻類代表字は No. 623 によっている。

95. 韻図95 平声88韻・上声79韻

韻図95は、西夏語平声88韻・上声79韻の音節形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (24b) では、上一段のみが使われ、牙音の枠に西夏字が記入されるほか、韻類代表字を除いて他に文字の記入はない。No. 624 の韻図 (57b)



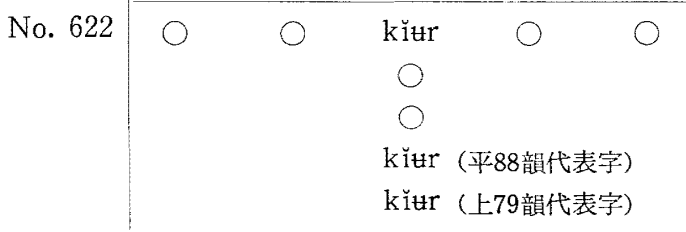
韻図95 平声88韻・上声79韻 No. 622

も同じ形をとるが、No. 623 (91b) は上段右半分が欠けていて、牙音のところはない。

筆者はこの韻類の韻母を  $-iur$  と推定した。所属字は僅かであり、しかも牙音類に限定され、『文海』では平声韻は小韻一つ（四字）、上声韻は小韻二つ（二字と五字）のみであって、合計十一字がそこに所属する。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
88.					𪛘	牙144	$k-iur$
1	𪛗	𪛘	牙 47	$k-iur$	𪛗	牙 47	$k-iur$

反切下字は、上声40韻に属し  $?iaw$  であったから、この小韻は反切を忠実に読めば  $kīaw$  を代表したことになる。 $kīaw \rightarrow kiur$ . 上声韻の牙音144小類はその音形式を推定する明瞭な根拠に欠けるが、仮りに  $kiur$  としておく。この文



字は上声韻代表字として使われている<sup>(14)</sup>。

韻図95を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

96. 韻図96 平声89韻・上声80韻

韻図96は、西夏語平声89韻・上声80韻の音節形式を図示したものである。No. 623 の韻図 (25a) では、一段目の重唇・軽唇音と牙音と喉音の枠に、そして流風音上段に、西夏字が一字それぞれ記入されている。

筆者はこの韻母を  $-or$  と推定したが、いまそれを  $-or$  に改めたい。あとで

(14) 牙音小類144と小類47は、声調で対立していたのかも知れないが、韻図の言語ではほとんど差異がなかったのであろう。



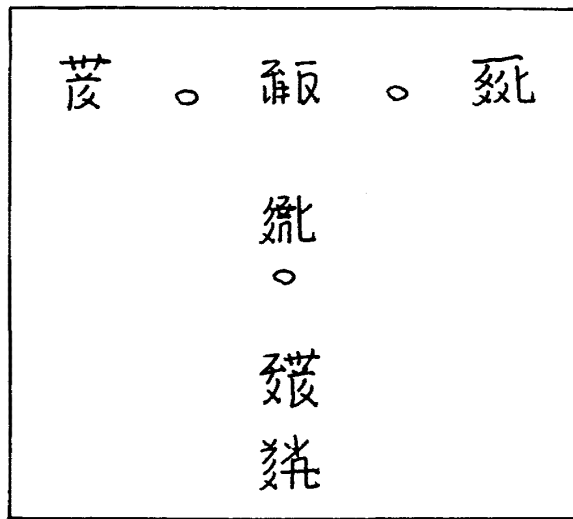


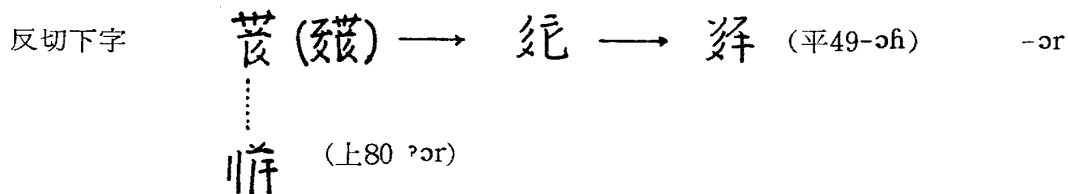
図96 平声89韻・上声80韻 No. 622

見るように、反切下字に平声49韻 (-ɔh) の文字が使われているからである。  
(-ɔr : -ɔh)

『文海』平声韻各小韻の代表字と反切、それらに相応すると考え得る上声韻形式をあげてみよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
89. 1	蕤	菴菴菴	輕唇 独	w-ɔr 平	蕤	輕唇 40	w-ɔr
2	韻	菴菴菴	輕唇 独	w-ɔr			
3	韻	菴菴菴	牙 独	k-ɔr			
4	蕤	菴菴菴	喉 12	?-ɔr	蕤	喉 13	?-ɔr
					蕤	流風 50	r-ɔr

反切下字は一類であるが、相互の間で系聯が完了しない。



小韻1と2は、反切上字が系聯し、共に wɔr であったと考えられる。しかし、ここで二つの小韻に分割されているのは、おそらく声調の相違を反映していて、後者が平去声であるのに対し、前者は平声であったのであろう。したが

って小韻2には平49韻 -ɔfi の文字を反切下字として採用し、前者には平の注をつけたのである。

『文海』によると、この韻類の音節は、wɔr, kɔr, ʔɔr, と rɔr の形式に限られるから、そのすべてが韻図に登録されていることになる。実際には『文海雑類』には、そのほかに tʃɔr が含まれている。

𠵹 𠵹 𠵹 tʃɔr (上80) 奴僕 正齒 独

No. 622

ʔɔr	○	kɔr	○	wɔr
		rɔr		
		○		
		ʔɔr (平声89韻代表字)		
		ʔɔr (上声80韻代表字)		

韻図96を筆者の再構成形式をもって書き改めると、左のようになる。

97. 韻図97 平声90韻・上声81韻

韻図97は、西夏語平声90韻・上声81韻の特定の音節形式を図示したものである。

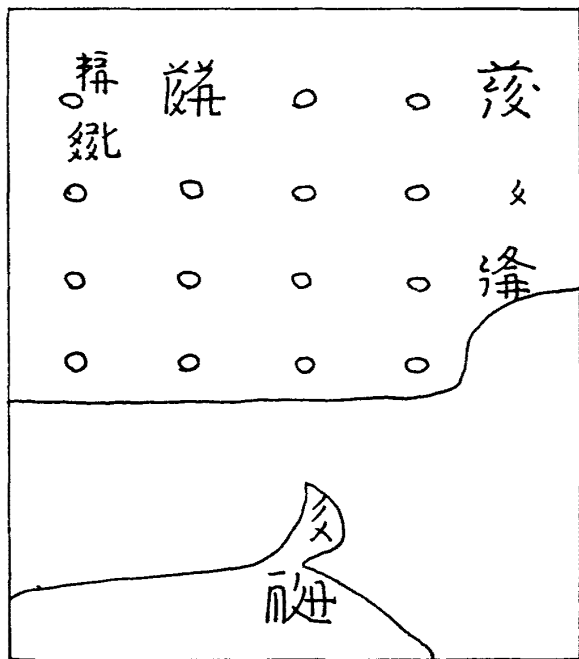


図97 平声90韻・上声81韻 No. 623

No. 623 の韻図では上四段が残り、下半分は韻類代表字のところを僅かに残して他は欠けている。残存部分の一段目は、重唇・軽唇音と齒頭・正齒音の枠、三段目は重唇・軽唇音の枠のみに西夏字があり、流風音の欄は欠けた部分に入っている。おそらく重唇・軽唇音の欄の二段目と四段目にも文字が書かれていたものと考えられる。筆者はこの韻類の韻母を -iɔr と推定した。No. 623 の韻図の喉音の一段目に置かれた丸印のところに注字が二字書かれる。

これは音注であって、あとの文字の字形は 𠵹 khïɔN (上48) が正しいのであろう。

ʔiɛr (平78)-khïɔN (上48)→ʔiɔN (ʔiɔr (上81) に ʔiɔN (上48) の注が与えられている。)

『文海』平声韻各小韻代表字と反切，そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
90.					𪛗	重唇 独	ph-ior
1	𪛗	𪛗 𪛗	重唇 独	m-ior	𪛗	重唇 独	m-ior
2	𪛗	𪛗 𪛗	正齒 51	tš-ior	𪛗	正齒 51	tš-ior
3	𪛗	𪛗 𪛗	輕唇 独	w-ior	𪛗	輕唇 独	w-ior
4	𪛗	𪛗 𪛗	重唇 独	m-ior <sub>2</sub>			
5	𪛗	𪛗 𪛗	輕唇 90	w-ior <sub>2</sub>			
6	𪛗	𪛗 𪛗	流風 独	ɸz-ior <sub>2</sub>			
7	𪛗	𪛗 𪛗	流風 71	r-ior <sub>2</sub>	𪛗	流風 71	r-ior <sub>2</sub>
8	𪛗	欠	流風 71	r-ior <sub>2</sub>			

上記の反切下字は，二類に分かれ，互に系聯しない。

反切下字	I	𪛗 ⇨ 𪛗	-ior
	II	𪛗 ⇨ 𪛗	-ior <sub>2</sub>

韻図97の構成からみると，反切下字 I 類は一段目に置かれ -ior を，II 類は三段目にあつて -ior<sub>2</sub> を代表した。この韻図はこれまでの原則を破り，重唇音・輕唇音の欄に mior, mior<sub>2</sub> を記入している。その二段目と四段目にはおそらく合口韻扱いをされた wior と wior<sub>2</sub> が置かれていたに違いない。

また，小韻7と8の分割は声調の弁別を反映したものと見たい。

これらの韻母と声母の連続関係は，かなり限定されていた。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
-ior	ph-m-	w-	—	—	—	—	tš-	—	—
-ior <sub>2</sub>	m-	w-	—	—	—	—	—	—	r-ɸz-

韻図97の欠けているところを補って、筆者の再構成形式をもって書き改めると、右のようになる。

98. 韻図98 平声91韻・上声82韻

韻図98は、西夏語平声91韻・上声82韻の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (1a) では、一段目の牙音，齒頭・正齒音と喉音の枠にそれぞれ一字と，流風音の枠に上下二字を記入する<sup>(15)</sup>。No. 624 の韻図は，No. 622 (58b) と一致するが，No. 623 (1a) には，そのほかに重唇・輕唇音と舌頭・舌上音の丸印の下に書き込みがある。前者は判読し難いが，後者は  $\text{ʔch}$  (平49) と読める。

筆者はこの韻母を  $-\text{or}$  と推定していたが，先に平声89韻・上声80韻を  $-\text{or}$  に替えたため，この韻母を  $-\text{or}$  としたい。この推定形は，この韻類で反切下字に上声47韻 ( $-\text{on}$ ) が使われている事実によって支持される。

『文海』には，つぎの六つの小韻が含まれる。

○	tšior	○	○	mior
○	○	○	○	(wior)
○	○	○	○	mior <sub>2</sub>
○	○	○	○	(wior <sub>2</sub> )
				(rīor <sub>2</sub> )
				(ʁziōr <sub>2</sub> )
				mior <sub>2</sub> (平声90韻代表字)
				mior <sub>2</sub> (上声81韻代表字)

No. 623

𐰇	𐰇	𐰇	○	○
		𐰇		
		𐰇		
		𐰇		

図98 平声91韻・上声82韻 No. 622

𐰇	○	○
	𐰇	𐰇

No. 623 (書き込み)

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
91. 1	𐰇	𐰇 𐰇	重唇113	mb-or	𐰇	重唇 独	mb-or
2	𐰇	𐰇 𐰇	牙106	k-or	𐰇	牙106	k-or
					𐰇	牙 14	ŋ-or

(15) No. 622 の韻図は，平声91韻以后各頁の左側に七字二行の韻類代表字が並べられている（本稿(上) p. 115参照）。

3	𦉑	𦉑	齒頭123	ts-or
4	𦉑	𦉑	喉 独	?-or
5	𦉑	𦉑	流風 59	ʒz-or
6	𦉑	𦉑	流風 独	r-or

上記の反切下字は、a b c 三類に分かれて相互に系聯しないが、いずれも -or の表記を意図したものと考えられる。

反切下字 Ia 𦉑 ⇌ 𦉑 (𦉑)

b 𦉑 → 𦉑 (上47-on) c 𦉑 (平57-io) -or

この韻母は極く限られた声母とのみ連続し、平声91韻・上声82韻には、mbor,

ʔor	tsor	kor	○	○
		ror		
		ʒzor		
		kor (平声91韻代表字)		
		kor (上声82韻代表字)		

kor, ŋor, tsor, ʔor, ʒzor, ror の音節しかなかった。その中、mbor と ŋor を除いた全部の音節が、韻図98に登録されている。韻図98を筆者の再構成形式によって書き改めると、左のようになる。

99. 100. 韻図99と100 上声83韻と84韻

韻図99と100は、それぞれ西夏語上声83韻と84韻の特定の音節形式を図示し

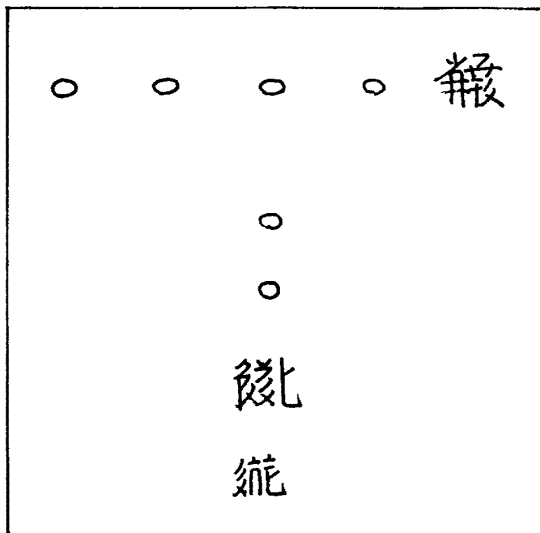


図99 上声83韻 No. 624

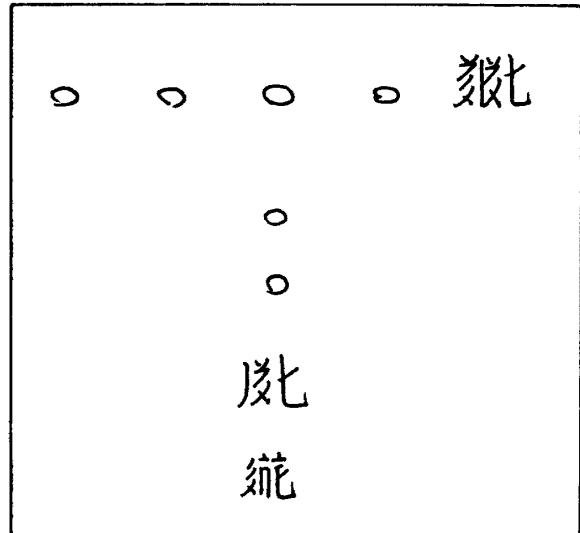


図100 上声84韻 No. 624

(16) 上声84韻の代表字として 𦉑 (上7si) が使われるのは誤りである。

たものである。

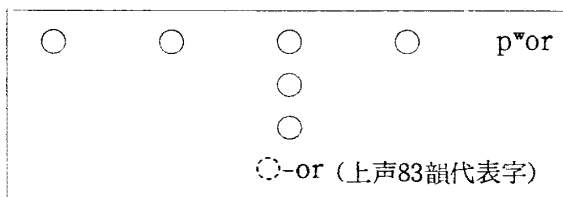
韻図 No. 624 (59a と 60b) では、同様に一段目の重唇・軽唇音の枠にのみ西夏字が置かれている。No. 623 の上声84韻の韻図 (71a) は韻類代表字を含む下半分が欠け、一段目の文字の下には **𐰃𐰆** の書き込みがある。これは一字のごとく見えるが、実は二文字 **𐰃𐰆** をつめて書いた形であって、上の字の音注らしく、 $pifi$  (平11)- $\square^w or \rightarrow p^w or$  と読める。筆者は上声83韻に  $-^w or$  (?), 84韻に  $-^w or$  (?) を、それぞれ推定した。いずれも明確な根拠を欠く。

またそれらの上声韻には相応する平声韻がない。いま判明している所属字をつぎにあげる。

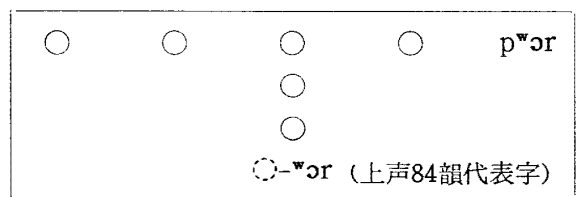
上 83.1	<b>𐰃</b>	重唇 独	$p^w or$ (?)	上 84.1	<b>𐰃</b>	重唇?	$p^w or$ (?)
2	<b>𐰃</b>	舌頭 独	$th^w or$ (?)	2	<b>𐰃</b>	重唇 独	$-^w or$ (?)
3	<b>𐰃</b>	舌頭 132	$n^w or$ (?)	3	<b>𐰃</b>	舌頭 154	$-^w or$ (?)
	( <b>𐰃𐰃</b> 舌頭132は四字一類)				( <b>𐰃𐰃</b> 舌頭154は三字一類)		

上声83韻の舌頭音132類は新版・旧版『同音』共に四字一類で、上にあげた三字のほかに **𐰃**  $n^w or$  (ちりめん) が加わる。

いずれも確かな根拠をもたないが、韻図99と100を、つぎのように書き改めておく。



韻図 99 (No. 624)



韻図 100 (No. 624)

### 101. 韻図101

韻図101は、西夏語平声92韻・上声85韻の特定の音節形式を図示したものである。

No. 622 の韻図 (25b) では、一段目は牙音と齒頭・正齒音の二つの枠に、二段目は齒頭・正齒音の枠に文字がある。流風音の欄には右側上下に文字が置かれ、

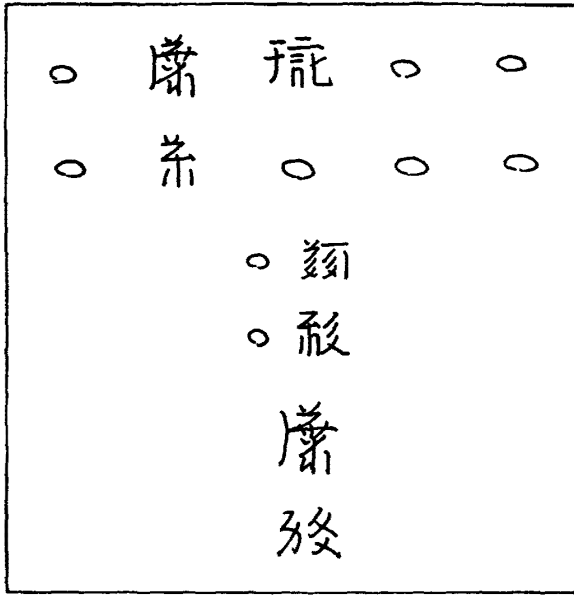
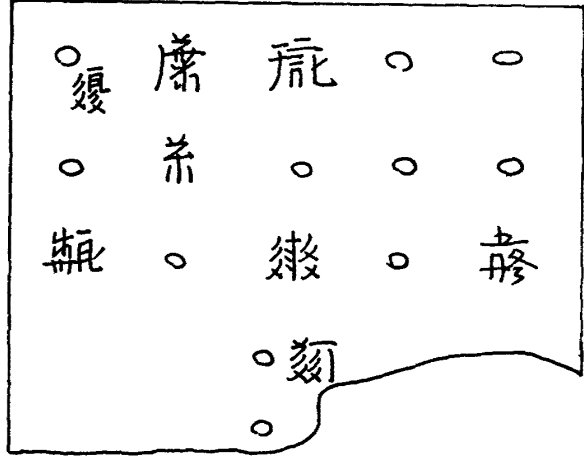


図101 平声92韻・上声85韻 No. 622



No. 623 (下部が欠ける)

左側上下には丸印がある。No. 623 の韻図 (1b) は、一段目喉音の丸印の右下に書き込みがあるのと三段目重唇・軽唇音，牙音，喉音の枠に西夏字が記入される点で，No. 622 と異っている。そして No. 623 は流風音の右下の文字以下の部分が欠ける。筆者は平声92韻・上声85韻の韻母を -ir と推定した。No. 623 に書き込まれた文字は  $\text{?yir}$  (平86) と読める。その文字は，非緊喉音であり，この平92韻母の緊喉母音 -ir との関連を示したのであろう。

『文海』平声韻各小韻代表字と反切，そしてそれらに相応すると考え得る上声韻形式をあげる。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
					羸	重唇 独	ph-ir(?)
92. 1	羸	羸頰	牙170	k-ir	纒	牙 66	kh-ir
2	糜	羸頰	正齒 16	tš-ir	羸	正齒 16	tš-ir
3	糸	羸頰	齒頭 28	ts-ir			
4	頰	羸頰	流風126	t-ir			
5	羸	羸頰	流風158	ɸz-ir	纒	流風158	ɸz-ir

6	𪗇	𪗈	重唇 83	p- <sup>w</sup> ir
7	𪗉	𪗊	牙 56	k- <sup>w</sup> ir
8	𪗋	𪗌	牙 独	k- <sup>w</sup> ir
9	𪗍	𪗎	喉 独	ʔ- <sup>w</sup> ir

上記の反切下字は、つぎの二類にまとめ得る。

反切下字	I a	𪗈(𪗉) ⇌ 𪗊	b	𪗋 (平30-i)	-ir
	II a	𪗋 ⇌ 𪗌	b	𪗍 ⇌ 𪗎	- <sup>w</sup> ir

I 類 a は小韻 1 から 4 までに使われ、b は小韻 5 に限ってあらわれる。b は平声30韻 (i-) であり、ここでこの文字が反切下字として使われることは、平声92韻を -ir とする考えを支持する。そして I 類は韻図の一段と二段に置かれ、開口韻 -ir を代表した。II 類 a は小韻 6 と 8 (重唇と牙) に、b は小韻 7 と 9 (牙と喉) にそれぞれ使われ、韻図では三段目に置かれる。これは合口韻 -<sup>w</sup>ir を代表した。換言すると、韻図の一段に正歯音、二段に齒頭音と分配したため、No. 623 では三段目を合口韻にあてたのである。

一段	正歯	牙
	tʃ-	k-
二段	齒頭	○
	ts-	
三段	○	牙
		k <sup>w</sup> -

小韻 1 と 2 の間にある上声韻は、旧版『同音』では、牙音66類に属し、ここでは上声85韻と上声61韻が一類をなしている。

旧版『同音』牙 66

𪗈	𪗉	𪗊	𪗋	𪗌	𪗍	𪗎	𪗏	𪗐	九字一類
上85-ir					上61-i				

旧版『同音』牙音66類に、上声85韻 -ir と上声61韻 -i が同居することは、筆者の再構成形の妥当性を証明する。新版『同音』ではつぎのようになっている。



上声85-ir

75 小類 (六字一類) 絡 統 砒 頰 隄 統

76 小類 (六字一類) 磷 磷 戩 戩 振 振

上声61-ir

上声61-ir 旧版『同音』174  
(二字一類)

旧版『同音』正齒16には、平声92韻と上声85韻が混在するが(小韻2にあたる)、  
新版『同音』では小類20に平声韻、21に上声韻とはっきりと両者を分別する。

旧版『同音』正齒16 上85 平92 上85 平92  
攷 殊 統 統 戩 戩 戩。(七字一類)

正齒17 上85  
隄 戩 統。(三字一類)

新版『同音』正齒20 統 殊 攷 戩 隄 戩 統 統。  
上85 (八字一類)

正齒21 戩 戩  
平92 (二字一類)

『文海』小韻5に相応する旧版『同音』流風158類も、平声韻と上声韻が混在している。

旧版『同音』流風158 戩 戩 戩 統 (四字一類)  
平92 上85 上85 上85

新版『同音』は、ここにあたる部分を欠くため、小類の分割形態を対照してあげることができない。

小韻7と8は、声調の対立を反映した分割であろう。(小韻8は平去声)

『文海雜類』には、平声92韻に属するつぎの文字がある。

後 戩 戩 hir (平92) <落す, 失わせる>

この韻類に属する音節形式は多い数ではないが、二つの韻母と声母の連続関係をつぎにあげる。

韻母 \ 声母	重唇	輕唇	舌頭	舌上	牙	齒頭	正齒	喉	流風
	-ir	ph-?	—	—	—	k-kh-	ts-	tš-	—
-ʷir	p-	—	—	—	k-	—	—	ʔ-	—

韻図101 を筆者の再構成形式をもって書き改めると、右のようになる。No. 622 と No. 623 を統合した形になっている。

○	tšir	kir	○	○
○	tsir	○	○	○
ʷir	○	kʷir	○	pʷir
		○	ir	
		○	ʂir	
			tšir (平92韻代表字)	
			tšir (上声85韻代表字)	

102. 韻図102 平声93韻・上声86韻

韻図102 は、西夏語平声93韻・上声86韻の形式を図示したものである。No. 622 の韻図 (25) では、一段目の牙音と齒頭・正齒音の枠、および流風音の枠の上方に一字記入されるのみである。

筆者は、この韻類の韻母を -iər と推定した。

○	𐰇	𐰇	○	○
		𐰇		
		𐰇		
		𐰇		

韻図102 平声93韻・上声86韻 No. 622

『文海』の平声93韻は齒頭音と流風音の二小韻からなり、上声85韻の所属字は四字あることがわかっている。その両者のつながりを考察しよう。

	平声韻小韻代表字	『文海』反切	『同音』所属小類	再構成形式	上声韻小韻代表字	『同音』所属小類	再構成形式
93.					𐰇	重唇 10	mb-iər
					𐰇	牙 114	k-iər
1	𐰇	𐰇	齒頭 78	ts-iər	𐰇	齒頭 79	ts-iər
2	𐰇	𐰇	流風 66	t-iər			

二つの反切下字は互に系聯して、一類をなしている。

反切下字 𪛗(𪛗) ⇌ 𪛗(𪛗) -iəŋ

重唇音小類10は、𪛗𪛗の二字で一類をなす。共に上声86韻であろう。牙音114(旧版)は三字𪛗 𪛗 𪛗で一類をなし、新版でも同様であるから(12a)、最後の文字も上声86韻である。

小韻1にあたる『同音』齒頭音小類78と小類79は、平声93韻と上声86韻に割当てられる。

旧版 齒頭 78 (新版 89) 𪛗 𪛗 𪛗 平93 tsīəŋ

旧版 齒頭 79 (新版 90) 𪛗 𪛗 𪛗 上86 tsīəŋ

この韻母と連続する声母は、mb-, k-, ts-, t-に限られ、あとの三声母と連続する形式が韻図に登録されたのである。韻図102を筆者の再構成形式をもって書き改めると、右のようになる。

○	tsīəŋ	kīəŋ	○	○
		fiəŋ		
		○		
		tsīəŋ (平声93韻代表字)		
		tsīəŋ (上声86韻代表字)		

No. 622

### 103. 韻図103 平声94韻

韻図103は、西夏語平声94韻の特定の音節形式を図示したものである。No. 622の韻図(26)では、一段目の牙音と喉音の枠にそれぞれ一字があるほか、流風音の枠の上方のみに一字が置かれている。

筆者はその韻母として、-<sup>w</sup>əを推定した。この韻類は平声韻のみで、上声韻としてとくに韻類を設定していないが、あとで示すように、その上声韻形式は実際にはあった。

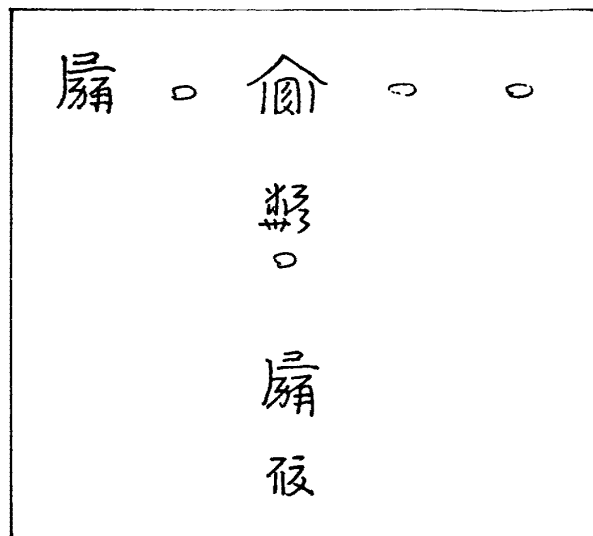


図103 平声94韻 No. 622

『文海』平声94韻は，つぎの六つの小韻からなる。

	平声韻小 韻代表字	『文海』 反切	『同音』 所属小類	再構成 形式
94. 1	俞	務筭	牙 独	k-wɔ
2	筭	務俞	牙 独	ŋg-wɔ
3	籛	翮籛	正齒 独	š-wɔ
4	籛	翮籛	喉 独	ʔ-wɔ
5	籛	翮籛	流風101	ɬ-wɔ
6	籛	翮籛 𪛗	流風101	ɬ-wɔ 濁

これらの反切下字は，二類に分れるが，共に -wɔ を代表していたと考えたい。

反切下字 I a 筭 ⇔ 俞 b 籛 ⇔ 籛 -wɔ

小韻5と小韻6は反切下字も上字も系聯するから，この平声韻の流風音形式は実際には同一であった。それ故韻図では，小韻6の形をもってそれを代表させた。しかし，『文海』で二つの小韻に分割したのは，おそらく声調の相違を根拠としたのであろう。小韻6は平去声であったと推測できる。

流風音にはじまる音節には，上声韻をもついま一つの形式があった。『文海雜類』に登録されるつぎの五字の形である。

籛 籛 籛 籛 籛 [反切] 籛 籛 籛 (平94の上声) 流風37 hl-wɔ.

韻図にはこの形式は記入されていないが，この韻類には k-wɔ ŋg-wɔ š-wɔ ʔ-wɔ ɬ-wɔ hl-wɔ (上) の六形式があったことになる。韻図103を筆者の再構成形式をもって書き改めると，右のようになる。

ʔ-wɔ	○	k-wɔ	○	○
		ɬ-wɔ		
		○		
		ʔ-wɔ (平声94韻代表字)		
		平		

No. 622

以下，平声95韻，96韻，97韻の三つの韻図は，現存していない。あるいはは

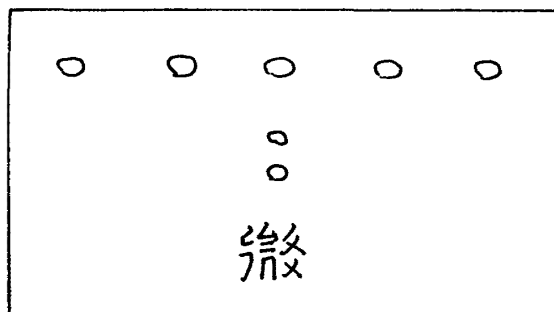
じめからなかったのかも知れない。平声95韻は、これまであげた韻図の記入原則から言うと、いずれの枠にも丸印が置かれる筈である。これらの韻類は僅かな小韻からなっているため、『文海』の小韻に基いて各韻図を作る仕事は、困難ではない。

104. \*韻図104 平声95韻

1 𪛗 𪛘 𪛙 舌頭 175 niqN 根本

2 𪛚 𪛛 𪛜 牙 独 khīqN 梵語・西藏語の表記に使う

小韻1は三字からなり、𪛗<坎> 𪛘<東>の二字も同じ音節形式である。反切下字は互に系聯して、一類である。



韻図104 (推定復元)

反切下字 𪛚 ⇌ 𪛗(𪛘) -iqN(?)

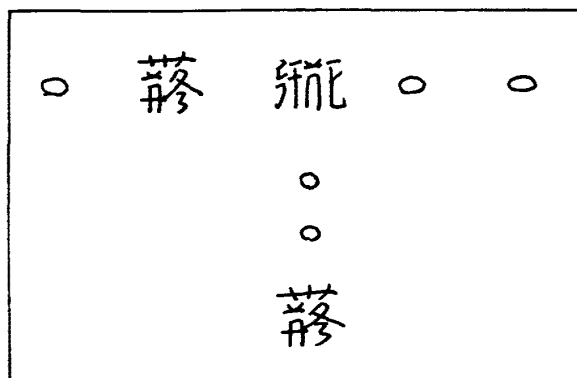
105. \*韻図105 平声96韻

1 𪛞 𪛟 𪛠 舌頭独 t-uN 部姓, 地名また冬至 tuN-tʂi(上9) の意

2 𪛡 𪛢 𪛣 齒頭独 ts-uN 部姓, 地名

3 𪛤 𪛥 𪛦 喉 独 x-uN 紅色

反切下字は互に系聯して一類をなす。いずれも部姓, 地名または漢語を表記する文字である。



韻図105 (推定復元)

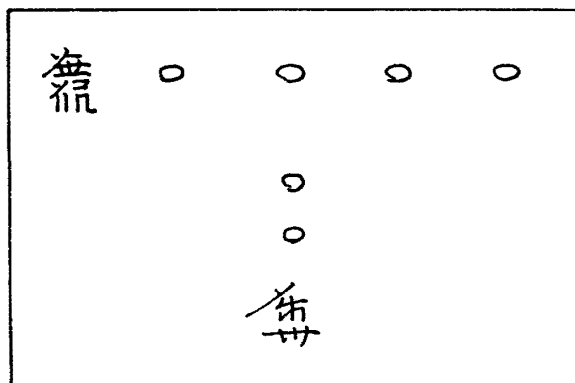
106. \*韻図106 平声97韻

1	𠄎	𠄎	正齒獨	šua(?)	梵語	śvā
2	𠄎	𠄎	喉獨	?ua(?)	光が明らかなさま	

反切下字は系聯して一類をなす。

反切下字 𠄎 ⇌ 𠄎 -ua(?)

小韻2には、いま一字 𠄎 ?ua(?)  
が所属する。いずれも特別な音節形式  
であった。



韻図106 (推定復元)

以上『文海』の組織と韻図『五音切韻』の枠組から西夏人によって認定された西夏語の音節形式を提示した。

『文海』の組織は、さきに述べたように、平声と上声の大区別の上に立って、韻母の差異と声母の対立から、各韻類内部のあり得る音節形式を小韻の形で設定したものである。しかし、反切上字も反切下字も系聯しながら、つまり声母も韻母も同じ単位でありながら、なお且つ二つの小韻に分割されている場合が少なくなかった。ここではそのような分割をもたらしたものは、平声対上声以外の声調の対立、つまり十二世紀の初めの頃から標準的な西夏語において、音韻論的対立となりつつあった平声と平去声の対立を反映したものであろうと考えてみた。

『文海』が編纂され、新版『同音』が刊行された頃の西夏語には、平声対上声のほかに、平去声という実質的には新しい声調が、平声から分裂して誕生していたのであろう。

ここで再構成した西夏語の音韻体系は、いま述べた声調の対立を含めて、将来西夏語を何らかの形で伝承した現代語が発見された時に、その言語の音韻体系との間に一定の対応関係が成立することによって、確認されることになるであろう。十二世紀西夏語とそれを今に伝承する体系とを比較検討できる時期の到来を、期待したい。

## 反切上字系聯表

西夏語の初頭音（声母）には，つぎの単位が認められる。（西夏人の分類名称による）

重唇音	p-	ph-	m-	mb-	šp <sup>(17)</sup> -
軽唇音	f-		w <sup>(18)</sup> -	ɱv-	
舌頭音	t-	th-	n-	nd-	
舌上音	t̪-	t̪h-	n̪-	n̪d̪-	
牙音	k-	kh-	ŋ-	ŋg-	ŋʷ-
齒頭音	ts-	tsh-		ʰdz-	s-
正齒音	tš-	tšh-	ň-	ʰdž-	š- štšh-
喉音	ʔ-	x-			
流風音	l-	hl-	ɬ-	ž-	r- ʁz-

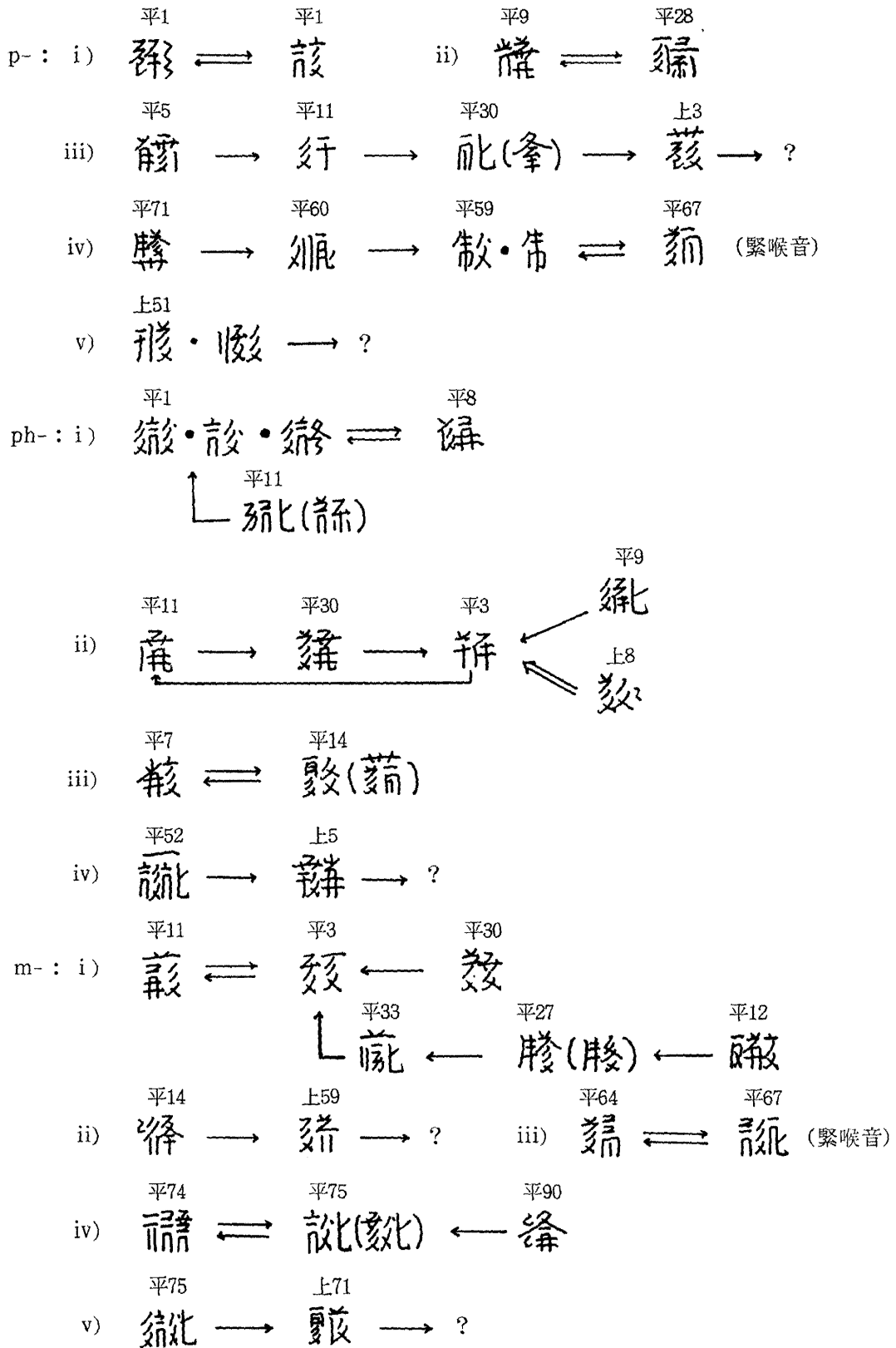
つぎに、『文海』および『文海雜類』において，これらの単位を代表する反切下字の系聯関係をあげたい。まずここで使う符号を説明しよう。

- (1)  $A \rightarrow B$   $A \leftarrow B$     A と B の直接の系聯を示す。たとえば， $\overset{A}{\text{𐰃}} \rightleftharpoons \overset{B}{\text{𐰄}}$   
A の反切上字が B であり，B の反切上字が A である関係を示す。
- (2)  $A \Rightarrow B$     A と B の間接の系聯を示す。すなわち，上声の小韻 A は，それ自体は反切表示をもたないが，それに相応する平声小韻 A' の反切上字が B である関係を示す。たとえば  $\overset{A}{\text{𐰃}} \Rightarrow \overset{B}{\text{𐰄}}$  は，A の反切は不明であるが，それに相応する平声小韻  $\overset{A'}{\text{𐰃}}$  の反切上字が，B であることを示す。
- (3)  $A \cdot B$     A と B が同じ小韻に属し，同音節であることを示す。
- (4)  $A(B)$     A が属する小韻の代表字が B であることを示す。
- (5)  $\overset{\text{平}30}{A}$     反切上字の上につけた数字は，その上字の所属韻を示す。（その文字が反切上字として使われている韻類を示すのではない）

(17) 11世紀の西夏語には，古い子音結合がまだ残っていたものと考えられる。『文海』にはそれがところどころ記録されて，不規則な反切を作っている。

(18) 韻図において，開口韻の枠に入れられた w- はすでに無声音化して [ʌ] であったが，合口韻の枠に入った軽唇音は [w] であったと見られる。一般に子音の変遷については，別稿で論じたい。

重唇音：p- ph- m- mb-





vi)  $\overset{\text{平}65}{\text{𪗇}}(\text{𪗇}) \rightarrow \overset{\text{平}1}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{平}8}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{上}7}{\text{𪗇}}$       vii)  $\overset{\text{上}12}{\text{𪗇}} \rightarrow ?$

$\swarrow \quad \searrow$   
 $\overset{\text{平}8}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}7}{\text{𪗇}}$

viii)  $\overset{\text{平}65}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{平}63}{\text{𪗇}}$  (緊喉音)

mb- : i)  $\overset{\text{平}2}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}11}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{平}3}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}67}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{平}59}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}59}{\text{𪗇}}$

$\overset{\text{平}13}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}7}{\text{𪗇}} \nearrow \overset{\text{平}5}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}11}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}10}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}30}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}11}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}66}{\text{𪗇}}$

$\overset{\text{平}13}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}7}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}5}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{上}11}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}10}{\text{𪗇}} \Rightarrow \overset{\text{平}30}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}11}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}66}{\text{𪗇}}$

ii)  $\overset{\text{平}77}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{上}71}{\text{𪗇}}$

輕唇音 : f- w- mv-

f- : i)  $\overset{\text{平}10}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}29}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}1}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{平}1}{\text{𪗇}}$  (喉音)

$\swarrow$   
 $\overset{\text{平}11}{\text{𪗇}}$  (喉音)

w- : i)  $\overset{\text{上}56}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}65}{\text{𪗇}}(\text{𪗇}) \rightarrow \overset{\text{平}58}{\text{𪗇}}$

$\swarrow$   
 $\overset{\text{平}67}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{平}59}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{平}59}{\text{𪗇}}$

$\swarrow \quad \nearrow$   
 $\overset{\text{平}67}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}52}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{上}60}{\text{𪗇}}$

$\text{𪗇} \quad \text{𪗇}(\text{𪗇}) \leftarrow \text{𪗇}$

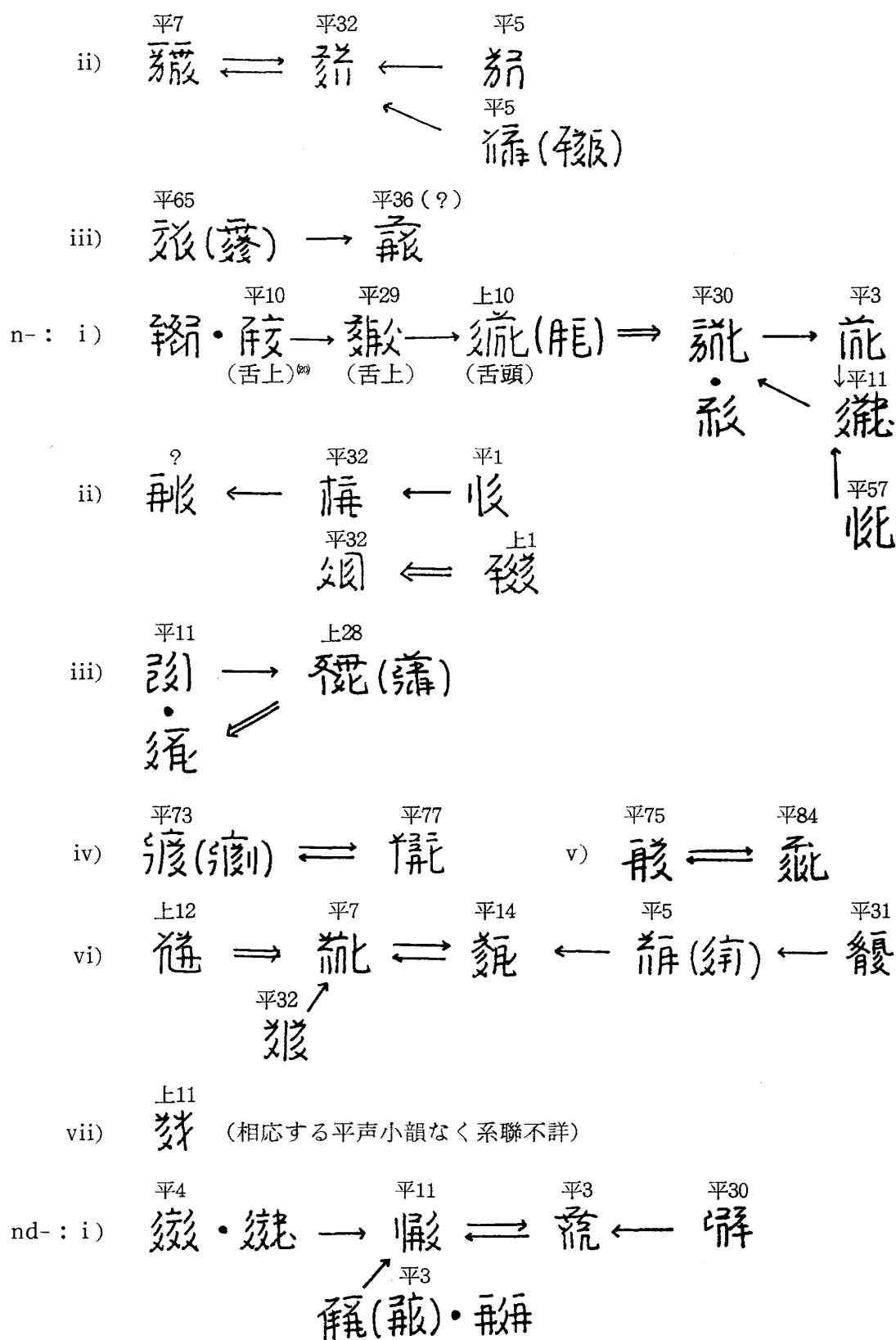
ii)  $\overset{\text{平}74}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{上}72}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{上}72}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}82}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}77}{\text{𪗇}} \cdot \overset{\text{平}77}{\text{𪗇}}$

$\swarrow \quad \nearrow$   
 $\overset{\text{平}78}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}77}{\text{𪗇}}$

iii)  $\overset{\text{平}8}{\text{𪗇}} \rightarrow \overset{\text{上}27}{\text{𪗇}} \rightleftharpoons \overset{\text{平}10}{\text{𪗇}} \leftarrow \overset{\text{平}29}{\text{𪗇}}$

$\swarrow \quad \nearrow$   
 $\overset{\text{上}7}{\text{𪗇}} \quad \overset{\text{平}51}{\text{𪗇}}$





(20) この文字は本来、舌上音 n<sub>+</sub>- であるが、舌頭音 n- と正歯音 ñ- の表記にも使われる。

ii)  $\begin{array}{cccc} \text{平65} & \text{平58} & \text{平14} & \text{平69} \\ \text{嫩} & \rightarrow & \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \\ & & \swarrow \text{上61} & & \swarrow \text{平39} \\ & & \text{𧄏} & \leftarrow & \text{𧄏} \end{array}$

iii)  $\begin{array}{cc} \text{平14} & \text{上29} \\ \text{𧄏} & \rightleftharpoons & \text{𧄏} \end{array}$

iv)  $\begin{array}{cccccccc} \text{平65} & \text{平58} & \text{平67} & \text{平59} & & & & \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \cdot \text{𧄏} \cdot \text{𧄏} \cdot \text{𧄏} & & & \text{(緊喉音)} \\ & & \swarrow \text{上72} & \swarrow \text{上60} & & & & \\ & & \text{𧄏} & & \text{𧄏(𧄏)} & & & \end{array}$

牙音：k- kh- ŋ- ŋʷ- ŋg-

k- : i)  $\begin{array}{ccc} \text{平11} & \text{平3} & \text{平9} \\ \text{𧄏} & \rightleftharpoons & \text{𧄏} \leftarrow \text{𧄏} \cdot \text{𧄏} \end{array}$

ii)  $\begin{array}{cccc} \text{平9} & \text{平4} & \text{平27} & \text{上4} \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏(𧄏)} & \rightleftharpoons & \text{𧄏} \leftarrow & \text{𧄏(𧄏)} \\ & \swarrow \text{平33} & & & & \\ & \text{𧄏} & & & & \end{array}$

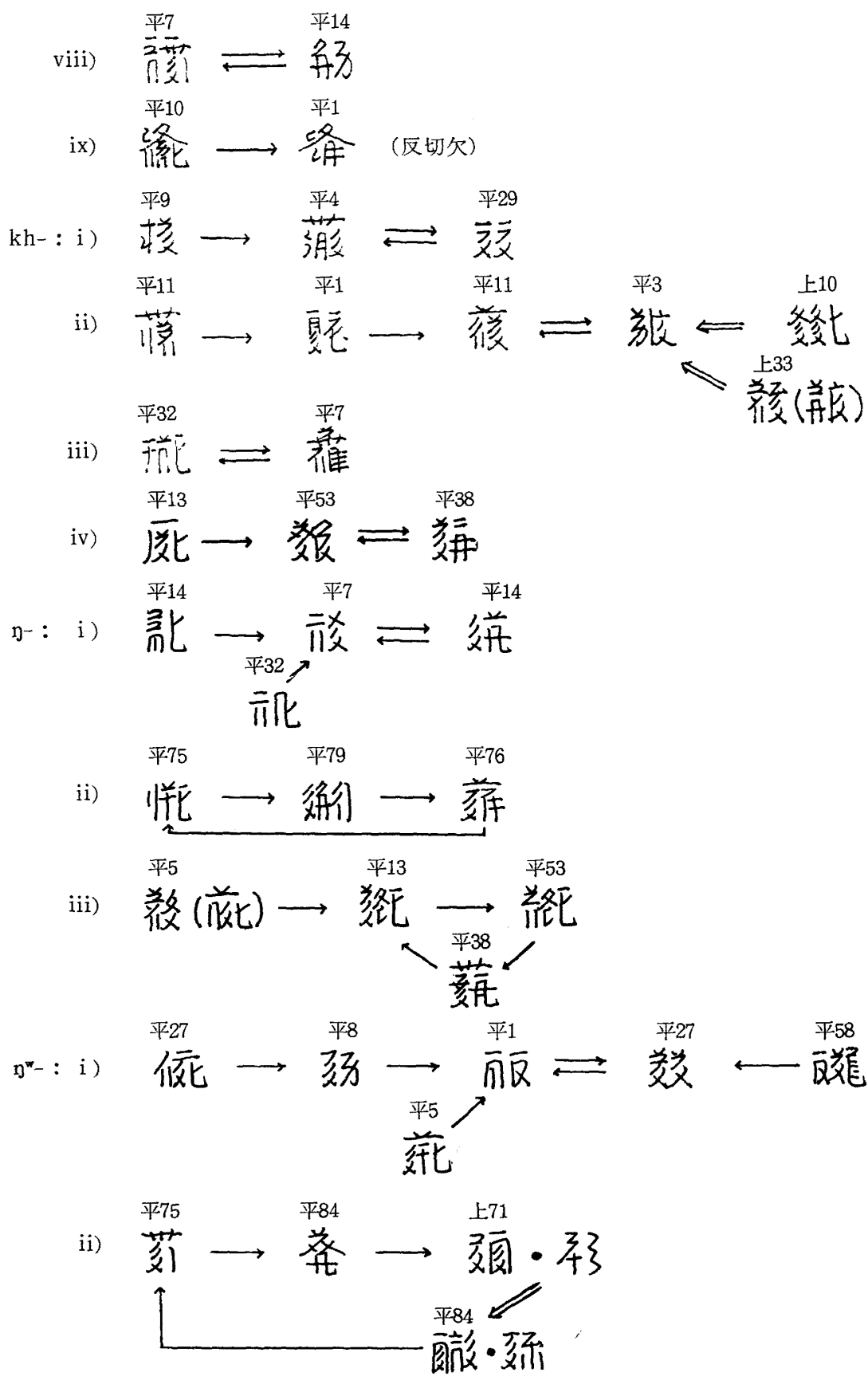
iii)  $\begin{array}{cccc} \text{平5} & \text{平32} & \text{平53} & \text{平38} \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \end{array}$

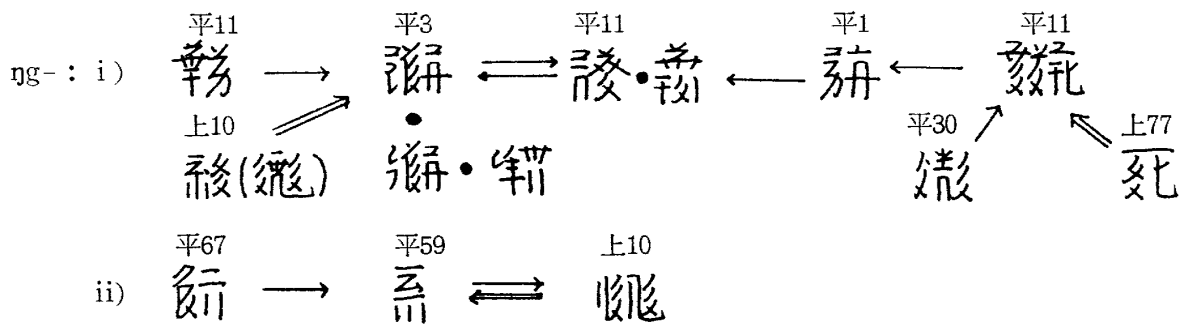
iv)  $\begin{array}{ccc} \text{平11} & \text{平30} & \text{平11} \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \rightleftharpoons & \text{𧄏} \text{ (合口)} \end{array}$

v)  $\begin{array}{ccc} \text{平66} & \text{平58} & \text{平78} \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \rightleftharpoons & \text{𧄏} \cdot \text{𧄏} \text{ (緊喉音)} \end{array}$

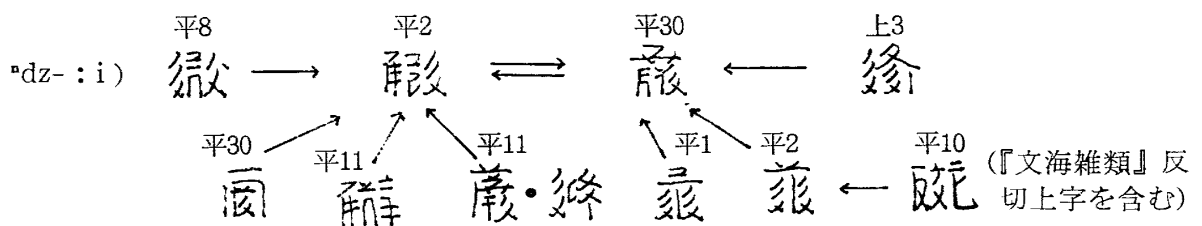
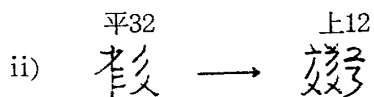
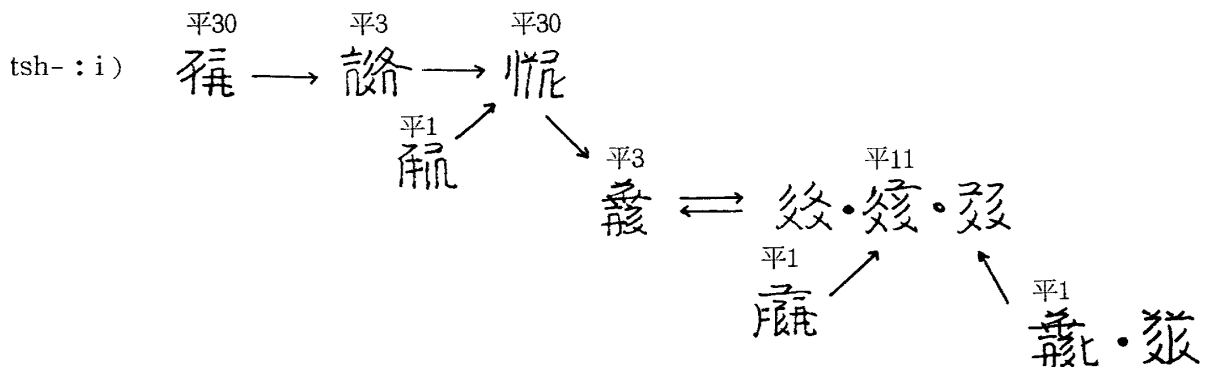
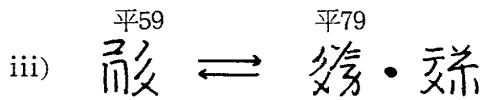
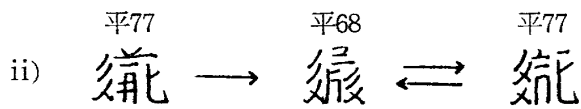
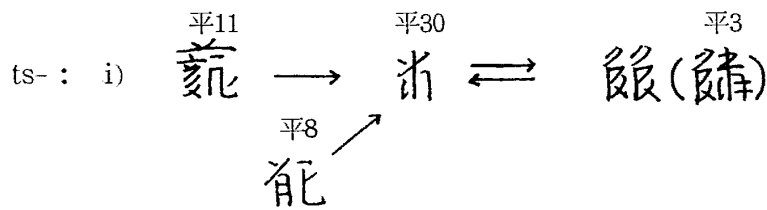
vi)  $\begin{array}{ccccccc} \text{平59} & \text{平79} & \text{平76} & \text{平92} & & & \text{上72} \\ \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} & \rightarrow & \text{𧄏} \rightleftharpoons & \text{𧄏} & \leftarrow & \text{𧄏} \\ & \swarrow \text{平75} & \swarrow \text{平59} & \swarrow \text{平67} & & & & \\ & \text{𧄏} & \text{𧄏(𧄏)} & \text{𧄏} & & & & \end{array}$

vii)  $\begin{array}{cc} \text{平79} & \text{平92} \\ \text{𧄏} & \rightleftharpoons & \text{𧄏} \end{array}$





齒頭音 : ts- tsh- <sup>n</sup>dz- s-



- ii) <sup>平61</sup> 頤 · <sup>上52</sup> 靺 ⇌ <sup>上61</sup> 頤 ← <sup>上52</sup> 靺 (『文海雜字』反切上字)
- s- : i) <sup>平30</sup> 該 → <sup>平11</sup> 該 → <sup>平1</sup> 該 → <sup>平11</sup> 該 → <sup>上3</sup> 靺 · <sup>平3</sup> 靺 ← <sup>平30</sup> 靺  
<sup>平11</sup> 該 → <sup>上28</sup> 靺
- ii) <sup>平7</sup> 靺 ⇌ <sup>平14</sup> 靺 (靺)
- iii) <sup>平11</sup> 靺 · <sup>平30</sup> 靺 ⇌ <sup>平30</sup> 靺
- iv) <sup>平67</sup> 靺 → <sup>平69</sup> 靺 → ? <sup>上52</sup> 靺 (反切なし)
- v) <sup>上29</sup> 靺 → <sup>上12</sup> 靺 ⇌ <sup>平7</sup> 靺 (『文海雜字』反切上字)

正齒音 : tš- tšh- ʳdž- š- štšh-

- tš- : i) <sup>平9</sup> 靺 → <sup>上26</sup> 靺 ⇒ <sup>平9</sup> 靺 → <sup>平2</sup> 靺 ⇌ <sup>平10</sup> 艾 · 靺  
<sup>平29</sup> 靺 ← <sup>平16</sup> 靺
- ii) <sup>平32</sup> 靺 → <sup>平7</sup> 靺 ⇌ <sup>平14</sup> 靺
- iii) <sup>平79</sup> 靺 · 靺 → <sup>平59</sup> 靺 ⇌ <sup>平67</sup> 靺 · 靺 ← <sup>上52</sup> 靺 (緊喉音)
- iv) <sup>平59</sup> 靺 ⇌ <sup>平69</sup> 靺 (緊喉音) v) 靺 (所屬韻不詳)
- tšh- : i) <sup>平34</sup> 靺 → <sup>平29</sup> 靺 → <sup>平2</sup> 靺 ⇌ <sup>平10</sup> 靺 ← <sup>平57</sup> 靺  
<sup>平26</sup> 靺 ← <sup>平10</sup> 靺 ← <sup>平10</sup> 靺 (靺)
- ii) <sup>平32</sup> 靺 ⇌ <sup>平14</sup> 靺 (靺) ← <sup>平59</sup> 靺 ← <sup>平9</sup> 靺 ← <sup>平28</sup> 靺

iii) <sup>平61</sup>薊 ⇌ <sup>平59</sup>薊 (緊喉音)

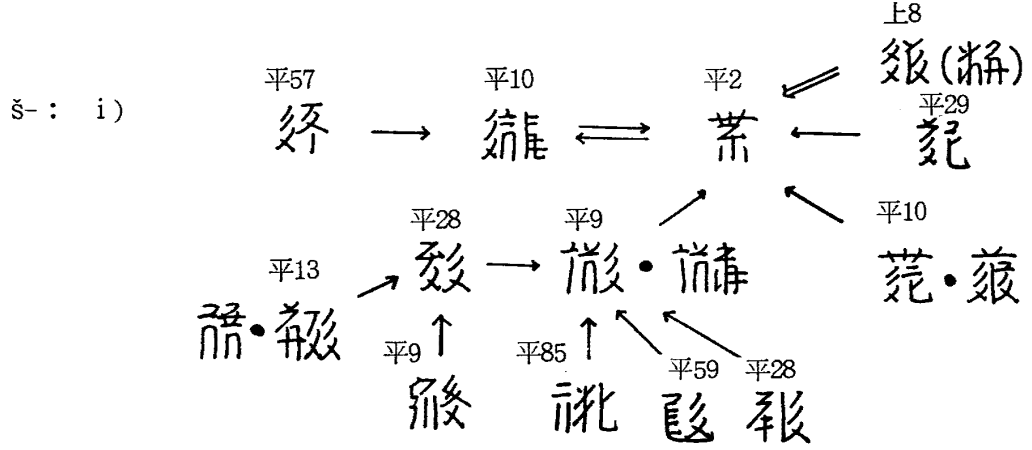
iv) <sup>?</sup>薊(薊) → <sup>平10(?)</sup>薊 v) <sup>上6</sup>薊 (反切なし)

<sup>平57</sup>薊 → <sup>平67</sup>薊 ⇌ <sup>上52</sup>薊 (『文海雜類』反切上字)

ii) <sup>上9</sup>薊 ⇌ <sup>上40</sup>薊 (『文海雜類』反切上字)

iii) <sup>上32</sup>薊 → <sup>?</sup>薊 ← <sup>平2</sup>薊 iv) 薊 (所属韻不詳)

v) <sup>上28</sup>薊 → 薊 (『文海雜類』)



ii) <sup>平29</sup>薊 ⇌ <sup>平2</sup>薊

iii) <sup>上9</sup>薊 ⇒ <sup>平2</sup>薊 ⇌ <sup>平10</sup>薊 薊 (所属韻不詳)

iv) <sup>平14</sup>薊 ⇌ <sup>平7</sup>薊 ← <sup>平32</sup>薊 薊 (所属韻不詳)

štšh- : <sup>上9</sup> 薊 <sup>上80</sup> 薊 <sup>平56</sup> 薊

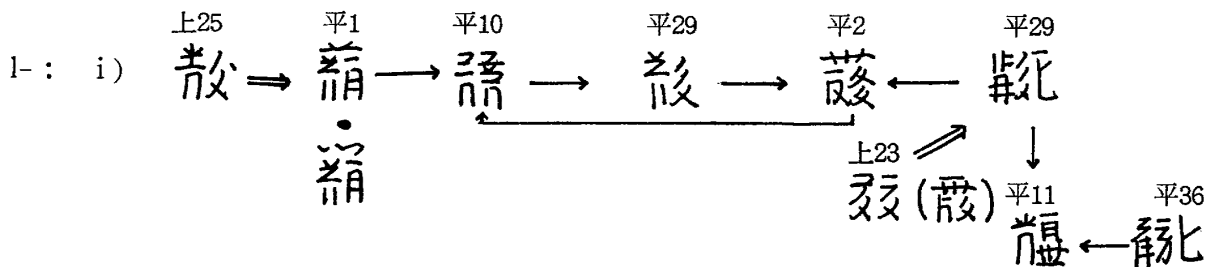
喉音 : ?- x-<sup>(2)</sup>

(2) ?y- ?w- と ?- は、反切上字で弁別されていない。

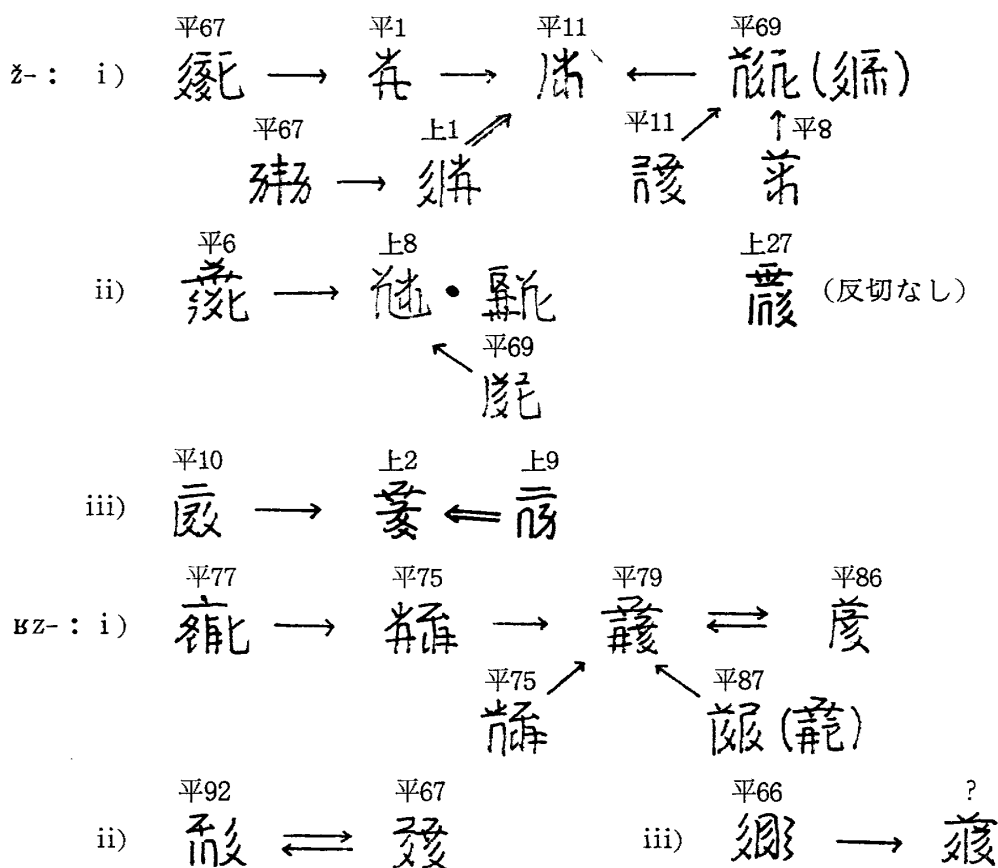




流風音：l- t- hl- r- ʁz-



- ii) <sup>平7</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平14</sup> 齏  $\leftarrow$  <sup>平5</sup> 齏
- iii) <sup>平7</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平14</sup> 齏  $\leftarrow$  <sup>上51</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  齏 (所属韻不詳)
- iv) <sup>平63</sup> (齏)  $\rightarrow$  <sup>?</sup> 齏 (所属韻不詳)
- v) <sup>平14</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平32</sup> 齏 (齏)  $\rightarrow$  <sup>平7</sup> 齏 (齏)  $\rightleftharpoons$  <sup>平36</sup> 齏
- h- : i) <sup>平67</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平58</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平67</sup> 齏 · 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平3</sup> 齏  $\leftarrow$  <sup>平69</sup> 齏
- ii) <sup>平59</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平29</sup> 齏
- iii) <sup>平92</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>上60</sup> 齏 · 齏 · 齏  
 $\uparrow$   
<sup>平59</sup> 齏
- hl- : i) <sup>上10</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平4</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>上10</sup> 齏  $\leftarrow$  <sup>平3</sup> 齏  $\leftarrow$  <sup>平30</sup> 齏
- ii) <sup>平69</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平14</sup> 齏
- iii) <sup>平14</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>上6</sup> 齏
- iv) <sup>平11</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平30</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  齏 (所属韻不詳)
- v) <sup>平58</sup> (齏)  $\rightarrow$  <sup>上8</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  齏 (所属韻不詳)
- r- : i) <sup>平77</sup> 齏 · 齏  $\rightarrow$  <sup>平86</sup> 齏  $\rightarrow$  <sup>平79</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平76</sup> 齏  
 $\nearrow$   
<sup>平75</sup> 齏 (齏)
- ii) <sup>平79</sup> 齏  $\rightleftharpoons$  <sup>平76</sup> 齏 (齏)



(22) 拙論(中)(p. 7)の平声一韻小韻5, 6, 20をつぎのように訂正する。

5	苒	苒苒	舌頭 31	th-u
6	苒	□苒	舌頭146	n-u
20	苒	苒苒	舌頭 独	n-u <sub>2</sub>

補注1) もしそうであれば、反切下字Ⅱ類が合口韻を代表したことになり、l<sup>w</sup>əwであった可能性 [p. 63] が大きい。韻図の二段目に丸印が記入されていない事実と合わなくなる。

補注2) この音節は、韻図の位置から言えば、正歯音の無声無気 tš- にはじまる tšar<sub>2</sub> であった [p. 146]

と考えざるを得ないが、『掌中珠』では、**苒** <誠>と系聯する **苒** <皮>に尼責、**苒** <罪>に尼責(?)の漢字表音がある。したがって、韻図では tšar<sub>2</sub>、『掌中珠』では <sup>o</sup>džar<sub>2</sub> の関係にあったことになる。